

資料

(昭和五十七年十月)

第二十七回「合宿教室」(霧島)感想文集
——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

—“合宿教室”27年の歩み—

回数	年度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	" 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	" 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	" 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	" 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	" 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	" 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	" 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	" 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	" 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	" 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	" 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	" 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷寛蔵・木内信胤
14	" 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	" 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	" 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	" 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	" 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	" 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	" 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	" 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	" 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	" 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	" 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	" 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	" 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・小柳陽太郎
27	" 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
累計・参加人員			8,133名	

第二十七回 “合宿教室(霧島)” 全参加者の感想文と和歌詠草



霧島よりの眺望

と き 昭和五十七年八月八日(日)から十二日(木)まで
 ところ 鹿児島県・霧島国立公園「霧島ホテル」
 参加総数 三二一名

目次

“はしがき”に代へて……………	理事長・小田村寅一郎……………	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳……………		5
「合宿教室」の日程表(四泊五日)……………		6
第27回 “合宿教室”のあらまし……………		7
感想文と第二回目の“和歌詠草”……………	参加者全員……………	31
和歌詠草……………	合宿中の第一回目の創作作品……………	124
あとがき……………		142
カメラ・レポート……………	37枚(32ページから104ページまで、右ページに掲載)	

はしがき に代へて

小田村寅二郎

(本会理事長・亜細亜大学教授)

昭和三十一年の本会創立以来、第二十七年目を迎へての「合宿教室」は、本年は八月上旬の四泊五日間、九州・鹿児島県・霧島国立公園において開催いたしました。霧島での開催は六回目に当りますが、宿舎は前回と同じく「霧島ホテル」でした。

全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君は、旅装を解く時間も無く開会式に列席されましたが、参加学生を代表して、九州大学法学部四年の榎本伊市君が、「この四泊五日間を、お互ひに心を開いて思ふ存分に語り合はうではないか」と訴へたのに対して、全参加者は、「この合宿は、自分から進んで飛び込んでいかなくては」との気持にさそはれていったやうであります。場所もよし、空気もよし、霧島連山を窓外に見るすばらしい環境の中で、今年の合宿教室はこのやうにスタートいたしました。

お招き申し上げた講師の、齋藤忠先生、黛敏郎先生、幡掛正浩先生は、それぞれお心こもる御講義をして下さいました。それを一言も洩らさず聴かうと熱心に聴き入る参加者たちでしたので、場内には、ピーンと張りつめた緊張感がみなぎり、この「合宿教室」ならではの、真摯な求道の間が日を追ふにしたがつて、次第に充実感を深めていき、まことに有難いことでした。

「学問」と「人生」と「祖国日本」と「世界平和」といふこの合宿教室が掲げるいつもながらの四つの命題は、本来、一連の関連性と脈絡とを保って説かれるべきものでありながら、それらがバラバラに教説されてゐるいまの日本の学園生活であつてみれば、この「合宿教室」に参加された諸君が、「学問・人生・祖国日本・世界平和」の四つの命題を、わが身心に統一的に把握しようと努力して下さつたことは、何より嬉しいことでした。はじめのうちは、いろいろの抵抗や反感を持

たれた方もをられました。が、終幕に近づくにつれて、濃淡の差こそあれ、全参加者諸君は、今日の学園が、心を鍛へることの重要性を忘れて、学問が単に知的偏重に墮してゐることの欠陥について、何がしかの認識を持ってくださったやうであります。

参加者諸君が、さきの三先生の御講義をはじめ、多くの講師・助言者諸氏の懇切な指導によって、せめてここで、「学ぶといふことは、一体どういふことか」について、また「知識の伝達が主軸となつてしまつてゐる現代日本の大学は、果してこれでよいのか」、さらにまた「人と交はるには、どういふ心掛けで自分の心を整へて相対すべきか」などについて、その心の底に、もし少しでも感得して下さつた何ものかがあつたとすれば、それこそ、今後の学究生活で大切に生かしてゐるかにたいして、必ずや氣付かれる所があらうかと思ひます。実は、その時点から出発し直して下さることこそ、今の日本が最も待望してゐる所だ、と思ふのであります。

さて、この「合宿教室」本来の課題であります所の「一人の真正なる日本人いでよ」の念願のもとに、具体的には、

一 「国」とか「国家」とかを考へる場合に、抽象概念として考へがちになるのをやめるとともに、ともすれば、政治権力の面からだけで国・国家を考へたり、政治体制だけを優先して考へようとしたりする現代の学園内における一般的风潮の「つまらなさ」に気づいて、これらの迷蒙から、各人各様の勇氣を出して、われとわが心を脱出しようとして努力してください。

二 わが国民は有史以来、「天皇」といふ御方を国民生活の中心にいたたいゐながら、全国の多くの大学では、依然として「天皇廃止論・消滅論」が盛んに講説されてゐる現状を注視して、「天皇」についても、ピラミッドの頂点といふ風な浅薄な体制的な見方だけで見ても思ふ愚かさ気づいていただけたこと。そして、改めて歴代天皇の大御心を、残されてゐる無数の御製―天皇の御歌―を拝読して、具体的に直接的にお偲び申し上げようとする氣運が生れてきたこ

と。

その他、「交友においては、まごころをこめての交はり方」「読書に際しての輪読の持つ深い意味合ひ」、さらには「読む書物の選び方の如何が、その人の人生に重大な関係を持つに到ること」など、さまざまな問題が真剣に討論されました。

さて、ここに編じたこの『感想文集』は、全参加者が「解散の間ぎは」に走り書きしてくださったものであります。全文をそのまま載せ得なかったのは、紙面の都合でやむをえぬことで、ご容赦いただきたいと存じます。「この文集全体の編集」は、海上自衛隊・一等海尉の鏗信弘さん、防衛施設庁・技官の山根清さん、日本興業銀行・行員の小柳志乃夫さん、東レ・社員の加藤多夏詩さん、日産自動車・社員の内海勝彦さん、日産自動車・社員の福島徹男さん、ならびに在京者多数の協力によって進められました。また、巻末の第一回目の「和歌詠草」については、熊本市役所勤務の折田豊生さんが、また「各人の感想文の末尾の和歌」は、亜細亜大学・専任講師の東中野修さんと戸田建設・技師の青山直幸さんが、それぞれ多忙な日常をさいて、編集に協力してくださいました。

この文集をお書きくださった方々、お読みいただく方々にお願ひ申し上げたいことは、どうか全ページを通してご判読いただきたいといふことであります。なほ、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当たりまして、本年もまた、朝野からお寄せいただきました得難い御支援に対しまして、会員一同に代り心から厚く御礼を申し上げます。



「第27回宿教室」記念撮影（参加者 321名）於・霧島ホテル

参加者

（学生班 六十二大学）（洋数字は参加学生数）

- 東北大 1 東京大 1 一橋大 1 防衛大 13 和歌山大 1
- 岡山大 2 福岡教育大 9 九州大 12 佐賀大 9 宮崎大 5
- 長崎大 4 熊本大 13 鹿児島大 8 熊本女子大 1 長崎県
- 立国際経済大 1 早稲田大 16 慶応大 1 拓殖大 12 亜細
- 亞大 16 中央大 1 青山学院大 1 国学院大 3 東京経済
- 大 1 高千穂商大 8 明星大 1 多摩美術大 1 神奈川大
- 2 関東学院大 1 専修大 1 千葉工業大 1 独協大 2
- 日本大 1 東海大 1 共立女子短大 2 中京大 1 立命館
- 大 1 同志社大 1 京都産業大 1 京都女子大 1 高野山
- 大 1 大阪商大 1 近畿大 1 関西外語短大 1 甲南大 1
- 広島女学院大 2 広島修道大 1 徳山大 4 八幡大 1 西
- 南学院大 9 福岡大 5 中村学園大 3 中村学園短大 1
- 九州女子短大 1 産業医科大 3 久留米大 1 佐賀女子短
- 大 2 筑紫女学園短大 1 熊本商大 1 熊本短大 1 熊本
- 音楽短大 1 鹿児島経済大 1 活水女子短大 4

計二〇五名（うち女子四十一名）

（社会人・教員班）会社員、小・中・高教員など

計二九名

（招聘講師）三名（大学教官有志協議会・国民文化研究会）

七四名（見学参加者）一名（事務局）九名

総合計三二一名

第27回「寄宿教室」日程表—昭和57年8月(8日(日)) 4泊5日間
12日(木)

主催(大学教育有志協議会
社団法人・国民文化研究会

	8月8日(日) (第1日)	8月9日(月) (第2日)	8月10日(火) (第3日)	8月11日(水) (第4日)	8月12日(木) (第5日)
(注) ↓					
学生会参加者は、 一、所属八名前後の班編成です。 二、開会式・合宿趣旨説明・諸注意伝達 三、(班別自己紹介) 『日本への回帰第17集』 (班別輪読) 四、(合宿導入講義) 福岡教育大学教授 山田輝彦先生 (青年体験発表) 笠首一朗氏・竹下鉄郎氏 磯貝保博氏 五、夕 食 入 浴 散 歩 六、(班別討論) 七、(青年体験発表) 笠首一朗氏・竹下鉄郎氏 磯貝保博氏 八、夕 食 入 浴 散 歩 九、(班別討論) 十、(10:00) 就 床 (清 灯)	6:30 (起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操) 8:00 (8:00) (講義) 国際政治評論家 ジュンタイムズ 顧問 齋藤 忠 先生 10:00 (10:00) 10:10 (10:10) (質疑応答) 齋藤忠先生 10:40 (10:40) 10:50 (10:50) 12:00 (12:00) 昼 食 1:00 (1:00) 『聖徳太子の信仰思想と日本文化創成』 国文研理事長・並細 重大教授 小田村寅二郎先生 による 2:00 (2:00) 2:50 (2:50) 3:00 (3:00) 4:20 (4:20) 4:30 (4:30) 6:00 (6:00) 夕 食 入 浴 散 歩 8:00 (8:00) 10:00 (10:00) 10:30 (清 灯)	6:30 (起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操) 8:00 (8:00) (講義) 作曲家 黛 敏郎 先生 10:00 (10:00) 10:10 (10:10) (質疑応答) 黛 敏郎先生 10:40 (10:40) 10:50 (10:50) 全員写真撮影 (11:10) (班別討論) 12:00 (12:00) 昼 食 1:00 (1:00) 昼 食 (1:30) (和歌創作導入講義) 物産辺商店取締役社長 室 賀 久 先生 (2:30) レクリエーション 高千穂登山 (5:30) 夕 食 入 浴 散 歩 (和歌提出) (7:30) (講 話) 小林国明先生・加納祐五先生 (8:15) (懇親会の説明) 室賀久大郎氏 (8:30) 慰霊祭執行 (9:30) (班別懇談) (10:00) 就 床 (清 灯)	6:30 (起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操) 8:00 (8:00) (講義) 伊勢神宮・文教部長 幡掛正浩先生 10:00 (10:00) 10:10 (10:10) (質疑応答) 幡掛正浩先生 10:40 (10:40) 10:50 (10:50) (班別討論) 12:00 (12:00) 昼 食 (1:00) 未 定 (1:30) 3:00 (3:00) 3:10 (3:10) 4:10 (4:10) 4:20 (4:20) 4:50 (4:50) 5:00 (5:00) 6:00 (6:00) 夕 食 入 浴 散 歩 (7:30) (7:30) 9:00 (9:00) (夜の集ひ) (10:00) 就 床 (清 灯)	6:30 (起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操) 8:00 (8:00) (講義) 運営委員長所感発表 (8:20) 8:20 (8:20) 参加者による (全体感想自由発表) (9:50) 合宿をかへりみて 国文研理事長・重大教授 小田村寅二郎先生 (10:20) (10:30) (班別懇談) 及び 感想文執筆と 第2回短歌創作 12:00 (12:00) 閉 会 式 (このあと昼食) 1:00 (解 散) 1:30 3:00 3:10 4:10 4:20 4:50 5:00 6:00 7:30 9:00 10:00 10:30	

(合宿心得)

1. 同じ班の人々のあひだに限らず、全参加者一体となつて、心の交流をはかつていただきたい。
2. 上記の日程は、合宿中途において一部変更されることもある。
3. 集合は迅速に行ふこと。
4. 講義の時間には、会場に講義開始5分前までに、必ず入場すること。
5. 講義のはじめと終りは正坐し、司会者の指示に従つて講師に礼をすること。
6. 講義中は服装・姿勢に留意し、度を過ぎたやうな不作法は慎むこと。
7. 講義会場、自室をとはず、部屋に入るときは、スリッパをぬぐときに、必ず向ふむきに、そろへてぬぐこと。
8. 質問は、司会者の指示をうけて行ひ、質問者は、質問のはじめに
① 班名 ② 学名と学年(社会人は就職先) ③ 氏名を、明瞭な言葉で告げること。
9. 講義会場における席順は、常に移動するが、必ず班別に、指定の場所にまゝまつて、着席すること。

第27回「合宿教室」のあらまし

第一日

(八月八日・日曜日)

昭和五十七年八月八日、全国各地の大学・職場から、三百二十一名の学生・青年・助言者たちが、暑中遠路をものともせず、合宿教室の開催地・鹿児島県の霧島国立公園「霧島ホテル」へと集まって来た。会場入口には「友よ！ と呼べば友は来りぬ」と墨痕鮮かに書かれた横幕が、参加者一同を迎へてゐた。この地は、遠く、錦江湾・桜島を望む、合宿にふさはしい景勝の地である。

開会式

「第二十七回全国学生青年合宿教室」は、熊本大学三年、堺美智雄君の力強い「開会宣言」によって、四泊五日にわたる研鑽の幕を開けた。「国歌斉唱」の後、参加者一同は、戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊(みたま)に對し、一分間の黙禱を捧げた。

続いて、主催者を代表して「国民文化研究会」理事長・小田村寅二郎先生が、

「この合宿では、大学間の格差や学年・年齢の違い等、いはゆる外的な区別を一切取り払って、一人の日本の青年として平等な立場で語り合ひませう」

と呼びかけられた。次に大学教官有志協議会を代表して、前徳山市長、現在徳山大学理事長兼学長の高村坂彦先生が、

「小田村先生を通してこの合宿に深い関心を持ってゐました。今回、徳山大学から数名の学生と共に参加し、日本にとつての根本的な問題に皆さんと共に取り組んでゆきたい」

と挨拶された。ついで、参加学生を代表して、九州大学四年の榎本伊市君が、

「人が互ひを信じ合つて、心を開いて語り合ふ時に、本当の知恵が行き交ふと、かつてこの合宿で、小林秀雄先生が御話しになりました。しかし、私達の日常で、このやうなことが何と少なくなつてゐることでせうか。この合宿でその世界を取戻したいと思ひます」と参加者に訴へた。

続くオリエンテーションでは、本合宿の運営委員長・古川修氏（日産自動車㈱・38歳）が登壇、合宿の班構成及び運営について説明したあと、

「私の学生時代は学生運動が激しく、学園は殺伐としてゐた。その時にこの合宿に参加し、祖国・人生・学問について真剣に考へる場があることを知つた。当時の学生が直面してゐた問題——これからの日本をどうしてゆくか——の本質は今も変わつてはゐない。十八年経つて現在は先輩といふ立場だが、自分が学んできたことを伝え、又君達と一緒に四泊五日を勉強してゆきたい。」

と参加者全員に訴へられた。続いて、合宿生活の細部にわたる注意事項が、指揮班長・長澤一成氏（九州大学医学部・25歳）によつて参加者全員に伝えられた。この後、直ちに全参加者は、各自に割り当てられた班室に入り、合宿参加の動機や、日頃の生活ぶり等を交へた「自己紹介」を行ひ、続いて、昨年の「合宿教室」のレポートである『日本への回帰——第十七集』の輪読に入った。

合宿導入講義「原点としての明治——祖国・人生・学問を統一する視点の確立のために——」

福岡教育大学教授 山田輝彦先生



先生は、「私共、友人や親族を先の戦争で亡くしたものとつて、この八月といふ月は悲しく、切ない月であります」と語り始められた。そして、戦後三十七年間続いてきた平和が単なる僥倖に過ぎず、私達の意志と努力によつて克ち取られたものではないこと、又、憲法問題、無条件降伏論争、大東亜戦争に対する評価など、戦後の思想的混乱が、「思想と言論の自由」といふスローガンに巧みに覆ひ隠された占領軍の手になる言論統制に端を発してゐることを指摘された。就中、大東亜戦争に関しては、東京裁判の欺瞞性を説かれ、「これは、勝者の敗者に対する復讐劇である」と

いふパール判事の言を引用され、その復讐劇の恐怖の前に、戦後、日本人の大東亜戦争観は、徹底して改造されたと語られた。そして、「事實は事実としてよく学んで欲しいが、どうか、私達の同胞が戦った戦ひを、東京裁判のキーンン検事の眼で裁くといふことだけはやめて欲しい」と訴へられた。次いで、そのやうな思想的混乱をよそに、物的繁栄を遂げ、その代償として、史上稀に見る精神的貧困を来した現代日本を分析された後、明治時代について「皆さんは、明治に就いて、重税と弾圧と女工哀史といふ暗いイメージを持ってゐるでせう。しかし、歴史は単眼でなく複眼で見ることが必要です。ある意図をもって明治の暗い出来事を抽出して並べれば、『明治暗黒史』は出来上る。しかし、私は明治が如何にのびのびとした潑刺たる精神に満ちた時代であったかといふことを示したいと思ひます」と語られ、三條実美の「遣欧米特命全權大使送別の辞」を引かれ、その潑刺たる言葉の響を味はって欲しいと、それを朗読された。次に福沢論吉に触れて、民権論者、平等主義者といふレッテルを貼って事足りりとする福沢理解を諫められ、論吉にとって民権と国権は車の両輪であったことを強調された。又、「文明論之概略」「通俗国権論」を引かれ、論吉が透徹したりアリズムの眼で高邁な理想——真の意味での個人の独立、国家の独立——をみつめてゐたことを忘れてはならぬと説かれた。その後先生は、独歩の「愛弟通信」、日本海海戦に於る連合艦隊司令長官東郷平八郎の「大本営への打電」、啄木の歌「国葬の日」、晶子の「佐久間大尉を傷む歌」、乃木將軍の遺言・遺詠に触れてゆかれ、最後に「明治といふ時代の全貌を、明暗共々、哀惜も込めて勉強し直して下さい」と結ばれた。

講義の後、全参加者は班室に戻り班別討論に入った。私達は今迄、大東亜戦争に対して、自分の眼で見るといふことを怠り、借物の言葉で語つてゐたのではないか、歴史に対する複眼とはどういふことか、平生かへりみることなく過してゐる根本に就いて各班で討論が繰広げられた。

なほ、かうした班別討論は、合宿全日程を通じて各講義のあとに行はれ、感じたままを各自の言葉で語り合はうと注意しあひながら討論を行った。そして、回を重ねるごとに熱気を帯び時に反発しあひ、また共感しあひながら、参加者相互の交流は次第に深められて

いった。

第二日

(八月九日・月曜日)

合宿の日程は、毎朝六時三十分の起床に始まり、洗面をすませた参加者は、揃って朝の集ひに向ふ。「国歌斉唱、並びに国旗掲揚」「ラジオ体操」「連絡事項の伝達」が行なはれ、一同、今日一日を過ごす心の準備が整へられる。

講義 「主権回復三十年、いま再びアジアの危機——祖国の明日を憶ふ——」

国際政治評論家 齋藤 忠 先生

今回で二度目の御登壇であられる齋藤先生は、元読売新聞、ジャパントイムズ論説主幹等を経られ、特に、国際問題の幅広い分野に於て、豊富な経験と高い見識を持たれた現代一流の国際政治評論家であられる。

先生は、冒頭に、「今日は私が日頃より心を碎き悩んでゐることを聞いて頂け、有難く思ひます」と述べられ、講義に入られた。

まづ現代日本の容易ならぬ動向として、反核運動、教科書問題、米国との経済摩擦、また国内部の動きを挙げられ、これらの背景にある根深い問題について論じてゆかれた。

それから、ソ連の軍備をめぐる動きについて、先生は「ソ連は、過去数十年の間、全てを犠牲にして軍備の増強をはかってきた。昨今、経済力等にひずみが見られるが、その路線に変更はない。又、過去に於ては米国との緊張緩和策と思はれたSALTIも、実は、ソ連の優位性を認めさせた条約であって、ソ連にとっては、軍事上一貫した政策である」と指摘された。そして、ソ連のSS20配備に対する、ヨーロッパに導入された米国の核兵器をめぐる広がった反核運動について、「反核運動もソ連の世界戦略の一つ



であり、実質的に、米国の核封じ込めを目的とするものであることに注意すべきである」と述べられた。

続いて、かうした国際状況下にある日本の現状について、先生は「日本は戦後、大変な経済的繁栄を遂げたが、国防に關しては、こちらがおとなしくしてゐれば、攻めてくる国はあるまいといふ脆弱な風潮が蔓延してゐる。かうした論理は實際成り立ち得るであらうか」と問ひかけられた。更に、昨今の教科書問題について、その背後にある日本弱体化を策す勢力によるプロバガンダの影響、極東裁判に於て断罪された南京大虐殺の虚構性、そして、国内の共產主義体制の内部批判をかはし、日本批難へ目を向けさせんとする中国の思惑について論じられ、「さりながら、教科書問題にある最も根深いもの、それは、過去への憎悪をかきたて、日本国民をして、祖国への愛情を失はせんとすることである」と訴へられた。

また先生は、先のフォークランド紛争を取り上げられ、英国から一万余キロ離れた小島に艦隊を派遣した際のサッチャー首相の『今日、自国の栄光を守る為、自国の運命を賭ける』といふ言葉を紹介されて、「以前の日本もさうであった。日露戦争では、同盟でさへ負けるであらうと信じた戦ひに挑み、遂にアジアに於て初めて西洋に勝った戦ひであった」と述べられた。そして、「今、私達に必要なことは、祖国の危急をはつきりと知ることである。国を守るといふことは、日本の歴史、伝統、精神を守ることであり、又、愛する者の幸せを守ることなのです」と力強く語りかけられた。

最後に、先生は、「この国を守る為、祖国の大義を信じて死んでいった人々のことを思ふと、私は今も胸が痛んでなりません」と述べられ、戦時中出征していった先生の教へ子のことを偲ばれつつ、共に歌はれたといふ『同期の桜』を壇上でしみじみと歌はれ、御講義を終へられた。(尚、お帰りの朝、先生より次のお歌をお寄せ戴きました。)

たそがれの湯の町恋し逝きし日の夢はなつかし霧島の宿

いつの日かまたも訪ねむ霧島のいで湯の宿のかくも恋しき

足どりをひとと合はせて降りゆく浮雲白き森蔭の坂

野佛の優しき面を仰ぎゐてなにゆゑか消えぬ佛の在り

絶えまなく雲動きぬて霧島の陽ざし明るき山の町ゆく

ホテルの門に風に揉まれて立つわれに君ほほ多みて近づきましぬ

若き日のビスバーデンの想ひ出をひとと語りつつ湯の瀧に立つ

日向の海の遠き潮音を聴くごとくいで湯にひとり眼を瞑づるひと

講義「輪読導入講義」——黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』——

国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授 小田村 寅二郎 先生

先生はじめに、黒上先生の御本を学生の頃より読み続けてこられた事を振り返られつつ、黒上先生の御人格を紹介された。



続いて、輪読の意義について、『文献文化史的研究』といふ言葉を引かれ、「先人の言葉を読むといふことは、単に語義の解釈にとどまるものではありません。それは、言葉に籠められたいのちを心の内に感得することであり、そこに沁み沁みとした共感を味はふことなのです」と語られた。

そして先生は、聖徳太子の十七条憲法の条文を味はってゆかれ、その第一条『和を以て貴しと為し』の『貴しと為す』といふ御表現に注目されて、「和といふものは貴いのであるといふ様に悟りすまして、人に教へ諭さうといった表現ではありません。和を貴いものとして、共に努めてゆかうではないかといふ御気持ちで籠められてゐるでせう」と述べられた。

また、十五条の『私に背きて公に向ふは、是れ臣の道なり』との御言葉について、「戦前、滅私奉公といふ言葉が盛んに使はれました。私を滅して公に奉じよといふのですが、生きた人間が私心を完璧に捨て去る事は出来ないものであって、互ひ

に言ひ交すべき言葉ではない。それに対して、太子の御言葉は、滅しようとしても滅し切れぬ私心ではあるが、出来る限りそれに背を向け、公に向はうと言はれるのです」と表現の微妙な違ひが深い意味合ひを持ってゐることを説いてゆかれた。このあと先生は、黒上先生の文章を味はひながら読み進められ輪読の手引を示された。

御講義の後、青年研究発表をはさんで計四時間にわたる輪読にはいった。難解な書物ではあるが、講義を導きとして皆で取組むうちに、氷の溶けるやうに次第に著者の気持が沁みて来て、太子の言葉に自然に真向つてゐる自分に驚いた時間ともなった。

青年研究発表

最初に九州大学医学部六年笠普一朗君が登壇した。笠君は、臨床実習で不治の病に罹った少女と出合ひ、そのカルテに「父上面会に来られ、娘さんの元気なのを知り安心して帰られる」との主治医のメモを読んで、「父上や主治医の少女をいとほしむ堪へ難い程の思ひが痛切に偲ばれた」と述べ、「小林秀雄氏の言はれる歴史に対する「愛惜の念」とは、この少女をいとほしむ父上や主治医のやうに一つの客観的歴史事実の裡に湛へられた人の思ひを感じいとほしむ心ではないだらうか」と訴へた。そしてそのやうな歴史への接し方に目を開かされる機縁となつた今上天皇の終戦時の御製二首

爆撃にたふれゆく民の上をおもひくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

を紹介し、「私は最初に参加した合宿教室で班員と共にこの御製を味はふうちに、国民の身の上を案じられ何としても戦争を止めさせようとされる陛下の御心が感じられて来て目頭が熱くなり、今まで一つの知識でしかなかつた終戦といふ歴史事実が胸にいきいきと蘇ってくる気がしたのです。このやうな歴史の学び方を積み、患者さんの思ひを偲びつつ医学の道を進みたい」と決意を述べて発表を終へた。



続いて、宮崎県立日向高校教諭の竹下鉄郎君（熊本大・理・53年卒）が登壇した。竹下君はまづ、最初に赴任した盲学校で、目の見える自分に心を開かうとせずやる気さへ無くしてゐる生徒達に対し、彼らの苦しみを深く偲びつつ叱咤激励しながら付き合ふ中で、次第に心を開いてくれるやうになったといふ体験を述べた。

次に着任した日の職員会議で入学式の国旗国歌の問題が話し合はれた際、否定意見が次々と発言されるのを見てやむにやまれず「私は小さい時からごく自然な気持で国歌を歌って来た。今回も是非歌って欲しい」と発言し、非常な反発を受けたと述べ、「国家⇨権力⇨悪といふ図式が教育現場にまで持ち込まれ、自国に愛情を持つといふ生徒の自然な感情がねぢ曲げられてゐる。目が見えたと否とに關はず同じ日本人として心のつながりを実感するといふ健全な同胞感を育てることこそ大事ではないのか。その後も折ある毎に自分の思ひを訴へ続けたところ、私の言葉に耳を傾けてくれる先生が次第に増えていった。当時は新任で無我夢中だったが、この二つの経験が新しい学校に変はった今でも、自信となり支へとなつてゐる」と述べて発表を終へた。

最後に(例)講談社勤務の磯貝保博氏（中央大・商・42年卒）が登壇した。

冬山で遭難した会社の同僚の救出をめぐる、会社と個人のかかはり方、とりわけ会社生活の中でいかに自分の生き方を統一してゆくことが難しいかを話した。しかし、自分の生き方を統一して生きてゆかうとする姿勢が会社生活の中でも必要であることを訴へ、その姿勢を吉田松陰の「かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」といふ歌や「至誠にして動かざる者未だこれあらざるなり」といふ言葉を紹介しながら、松陰の生き様に学んできたことを述べた。そして最後に、「生き方といふものは会社生活によって学生時代とは変はるものだと考へがちだが、そんなことはない。学生時代にきちんと志を決めたことが今でも基本となつてゐる」と述べ、発表を終へた。



第三日

(八月十日・火曜日)

講義「日本の心」

作曲家 黛 敏 郎 先生



か」と訴へられた。

次に神道についても、豊かな自然への感謝と美への敬虔の念を母体として神道は生まれ、山や島を初めとする大自然のあらゆるものが、その信仰の対象になってゐると述べられ、「この日本古来の神道と、美と神とが相争ふとする西洋の一神教とは、本質的に異なるのです」と彼我の相違を指摘された。続いて、和歌・音楽・茶道等の文化伝統も、生活を大自然の営

先生はまづ、天孫降臨の地である高千穂峰の麓でこの合宿教室が開催されることは大変意義深いことであると語られ、日本の神話の数々を、「現代人の多くはこれが事実であったかどうかを問題にするが、さういふ着目よりも、神話は古人の心の真実として捉へるべきである」と語られて、講義に入ってゆかれた。更に先生は、古事記の中の『豊葦原千五百秋瑞穂国』の言葉に込められた古人の思ひを偲んで、「日本人は古来より国土の豊かな恵みへの感謝の念から、自然と共に生きるといふ人生観を育んできたのです」と指摘された。そして新嘗祭について、「天皇が新穀を召し上がることで大地のエネルギーを体中に貯へられ、翌年に向けて身体を蘇生させられるのです。それは天皇が国民を代表して行なはれるのであって、この事で天皇は自然と人間とを結びつける要となられるのであり、単なる権威の象徴ではない」と述べられた。又「この事は鎮魂の祭とともに日本人の生活に密着してゐた事であるが、天皇と軍国主義を直結させる如き浅薄な考へによって、日本人が如何に多くの大切なものを失ってきた

みに一体化させるといふ日本人の人生観に根ざしたものであることを、数々の具体例を挙げられて強調された。

最後に先生は、国家と個人とは対立するものであるといふ戦後の根強い国家観に言及され、「このやうなとらへ方は本来的に日本人にはなじまないものであり、最近喧しい憲法問題も単なる政治的問題としてではなく、一国の文化の問題として見直さなければなりません」と講義を結ばれた。

講義「和歌創作導入講義」

亜細亞大学教授 夜久 正雄 先生



先生はまづ、「歌をつくらうと思ふと自然がよく見えてくる。この合宿を貫いてゐる精神とは、心を統一する力であり、心が働くからこそ、自然も美しく見え、歌ができる」と言はれ、和歌創作が私達一人一人の内心の問題であることを喚起された。

さらに、「自然との一体感を味はひ、心の中にその一体感を実現してゆく事、これが歌をつくるといふ事なのです。そしてこのいとなみは、万葉以来、永々とうけつがれてきたものであり、歌をつくることは伝統につながるといふ事を実践することに他ならない」と歌をつくる意味を述べられた。

そして、歌をつくる上での具体的注意の中で、一首一文についてふれられ、「歌の調子をひとつにまとめる事が心の統一なのです。花一本をじつと見てゐると花の方に心が移る、自然と一体になる、さういふふうに心をひとつにしなければならぬ」と言はれ、さらに言葉を選ぶ過程で、虚偽や誇張がとりはらはれ、自分自身の真の思ひを見つめさせられる、自分を知らることになると指摘された。

そして、明治天皇御製

わが心われとをりをりかへりみよしらずしらずも迷ふことあり

を拜誦され、「自らを知るといふことはつらいことだけれども、そこに喜びがある。自分が足らはぬ人間だと痛感した時、悔しい、情けないと思ふけれども、そこに喜びがある」と言はれ、歌は人生のしるべとなることを訴へられた。

最後に、「四泊五日の集中した精神でつくれば、歌は必ずできます」と初めて歌をつくる人を励まされ、御講義を終へられた。

和歌創作導入講義の後、全参加者は、小雨に煙る中、霧島神宮、高千穂河原へと短歌創作に出かけた。生憎の霧ではあったが、靈峰高千穂の姿を垣間見ることでもでき、緊張した日程にあって楽しいひと時でもあった。

講話

最初に登壇された、元若松商業高校校長・小林国男先生は、旧制佐賀高等学校での同信の友であった高瀬伸一さんとの交遊の跡を、『統いのちささげて』（国文研叢書No.20）及び遺された厚い日記帳を手にながら語ってゆかれた。

「入学当初は顔に幼さの残る彼でありましたが、この合宿教室の先駆けでもある比叡山全国大合宿に昭和十六年に初めて参加したことが彼の人生の大きな転機となったのです。彼にとって合宿は、何か大きな命に魂から触れ得た経験だった。それから、彼の、信の生活・求道の生活ともいふべきものが雄々しく開始されました。人生における『入信』、『求道精神』の重大な意義を思はされます」と、ありし日をついに、生き生きと語られた。

更に、幼くして両親をなくして育った弟妹によせた高瀬さんの和歌を朗詠されながら、人生に随順するますらをぶりを偲んでゆかれた。最後に高瀬さんの遺歌

荒れくるふ海のはたてはますらをのいのちのすてどいさぎよくゆけ



を紹介され、

「高瀬君にとって『荒れくるふ海』とは戦場であった訳ですが、この歌は、私に、人生そのものが『荒れくるふ海』だといってくれてゐるやうに思へてなりません。この歌をよんでみると、今も彼は、私を見守り励ましてくれてゐるのだと思はれてなりません」と語られ、生死を超えた同信の繋りに参加者は胸を打たれたのであった。

続いて、元日特金属工業㈱常務取締役・加納祐五先生は、冒頭に、

「この合宿に参加された皆さんとは、初対面の方ばかりなのですが、私にとっては古くからの懐しい友のやうな思ひがしてなりません。それといふのも、班別討論等で『いかに生くべきか』といふ重大な問題に皆が共に心を寄せてゐるからでせう。でもこれは理屈や知識で解決できるものではありませんね」と語りかけられ、『高僧和讃』から、法然上人との出会ひを畏む親鸞の言葉を引用されて、「このたびむなくすぐべしや」と全参加者に呼びかけられた。

更に先生は、善悪是非を硬直的に裁断するところからはものの本当の有様はつかめないことを指摘され、「ただゆたかにおほらかに」自分の思ひを歌ひあげる短歌創作の意義を強調された。

最後に先生は、学生時代を顧みられて、

「私の揺らく信も師友に支へられて今日まで貫くことができましたのです。皆さんも得難い先生や友人が身近にあるのだといふことを見失はず、学びの道に励んで下さい」

と語りかけられた。一同は、先生の広やかな御心に包まれるやうな思ひをもって耳を傾けたのであった。

慰霊祭

「慰霊祭」に先立ち、宝辺矢太郎氏（南陽工業高校教諭・29歳）によって慰霊祭の説明が行なはれた。その後、昼間の雨

雲は残らず去って星かげ清らかな夜空の下に、それぞれの思ひを胸に抱いて祭壇の前に全員が整列した。慰霊祭は、お祓ひに代へて故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

の和歌朗詠から始められた。そして戦時・平時を問はず祖国日本の為に尊い生命を捧げられた全ての祖先の御霊をお呼びするのため、最敬礼で黙禱を捧げた。献饌の後、参加者一同を代表して、高木尚一先生が祭文を奏上され、その後、宝辺正久先生が、明治天皇御製を拝誦された。拝誦された御製を左に記載致します。

明治天皇御製

雁

ひとつらはきえ行くそらの霧のうちにまたあらはれて渡るかりがね
をりにふれて

いづこよりいづこにわたる雁ならむ軒端まぢかく声の聞ゆる

月

たたかひのにはに心をやりながらむかひふかしぬ秋の夜の月

道

しきしまの大和ごころをさきだてて道ある国とひとにいはれむ

歌

世の中にごとあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

述懐

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわがおもふこと

凱旋の時

外国にかねざらししますらをの魂も都にけふかへるらむ

をりにふれたる

いかにぞと思ひやるかな戦のをはりし後の民のなりはひ

天

ながむればしたしまれけりひさかたの天つみそらははるかなれども

続いて、玉串を奉奠した後、全員で『海ゆかば』を歌ひ御霊をお送り申し上げ、慰霊祭を終へた。なほらひの御神酒をい
ただいた参加者は、班別懇談のため各班室へと入っていった。

第四日

(八月十一日・水曜日)

講義「日本の文化伝統と祭祀」

伊勢神宮文教科長 幡 掛 正 浩 先 生

先生は日本の古典について、本居宣長の「此道は、古事記・書紀の二典に記されたもろの事跡のうへに備はりたり」といふ言葉を引かれ、「事跡」を離れて教訓的教へを抽出し、道徳教説とするが如き觀念論を批判され、すでに存在する「事跡」をよみ味はってゆく中に、人生如何に生くべきか、すなはち道の問題をいかに明らかに明らめてゆくかを考へねばならぬと指摘された。さらに、現在の日本が抱へる人口増加、極度の工業化等に伴ふ余断を許さぬ危機に対しても、古典はすなはち借りものでない我々



自身の文化伝統を見直すことからこそ、創造的知恵が生みだされると述べられた。

次に先生は「祭政一致」といふ言葉について「くらしとまつりが一緒といふ意味です。ただそのことが、現在の私達には実感として伝はってこない。そこで説明しようとする。それでますますわからなくなっているのです」と言はれ、我々の祖先が長い歴史を通じて稲作を生活の基盤とし、その喜びや苦しみを託して祭を行ってきた「事跡」の重大さと、それを見失っている現在について語られた。さらに天孫降臨の神話に言及され、天孫邇邇芸命は、天つ神の御神勅により、日本に稲をつくりに來られたのである。そして国民は、生産生活の中で自得してゐた実感により、この御神勅を語り継いできたのだと話された。そして年毎の新嘗祭も、天皇が天孫の御祖の御心のままに行なうてをられるのであり、天孫降臨の神話にこめられた理想、希ひを現実の威力とされてゐる祭なのだと言はれ、今上陛下が、吹上御苑に水田耕作をなさるのも、天孫の御使命を御自ら御体現なさるといふ事であると紹介された。だからこそ、御即位されて最初の新嘗祭（大嘗祭）は、これによって初めて天皇に、日本の祭り主として威力を現する神事とされ、皇室第一の重事とされてきたのだと述べられ、中断はあったものの、この大嘗祭が歴代天皇の御即位に際し行なはれてきた意味を明らかにされた。そして源平盛衰記といった大衆読物に、時の帝を「伊勢大神宮の入れ替らせ給ふ」方と表現されてゐることを引かれ、日常信仰であった伊勢大神の入れ替りと説く中に、当時の国民の中にあつた天皇の御姿が、教義や理論によつてではなく、日々のくらしの実感に根づいたものとして息づいてゐたことを思はせられると話され、しかもそれが、大嘗祭といふ祭祀を通して現実のものとなつてゐたのだと語られた。それと同時に、この大嘗祭が皇室典範にも明記されず、今後の継承が危ふいことを訴へられた。

最後に、橿原神宮修復工事の際に使はれたモッコやわらぢを、学問的価値無しとして、一顧だにせぬ風潮を慨嘆され、「自分達の祖先が、心をこめて修復工事に携はつた際のモッコやわらぢをかけがへのないものとして語り守り伝えてゆく。

それをぬぎにして本当の歴史といふものはない。私は先立たねばならぬ身です。どうか皆さん一人一人が、自分の眼で、日本の文化伝統を確かめ伝えていって下さい」と、語気強く一人一人に訴へかけられた。

挨拶

福岡教育大学教授・理学博士 北原重登先生

合宿最後の講義に入る前に、大学教官有志協議会の会員で、福岡教育大学教授、理学博士の北原重登先生に御登壇戴いた。

先生は、「合宿で得たものを、日常生活に生かし継続してゆくことが大切です」と激励された。そして終戦の激しい価値観混乱の中で、「それまで自分が学んできたものが覆され、それが本当に誤りだったのかと、ひとつひとつ反問してゆく中で確信となってきた」と御自身の学生時代の体験を語られた。最後に、「現在科学者として、科学と人生のつながりを問ひ直す毎日です」と述べられ、御講話を終へられた。



講義「天皇の御歌と日本の国から」

福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎先生



初めに先生は、昨日の短歌導入講義で夜久先生が言われた「歌を詠む時は、ある対象に向かって心を一つに統一しなければならぬ」といふ言葉に触れられ、「明治天皇様が御生涯において十萬首の御歌を詠まれたといふことは、天皇様が内心を省みられたことが十萬回あったといふことであり、このやうにして御心を統一して生きてこられたのです」と話された。そして、寺田寅彦の「先生（夏目漱石）から、自然の美しさを自分の眼でみることを教へられた」といふ言葉を紹介され、天皇の問題について考へる場合もまづ自分の眼と心を用ゐて、直かに歴代の天皇様の御歌を讀

み味はってゆくことから始めなければならぬと指摘された。

次に先生は、レジュメに印刷されてゐる明治天皇、大正天皇、今上天皇の御製を一首づつ読み味はってゆかれたが、先生は、御歌の一語一語に心を留められ、その言葉に籠められてゐる天皇の御心情を心を尽して憶念され、私達に語ってゆかれた。その中で、昭和十七年に今上天皇がお作りになった「峯つづきおほむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり」といふ御歌の「ただいのるなり」の言葉に心を留められ、次のやうに語られた。

「平和を守るといふ言ひ方は、今ある平和を観念的にとらへてゐて、そこには自分を常に正義とし、自分と対立するものはすべて悪だとする傲慢な心がある。そのやうな心の状態からは本当に平和といふものは実現されない。天皇様は常に我が身を振り返られて自分自身に厳しくあられ、そして人の心の和を大切にされた方である。この『ただいのるなり』といふ御言葉には、憲法十七条の『共に是れ凡夫のみ』といふ痛感——自分が必ずしも正しいわけではなく、相手が愚かだといふわけでもない、みな賢愚兼ねそなへた人間同士である——が湛へられてゐる」

更に先生は、現在学校教育の中で行なはれてゐる平和教育について言及され、「自分の心の醜さを見つめることなしに平和を唱へることはできない。原爆写真を子供達に見せて平和を教へようとしても、ただ恐怖感を与へるだけであり、そのやうな子供達はいづれ、相手に恐怖を与へることに快感を感じるやうになるのです」と厳しく批判された。そして「天皇様の御歌の調べの中に湛へられてゐる平和な御精神を仰がうとする気持が日本人に養はれてゆかなければ、本当の平和教育はないと思ひます」と語調を強めて語られた。

最後に、「一人一人が先入観に縛られることなく、自分の心を通して、天皇様の御心を知らうとする努力をして欲しい」と語られ、御講義を終へられた。

和歌全体批評

開発電子技術専務取締役 長 内 俊 平 先生

先生は、全参加者の和歌が刷られてある歌稿の中から十数首を選び、一首一首丁寧に批評・添削をしてゆかれた。その際、先生は、まづ一首の歌を読んでの率直な感想を述べられ、作った人の思ひを偲ばれながら、どのやうな言葉でその人の気持ちを正しく表現するかといふことに心を砕いて批評をされた。

学生が作った和歌の中には、講義を聞いて感動したことを歌ったもの、両親や友人を偲んで歌ったもの、あるいは歌を作ることの難しさを歌ったものなど様々であったが、その中で、黛先生が御講義の中で紹介された天孫降臨の神話をそのまま信じて、高千穂の峰を仰いだ時の感動を歌った和歌に、先生は特に心をとめられて、「私達の生き方の中心は信ずることしかありません。良き人、信ずる人の言葉を信じて生きてゆくことは本当に素晴らしいことだと思ひます」と強く語られた。

また、先生は「黒上正一郎先生の御母堂の御文を読み」といふ詞書の女子学生の歌に触れられ、女子班で輪読した「黒上正一郎先生のうたと消息」の中に収録されてゐる、黒上先生のお母様が小田村先生に宛てられた御手紙の一部を紹介されたが、真心を込めて綴られてゐるその御手紙から、お母様の、亡くなられた黒上先生に寄せられる深い御情愛と、小田村先生に対する篤い感謝のお気持ちが、沁み沁みと参加者の心に伝はって来た。

最後に先生は、この合宿教室に寄せて下さった齋藤忠先生の御歌や、その御歌を読まれて作られた小田村先生の御歌、また合宿の運営に力を尽してをられる方々の歌を、時間の許す限り次々と紹介してゆかれた。

この後、各班毎に班別和歌相互批評が行はれた。長内先生の御話を手引として、全員の歌を皆で批評し合ひ、又、一首一首懇切に添削して行ったのである。互ひの心を偲び合ひ、又思ひを述べあふ中から、心の通ひあった研鑽の場が生み出されていった。

最後の夜の集ひ

敵しいスケジュールをこなして来た参加者も、このひとときは合宿の疲れを見せず大いに宴に興じた。各班毎に歌に余興に大いに青年の意気を示した。

「神洲不滅」「進めこの道」の大合唱によって宴が閉ぢられた後も、各部屋では、尽きせぬ語りひが深更まで続いた。

第五日

(八月十二日・木曜日)

四泊五日の合宿もいよいよ最終日となった。四日間の緊張した日々を過した参加者も、今朝は合宿をやり通したといふ充実感に満たされて最後の朝を迎へた。

折から晴天で、広場に掲げられた明治天皇御製「あさみどり澄みわたりたるおほぞらの広きをおのが心ともがな」が、合宿をやり通した参加者の胸に沁み入って来た。

全体感想自由発表

この四泊五日の合宿教室に学ぶ中で感じたさまざまな思ひを、参加者全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間になった。

初めに本合宿教室の運営委員長である古川修氏が「この合宿の先輩として皆に語りたい」と次のやうな所懐を述べられた。「私が学生の頃この合宿に初めて参加したときには、天皇の話などに驚いてとても反発を覚えた。皆さんも多くの感動と共にさまざまな疑問を持たれたことでせう。その疑問を山から降りた後じっくり温めて欲しい。それが学問の端緒であつて、そこから学問は始まるのではないでせうか」と述べ、更に明治天皇御製「もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にた

つ力なるべき」を紹介し、「せつかく擱んだ学問の端緒がここで終つて了つてはもつたない。ぜひ友と一緒に研鑽を積んで欲しい。互ひに鍛へ合ふといふ経験があつて初めて友の有難さがわかつてくると思ひます」と述べられた。

続いて、各参加者が次々と手を挙げて壇上に上がり溢れる思ひを語りかけた。「自分の発言が自分自身の実感からではなく聞きかじりの知識から出てゐることに、班員の指摘によつて初めて気づかされた」「如何なる大義名分があれ大東亜戦争は悪だと思つてゐたが、友と心を通はせつつ互ひに人生觀を鍛へ合ひ宿命を克服して死んでゆかれた先輩たちのことを思へば、簡単に善悪を云々できない厳肅な問題だと考へさせられた」、また妻子ある若い社会人の班長と過ごした学生は「既に社会的地位のある人が、こんなにまで私達に心の底からの思ひを吐露されることに驚くと同時に有難く思った」と語り、「実際に短歌を作つてみて、天皇の御製に様々な思ひが込められてゐることに気づいた」「この合宿で感じたことを学校の友人に分つて貰へるか不安であつたが、心を開いて語る機会さへあれば、同じ日本人だからきつとわかつてくれると思ふ」と訴へた。時には涙を浮かべ、時には笑顔で心からの思ひを率直に述べてゆく参加者の姿は、聞く人達に深い感動と共感と呼び起こした。

全体感想自由発表の後、小田村寅二郎先生が、「合宿をかへりみて」と題してお話しされた。「この四泊五日間、参加者全員が互ひに心を通はせようと精一杯努力し合つた結果、緊張した精神生活を送ることができた。一人ではできないことが、このやうに皆で心をはせてやればできる、さういふことが自分の人生の中に実際にあつたといふことにぜひ心を留めて欲しい」と述べられ、更に、「身近な人の思ひを心を込めて偲び、自分を先立てないで生活する、さういふ心の通ひ合ひを『国民同胞感』といふのです。難しいことだと思ふかも知れないが、私達はこの合宿でさういふ心の通ひ合ふ場を実現できたのではないですか。年齢差や学校差等の外的差別を乗り越え、一人の人間としてつき合ふことが皆の力で実現できたのです。これは素晴らしいことだ。我々の祖先は国民生活の中でそれを実現してゐた。だから日本は滅びなかつたのです。しかし現在の日本人は自分の殻に閉ぢこもつて、それが実現できない悲しい事実がある。どの先生の御講義も今の日本が重い病

気に罹ってゐるといふ御指摘でしたせう、日本を少しでもよくしていくためには、日本が病んでゐると気づいてゐる人と一人でも友となつて、本来の日本人として生きてゆく道を頑張つて作っていくことだと思ひます。日本の国は我々自身の胸の中にあるので、それを大切にしてゆかうといふ気持ちになつたとき健全さが蘇ってくる。その気持ちが国中に広まればもう大丈夫です」と訴へられた。

先生のお話しに、合宿の一コマ一コマが思ひ出され、精一杯学んだのだといふ充実感が湧いてくるやうであつた。

感想文執筆

全体感想自由発表の後、全参加者は班室に戻り、感想文の執筆と第二回の和歌創作を行なつた。これらの感想文と和歌を編集したのが、この「感想文集」である。

閉会式

四泊五日の間、全参加者が心を合はせ精魂を傾けて「祖国と学問と人生」について学び來つた「第二十七回学生青年合宿教室」も、はや閉会の時となつた。まづ国歌が斉唱され、全員の声が一つに融け合つて力強く響きわたつた。

参加学生を代表して、西南学院大学四年の結城誠二君が、「合宿の中で心を動かされた人々の言葉が今後の私達を支へてくれるでせう。さういふ言葉を葉として、日本を守り支へてゆくやうな学問を今後も友と力を合はせてやってゆきませう」と力強く挨拶した。続いて主催者を代表して、国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生が、「私たちは、日本文化を学びもせず蔑視する風潮を正し、建国以來伝はつた日本文化の核心を若い人々に伝へたい一心でこの事業を続けてきた。明治天皇に

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわがおもふこと

といふ御歌があるが、この御製を本当に偲びたい。深い心のこもつた言葉を我が心を傾けてわからうとすることが、学問の第一歩でせう。勉強しようといふのは学問に対する志を立てることです。我々はこの合宿で志を立てようと思つたのではないか。皆と心を通はせつつつ互ひの志を磨き合つて日本の現状に手を取り合つて対処してゆきませう」と、一言一言かみしめるやうに語られ、閉会の挨拶を終

へられた。挨拶のあと、神奈川大学経済学部二年、平野耕治君が力強く「閉会宣言」を行った。最後に、全参加者によって、「進めこの道」(三井甲之作詞、信時潔作曲)を斉唱して、四泊五日に亘った全日程の幕を閉じたのである。式の後、共に学び共に語り合った友との別れを惜しみつつ、来年の再会を約し、霧島の山を下ったのであった。

助言者の紹介

高千穂商科大学・教授	高木 尚一	新日本製鉄㈱・工作事業部・掛長	今林 賢郁
元日特金属工業㈱・常務取締役	加納 祐五	㈱講談社・広告局	磯貝 保博
下関市・㈱宝辺商店・社長	宝辺 正久	神奈川県・湯河原町立吉浜小学校・教諭	岩越 豊雄
㈱中央塩ビ製作所・代表取締役	星野 貢	㈱竹中工務店・電算部・技術課長	稲津 利比古
島根県・玉造温泉・こんや別館・代表取締役	青砥 宏一	熊本県立・熊本西高校・教諭	片岡 健
神奈川県・舞岡八幡宮・宮司	関 正臣	神奈川県立・湘南高校(定時制)・教諭	山内 健生
熊本市役所・収入役	徳永 正巳	福岡県立・直方高校・教諭	小野 吉宣
元福岡県立・若松商業高校・校長	小林 国男	福岡・吉田齒科医院	吉田 哲太郎
農林漁業金融公庫・副総裁	小田村 四郎	亜細亜大学・講師	東中野 修
佐賀県立・佐賀商業高校・教諭	末次 祐司	九州大学・医学部・循環器内科・医師	小柳 左門
㈱ファミリー・常務取締役	松吉 基順	福岡・水崎法律事務所・弁護士	中島 繁樹
サンデン交通㈱・取締役開発部長	加藤 善之	戸田建設㈱・建築設計統轄部・開発計画課	山田 健一
熊本市立・三和中学校・教頭	松浦 良雄	熊本市役所・清掃部・東部清掃工場・技師	青山 直幸
八代市立・第二中学校・教諭	右田 道徳	福岡県立・水産高校・教諭	折田 豊生
佐世保市交通局・営業課長補佐	朝永 清之	福岡県立・小倉高校・教諭	占部 賢志
熊本市立・城西小学校・教諭	満崎 安	鹿児島市立・桜丘東小学校・教諭	坂口 秀俊
航空自衛隊・第四術科学学校・防衛庁教官	村山 寿彦	熊本県立・八代高校・教諭	内山 なな子
九州労災病院・神経内科・部長	田村 潔	鹿児島県・東市来町立・皆田小学校・教諭	白浜 裕
拓殖大学・助教	松本 幹男	熊本県立・人吉高校・教諭	小原 芳久
日産自動車㈱・法規部	古川 修	佐賀県・鳥栖市役所・下水道課	田之上 正明
			西山 八郎

榑埼玉銀行・丸ノ内支店・貸付係
 海上自衛隊・横須賀造船所・企画室
 山口県立・南陽工業高校・教諭
 岡山県立・新見北高校・教諭
 福岡県・私立博多高校・教諭
 岡山県立・福渡高校・教諭
 鹿児島県・吾平町立・神野小学校・教諭
 日本青年協議会・学生局長
 福岡県立・三池高校・教諭
 宮崎県立・日向高校・教諭
 北九州市立療養所・松寿園・放射線科
 大阪府立・野崎高校・教諭
 西南学院大学・聴講生
 九州大学・医学部
 福岡県立・筑前高校・教諭
 九州大学・医学部
 運輸省・港湾局・開発課
 榑三井三池製作所・資材課・倉庫一係
 陸上自衛隊・幹部候補生学校
 福岡県立・遠賀高校・教諭
 日本青年協議会

飯島隆史
 鏗信弘
 宝辺矢太郎
 砂川芳毅
 名和長泰
 小坂博通
 南田武法
 多久善郎
 小柳和孝
 竹下鉄郎
 森田仁士
 絹田洋一
 平尾文洋
 長澤一成
 酒村聡一郎
 笠普一朗
 久米秀俊
 阿川信次
 野田顕龍
 那須三元
 前之園登美子

九州大学・工学部・大学院生

弓立忠弘

水俣市立・水俣第二小学校・教諭

清水禎子

九州大学・工学部・大学院生

松井哲也

合宿運営委員(助言者欄に前出)古川修 稻津利比古 折田豊生

占部賢志

指揮班(助言者欄に前出)小原芳久 飯島隆史 宝辺矢太郎

森田仁士 長澤一成 久米秀俊 野田顕龍

事務局(助言者欄に前出)中島繁樹 西山八郎 鏗信弘 砂

川芳毅

(本会職員)蘇原幸絵 黒岡実

(事務協力者)人吉高校二年・山口栄一郎 同・浅香

哲生 同・塚島靖博 同・白浜一也 同・長田行生

同・鬼坂美貴子 同・鬼塚美穂

記録班 元最高裁判所秘書課員・速記業・西川伍朔

写真班 亜細亜大学・広報室・係長・加藤幸雄

走り書きの感想文集

(各班別に集録)

閉会間ぎはの三十分間で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらいました。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩してゐる跡がお分りいただけることと思ひます。

もろともにしたすけかはしてむつびあふ
友ぞ世にたつ力なるべき

明治天皇御製「もろともにしたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき」が墨痕鮮やかに大書された垂幕が講義室から見える。

人の心に触れて生きるすばらしさ

(二橋大学 商 三年 坂本 慎)

閉会式が間近に迫りつつある今では、友等と離れ離れになることが本当に淋しく感じられます。人の心に触れて生きるという事は何とすばらしい事なのでせうか。皆さん、本当に有難う。それぞれ大学に帰っても、手紙を出し合ったりして短かつたけれども、このすばらしかった四泊五日の日々を大切にしていきたいませう。

短かりし四泊五日の日は過ぎて閉会式の迫りつつあり

別れゆく友らの顔を眺むれば合宿の日々の思ひ出さるる

別れども友の言葉や真心を我は決して忘れざらまし

今後の生活に合宿経験をいかしたい

(熊本大学 工 一年 岩田孝広)

私はこの合宿で二つの事を痛切に感じました。一つは、自分の考えの浅さ、勉強の足りなさです。班員の話聞くにつけ、これではいけないという感じを強くもりました。二つめは、まわりの人たちの心の暖かさです。このことは、とても言葉では表現できません。自分の心にジーンときた、そういうほかありません。この経験を今後の生活の中にかし、自分の視野を広めたいと思います。合宿での経験が、自分の人



講義の演題、垂れ幕作りに余念なき友ら。合宿教室の開催三日前から、20余名の学生が事前の研鑽と準備に努めてきた。

生のスタートとなる、という言葉業を肝に銘じたいと思いません。

合宿の終りにあたりて思ふこと我の心の浅はかなこと

自分の物にするために努力したい

(徳山大学 経 四年 小田克幸)

合宿に初めて参加して得たものが何であったのかが未だ良くわからない。はじめて経験する事ばかりだったので、五日間の内容がただただ頭の中に積みあげられ自分で整理できないのである。ただ、最終日の小田村先生のお話をお聞きして、この経験を自分の物にできそうな気がして落着いた。また、良き友ができて、心を開いて語り合うことができたことが自分の心を落着かせ安心感が生れたように思う。これから先、何物かを育くむことを続けてゆきたい。

我が友と互ひに呼びあふ仲となり心開きて話し溶けあふ

“心”をみつめつつ生きてゆきたい

(早稲田大学 文 三年 増島眞弓)

日本を思うこととは何か。日本を愛するとはどういうことか。人の心を思うとは何か。これらはどういうことなのか、ということはこの合宿を通して学んだように思います。それは、自分の心を常に見つめること、そして、人の心を信じることに、同じ日本人の心を持った人を信じることです。先生方が語られていたこの事が、今自分の中で一番強く心に残って

います。合宿を終えて、再び多くの人と触れる中で、この事を常に心がけて生きてゆきたいと思えます。

思ひをば信じてゆくとふ友とちの姿に我の心はうごく

感無量

(鹿児島経済大学 経 二年 島元道明)

合宿が終ろうとしている今の気持は感無量としか言いようがない。四泊五日の間、緊張と感動と憤慨の連続であった。わずか四日前に出会ったのに、班員を幼い頃からの友人のように感じた。そして、何よりも自分達がこれから進む道の厳しさを知り得た。今はまだちっほけな自分の意志であるけれども、友らと心を一につにすれば、いつの日にか我等の理想を達成し得るとかたく信じている。

力なく学びの浅き我なれど師らの大志をうけつぎゆかむ

和歌創作で多くの事を学んだ

(亜細亜大学 経 二年 森 一郎)

合宿で初めて和歌を創作しました。自分に和歌ができるだろうかと大変不安でした。案の定、なかなかできません。やっと提出した和歌が印刷されたのを見て驚きました。余り時間もかけずにできた歌なので、自分としては出来が良くないと思っていたのが選ばれていたのです。これを見て、和歌をつくるためには、物に感動し、自らそれを表現したくなるような素直な心が必要なのだろうと感じました。又相互批評を

通じて、感じたままを表現することの難しさ、正確な言葉の使い方、相手の心を感じ取ることの大切さを学びました。

我が思ひ思ひをこめて語りたくも言葉にならぬが歯がゆかりけり

合宿経験を社会人としていかしたい

(福岡大学 工 四年 橋口英生)

私は今度の合宿で四度目ですが、新鮮なものに触れたという実感はずらず、むしろ段々濃くなってきたように思います。切々と語られる諸先生方の御言葉は、日頃感じることに鈍くなった私の心と感性を呼びさましてくれました。班での語りでも、初めて参加した人とは思えぬほど、自分の問題を投げかけてくれる友がいて大変学ばされました。来年は社会人となりますが、社会人の一人として頑張つてゆこうと思います。

また会はずと言ひし言葉に友どちは笑みをいつばいうかべてくれし

第二班—男子学生—

心洗われる経験であった

(九州大学 法 二年 與島誠央)

私は二度目の参加です。今年も先生方の表情や言葉の一つ一つに心洗われる思いをしました。私の班では山田先生が御心のこもった助言を与えて下さいました。ある時、靖国神社



「友よ! と呼べば友は来りぬ」 ひぐらしの音が響き、硫黄のにはほひが鼻をつく霧島の山の緑に高々と掲げられた白い垂幕が、はるばるとやって来た参加者に宿舎が近いことを知らせる。

の話になりましたが、先生は、戦死された弟さんの事を話され、靖国神社に参拝する遺族の方々は、亡くなられた人とお話をしに行くんですよ、理論的な事ではすまされない思いの強さがそこにあるんですよ、という話をなさいました。弟さんを偲ばれつつ、私達に語りかけられる先生の表情と御姿をみて涙があふれて仕様がありませんでした。私は先生のまごころに心打たれました。本当に有難うございました。

班別討論の折に山田先生の御話を承りて

朝霧の立ちこめる坂をふりむかず弟君は旅だち給ひぬと

ふりむかずただ歩みゆく弟君のうしろ姿の忘れじとふ

語りつつあふるる思ひに言葉つまりじつとこらへ給へる師の御姿よ

こらへては語りつがるる御姿ををがめばひたに涙あふれく

国家という言葉を実感した

(西南学院大学 文 四年 郷田佳伸)

国家とは何か。これが私にとっての問題でした。この問題に関して長内先生の言葉にふれたときの思いをどう説明したらよいでしょうか。「国を愛するとは、今あなたがたの隣にいる人に優しくしてあげることなんです。親は子を思い、子は親を思う、極々自然な感情なのです」。この言葉を聞いたとき、国家は私の心の中にとけ、強い勢いをもって流れ出すようになりました。実に自然に国家という言葉をとらえることができました。本当に忘れがたい体験をした喜びで一杯です。

声つまらせ目に涙ためなほも語る友の心はいかばかりかな

もっと本を読み、勉強したい

(福岡大学 経 一年 河村 正)

私はこれまで日本や和歌などについてほとんど関心がなかった。しかし、合宿で御講義を聞いて、先生方がどんなに日本という国を真剣に考えていらっしやるかが良くわかった。古人は和歌の中に感激した気持を素直に、また素朴に歌いこんできた。今の私達には、その「心」が必要なかもしれない。日頃から本を読まないの、御講義もあまり理解できず勉強不足を感じた。この合宿を機会として、もっと知識を吸収したいと思っている。

いざ去りて心にのこる霧島のすばらしき風に心あらはむ

問題を解決するために努力したい

(亜細亜大学 経営 一年 吉川理夫)

知識の差と大学の差という当初抱いていた不安は、合宿では全くなく、通常の生活では味わえない経験をしました。合宿が終了しようとする今、私は多くの問題点をもって帰ることになりました。それは、この合宿が問題解決の場ではなく、問題提起の場であったということです。今後はここで提起された問題をいかに解決していくか、自分一人ではなく、友と話し合いながら努力するつもりです。

班別討論解決せむと試みしも迷ひはさらに深くなりゆく

人生に臨む姿勢を学んだ

(宮崎大学 教 二年 池田佳弘)

この合宿において、仲間の語る言葉に耳を傾ける努力を続ける中で、人生に臨む姿勢を漠然ではあるが学んだような気がします。私事にとらわれず、友の想いをくみとろうとして自分を律してゆく姿勢に人生の基本的態度があると思います。正直言って、この姿勢に徹しきれたかと言うと、まるで反対で、つい友の言葉を聞き流し、私事を考えるケースが多く、自分の傲慢さ、謙虚のなさがよくみえてきて、自分の愚かさをあらためて感じさせられました。

混沌としたる心も和歌詠めは徐々に整ふはうれしかりけり

簡単に根本的な真実を見失っていた

(東京大学 理 三年 松岡信也)

この合宿は「反省」し「悔い改め」させられる合宿となりました。合宿に参加してみても、自分が「人間」であり、「日本人」であるというこの簡単に根本的な真実を見失っていたのに気づかされました。班員の友との話しの中に、人生の真剣さを感じ、また、先生方の体験を聞く中に、生と死の狭間に生きる人間の生を見る思いがしました。戦争はお遊びではなく、その中に人間が死んでいくのだという事実、そして、死にゆく者のあとの者への思い、残された肉親の思いの中に論理をこえたものを感じました。天皇の御心などつゆだにも考



全国各地から集ひ来る未だ見知らぬ友ら。いよいよ合宿教室が始まる。

えず、權威の中心としか見ていなかった自分の心の浅薄さに
ただもう恥ずかしい思いがします。

大君の残せし御歌よむなかに広き御心われに迫りく
大君の御顔は知らぬものなれど御歌のなかに御心しのばる

天皇への考え方が変わった

(高千穂商科大学 商 三年 木村伸一)

合宿に参加して天皇についての考え方が大きく変わりました。今までは漠然と象徴と考え、又、品の良いおじいさん、とただそれだけでした。ところが、今上天皇の御歌を知り、その御心にふれることができ、その深さがわかってくるにつれ、私の心はギュッと締めつけられ深々と頭の下る気持でした。又最終日の全体意見発表では、大学に入って初めて、大きな感動の波に心ゆらされ涙しました。

はや五日感動の日々過ぎゆきてこの時はかりは硫黄懐し

第三班 男子学生

「このたびむなしくすべしや」

(亜細亜大学 法 三年 取知浩一)

合宿三日目の夜の講話の時間に加納先生が言はれた「このたびむなしくすべしや」といふお言葉に強く心うたれた。我々の日常の生活ではすぐに一つの答を努力せずに出さうとし、又自らの生をみつめる事なしに過ごして了ひがちです。

何に心を寄せて生きてゆけば良いのかといふ事を考へずして私利私欲だけを追求してゐる事がどんなにつまらない事かを改めて気づかされました。そして、親鸞の「よきひとのおほせをかうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」といふお言葉をみつめながら、これからも学んでゆかうと思ひました。

合宿が終り、バスにて帰る友を見送りし折

来年もまた来ますとふ我が友は身を乗りだして語りたまひぬ
身を乗り出し別れをつぐる我が友の面は笑顔ですがしかりけり

人生の大きな転機となった

(早稲田大学 商 二年 伊香賀 浩)

素晴らしい御講義を聞いてそれを本当に理解したとは言えませんが、私の今まで気づかなかった何かが、漠然とではありますが、見えてきたような気がします。班の皆さんが、自分の言ったことを真剣に考えてくれるなんて夢のような気がしました。自分が何をしたいのか、どういう風に生きたらいいのかと日頃わらにもすがる思いでいた私にとって、この四泊五日の霧島合宿は、私の人生にとって大きな転機となるでしょう。

霧島に別れをつぐる我が胸にひしと残るは熱きおもひかな

自らの怠慢さをも警告してくれた

(産業医科大学 医 一年 生島壮一郎)

僕がこの合宿に来て何よりも嬉しかったのは班の人々の自分の意見に対する反応であった。それは時には自分の意見な

り考え方と相入れぬものであったが、自分の意見を真剣に聞き、鋭いまなざしで反論してくる友の姿に、「うーん、この反応、この手応え」というような快感みたいなものさえも感じたりしたのである。友の真摯な態度に接することができたということは、僕に一種の安堵を与えると同時に、自らの怠慢さをも警告してくれたような気がした。

我が胸を開きて語れば友どちは熱き言葉もて応へてくれけり

友達の真剣な顔、目

(熊本大学 法 二年 野林直哉)

確かに諸先生方の講義は、すばらしかった。解らない事もあった。疑問もあった。何とも言えない感慨深い言葉もあった。しかし、僕にとって、一番うれしかったのは、僕の意見を、思っている事を聞いてくれていて友達の真剣な顔、目なのでした。今までこんなに自分をさらけ出し、語った事なかった自分は、なかなか思っている事が、うまく口には出せなかったが、友は一所懸命僕の心の内にはいつて来て、真剣に聞いてくれた。僕も友の話を真剣に聞こうと努力した。こんな会話は今までの僕にはなかった。本当にうれしかった。

班員と共に考へてくださりし加納先生を思ひて

未熟なる私の言葉を聴きたまふ師のやさしきお顔忘れられず
来年もまた会ひませうよと言ひし師のやさしきお言葉心にしみる

勉強不足を痛感した

(防衛大学 理工 一年 鎌田修一)



開会式。九州大学法学部四年の榎本伊市君は参加学生を代表して、合宿教室に臨む気持を力強く述べた。

この合宿に参加して自分がいかに勉強不足であるかということを感じました。もっとも本を読み、人の話を聞き、人間的に成長しなければならぬと感じました。又、人間的に成長して初めて「国を救う」ということもできるのだと思いました。私は、この合宿の経験を生かして今後自分なりに国家というものを真剣に考えていこうと思います。ほんとうに短かい五日間でありましたが、この五日間というのは、私の一生の中で忘れることのできないものとなります。思います。

わが友と共に過ごせし五日間わが生涯の誇りとなりなむ

いい加減なことは一つもなかった

(宮崎大学 教育 一年 坂元義久)

「相手の身になって考えること」が今回の合宿で最も感じ入ったことです。班別討論において一人の意見に真剣に耳を傾け、親身になって考える。又自分の意見にも皆が心を傾けてくれる。和歌相互批評においても、その人がどんな気持ちで詠んだかを察して、その人のその時の気持ちになって、一所懸命言葉を探す。ここではないいい加減なことは一つもなかった。自分には、浅薄な知識を前面に押し出して、それで自分を大きくみせようという所があった。しかしそんなことでは到底人の心を動かすことなどできない。自分の心を開いてこそ相手の心が動く。

夜もふけてのち拙なき我が歌なほされし大人のお心に心うたるる

第四班—男子学生—

これ程真剣に考えた事はなかった

(拓殖大学 外国語 三年 富島幸緒)

率直に述べて難しいことばかりであった。とは言っても諸先生方の御講義には非常に感銘を受けた。日本人、祖国、心などというものを今迄、これ程真剣に考えた事はなかった。今迄の自分は「口先の深さくらべ」であったが、少しずつ自分の事、祖国、文化の事が分つて来た。

本当にこの合宿は有意義であり感動的であった。また来年もこの合宿に参加したいと思う。四班の皆さん、白浜先生、国文研の先生方、ありがとうございます。

朝の窓へにて

ふりしきる雨を友らとみつつをれば心は友らとかよふ心地す

常に心を働かせたい

(早稲田大学 教育 二年 西田厚司)

齋藤先生の私達への期待に応えられるよう、もっと勉強しなくてはと思いました。そして相手の心に思いを致すことの大切さを改めて感じました。御製の一つ一つの御言葉に込められた陛下の思いを偲び、講師の先生の御言葉に耳を澄まし、先人の書を輪読する。そうすることによって今迄見えてなかったものが見えて来たように思います。常に心を働かせ

るように努力してゆきたいと思えます。最後にこの合宿を支えてきて下さった多くの方々感謝致します。

日の本のまことの心を伝へよと宣ふ言葉に心励みぬ

真の意味での研鑽

(亜細亜大学 経済 三年 須田 剛)

最も強く印象づけられたのは、齋藤先生を初めとする諸先生方の実に熱のこもった御講義と、妥協や主観に走る事、及び舌先三寸を許さない班別討論です。本場にきつい日々でしたが、その中には真の意味での研鑽がありました。これからも人生、学問、祖国などの問題に対し、流行に流されず、切磋琢磨し、自問自答を繰り返し、心の糧となる本を読み続けてゆこうと思っております。来年も必ず来ます。

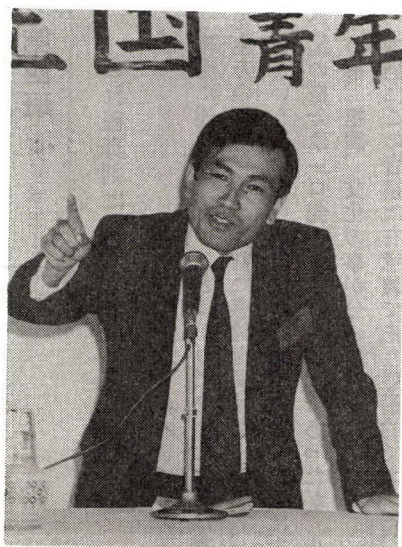
ひぐらしの声を聞きつつ外見れば静かな谷に湯屋立つみゆ

祖国日本との同一性

(鹿児島大学 教育 二年 大久保浩二)

この合宿で一番心に残っていることは、齋藤忠先生が歌われた「同期の桜」である。あの時の先生の歌声には先生の思いのすべてが籠っていたように思う。先生の八十一年間の御生涯すべてが表われていたようだ。私は齋藤先生を初めとする諸先生方の姿に、天皇陛下の大御心を感じた。陛下はその御製にもあるように、喜びも悲しみも国民と共にして、生きてこられた。それと同様、これら先生方は国の憂いを吾が憂

カメラ・レポート 5



合宿運営委員長の日産自動車輜助務・古川修氏は自らの合宿の経験をふりかへりながら参加者としての心得を訴へた。



前徳山市市長、現在徳山大学理事長兼学長の高村坂彦先生は「祖国日本について、みなさんとともに学んでゆきたい」と御挨拶された。

いと、国の喜びを吾が喜びとされている。だからこそ、今この混濁の世にありて、その危急を必死の思いで訴えられているのだ。私も先生方のように日本という国を感じたい。祖国日本と自分との同一性を感じたい。そしていつか私も、齋藤忠先生のような歌を歌えるようにになりたいと思う。

諸先生の講義を一つ一つ思ひ出しつつ

御言葉の一つ一つにこめられし思ひを胸に深く刻みぬ

皆真剣に自らの思ひを語った

(福岡教育大学 教育 三年 脇本光法)

拙い自分の班運営にも拘らず、皆とても真剣に自らの思ひを語ってくれました。とりわけ班付をして頂いた白浜先生には色々御助言頂き本当に有難く思っています。

去年同班の友と風呂にて会ひて

なつかしき友は親しく右手とり久し振りと言ひ給ひぬ

最も深く熱心な読書

(東北大学 工 一年 緒方宏幸)

疲れたというのが本音だが、その中にも爽やかさがあつた。輪読では、読んだページはほんの数ページだったが、これ迄の読書の中で最も深く熱心な読書だった。自分に興味のないことでも非常に苦痛ではあつたが、一字一句の意味が理解でき、著者の心に少しでも近づけた時の嬉しさは、これ迄に味わつたことのない嬉しさだった。自分の言いたいこ

とは、うまい言葉でなくても心から話せば通じることの驚きと喜び、心を開くことの大切さを感じた。更に同じ文章を読んでいるのに人によって様々な受け取り方があり、自分とは全く違った考え方を聞き、自分の読みの浅さを認識させられた。自分では、いろいろな物事をいろいろな角度から見えていた積りであつたが、それでもまだ多くの方向から見ることが出来ることが分かった。この合宿での体験をこれからの生き方に生かしてゆきたい。

同胞が皆散りゆきて我ひとり残るといへども我くを護らむ

第五班—男子学生—

志を励まして戴いた

(熊本大学 工 三年 堺 美智雄)

四日目に小柳陽太郎先生の御講義を拝聴し乍ら、先生の陛下に対する御気持ちに沁み沁みと感じられました。そして、嬉しくなりません。合宿をかへりみてといふことで小田村寅二郎先生がお話されましたが、自分の気持ちを語って戴いてゐるやうで非常に有難く、また、自分の志を励まして戴いたやうに思ひます。

稲本君を思ひて

日本史の教科書持ちて集ひ来し君の姿に心うたるる

過労のためたふれし君の御体を講義の時も思ひてやまず

人生の目標を知り得た

(防衛大学 理工 一年 福岡庸光)

私の発言した内容を本当に真剣に考えて下さった同班の方
方、良いアドバイスをして下さった班付の方に深く感謝して
おります。それらの御誠意があったればこそ、素直な気持ち
を表わすことができたのだと思います。講師の先生方の御講
義を拝聴して、まことの人生のあり方、目標というものを知
り得たような気がします。四泊五日は本当に短かく、もっと
自己を深めたい、と名残り惜しいのですが、ここで得たもの
をずっと温めていきたいと思えます。

御神体は霧にかくれどあたかく我をむかふるやさしき降よ

「日本は吾々の心の内に存在している」

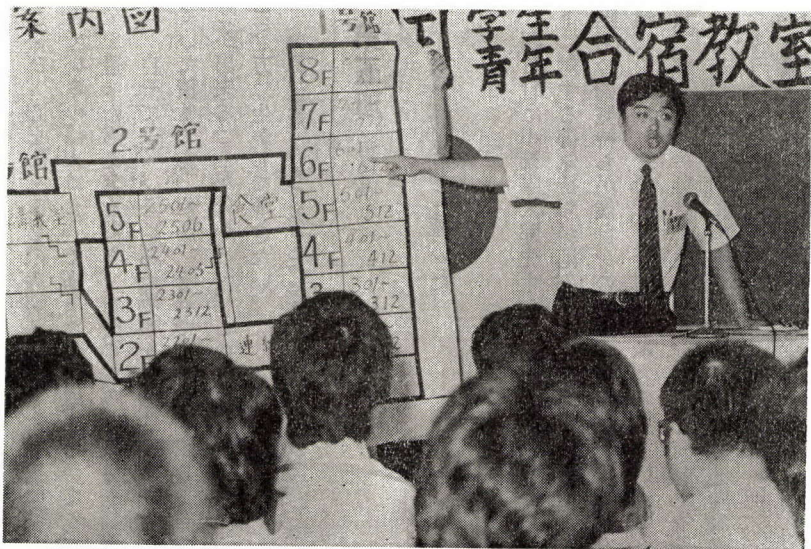
(長崎大学 教育 二年 永木鏡太郎)

諸先生の御講話を聞いて、日本の心とは和の心だと思っ
た。また黛先生の茶道のお話を聞き、日本の美しい心を回復
させたいと思った。小田村先生は「日本は吾々の心の内に存
在しているのだ」と言われた。日本の美しさが滲み出るよう
な心をもった人間になりたいと思った。

海ゆかばと臉をとびて歌ひゆけば心すがしくなりゆくを覚ゆ

先人の道統を受け継ぎたい

(大阪商業大学 商経 二年 岸上 守)



開会式終了後、指揮班長である九州大学医学部六年の長澤一成氏より合宿生活に
対する諸注意がなされた。

この合宿で学んだ多くのことを生かし、人に対しては、感謝と真心で接してきた我らの先人の道統を受け継ぐべく日本人の一人として頑張ってください。そして大学へ帰ったら学友に日本の素晴らしさを語って行きます。

最後に、小田村先生を初め諸先生方、運営委員の方、そしてこの合宿に参加されたすべての人に御礼申し上げます。どうもありがとうございます。

合宿に集ひし友の顔みれば皆生き生きする顔に見えくる

今迄見えなかったものが見えてきた

(亜細亜大学 法 四年 丸山永二)

私は今迄、国家とか日本とか、また天皇を考えることに抵抗を感じておりました。しかし合宿に参加して自国の平和を願うこと、国のそして我々の象徴である天皇陛下を敬い、その御気持を考えることがごく自然で、日本人として当り前のことであることが分りました。

また短歌を創作したのは初めての経験でしたが、今迄見えなかった、自分の心に描写されていなかった草花や鳥、また聞えていなかった鳥のさえずり、風の声、それらが実に新鮮に強烈に映ってくるのが分りました。やがて周りの事物ではなく、自分自身を見ることができ、それを歌にできるようになれば、自分自身をも最高のものに高めてゆけるのでしよう。陛下の真の御気持を察することができるのも、やはり御歌を読むことが一番であろうと思う次第です。

合宿での経験をこれだけに終わらせられるのではなく、今後の自分の生活に生かしてゆくよう努力致します。

時は過ぎ別れの時となりけるも我が親友と再会誓ふ

第六班—男子学生—

自分を見つめることができた

(明星大学 理工 二年 小山典孝)

黛先生や齋藤先生の御講義から、自分は日本という国の中に存在しているということを改めて知らされた。また和歌相互批評では、今迄お互いに心を開いて話すことができなかった友が急に意見を交わすようになりました。和歌をつくることにより自分を見つめることができ、また友の気持ちを理解でき非常に嬉しく思いました。これから大学へ帰ってもこの経験を忘れずに頑張ってくださいと思います。

輪読時との語りし言の葉にこたへられぬはなげなきかな

「自分の眠りを醒してくれるのが友達だ」

(早稲田大学 文 一年 小妻典文)

四泊五日の合宿が終わって今はただ疲れたという感じですが。小田村先生が最後に言われたように、僕もまた、五日間を振り返っても、何か漠然とした感じしか浮んできません。しかし班の中に入って指導して下さった小野先生の言葉「自

分の眠りを醒してくれるのが友達だ」は心の中にしっかり焼きついていきます。何かほんの小さなものではありますが、希望の端を掴み得たような気がしています。

ぼろぼろに疲れてはてしわがこころ友との別れに言葉少なし

自分の世界はまだ狭い

(防衛大学 理工 二年 黒川 寛)

第一に思った事は、自分の知らない所にこんな多くの国を見つめようとしている仲間がいるんだなという事です。この事は私にある種の安心感を与えてくれるとともにまだまだ自分の世界は狭いなと痛感しました。第二は今後の大学生活においてこの体験をどう生かすかということです。とにかく防大にも何か作らねばと思っています。最後に、当合宿を主催、運営して下さった方々、先生方、班付の小野先生並びに六班の皆さん、どうもありがとうございました。

指揮班の野田頭龍先輩を思ひて

講義室のあとかたづけに励まるる先輩の後につづきてゆきなむ

高瀬伸一さんの歌に感動した

(九州大学 法 二年 有村浩明)

私の一番心に残っているのは、小林先生が御講話の中で紹介された高瀬伸一さんの歌です。「荒れ狂ふ海のはたてはますらをのいのちのすてどいさぎよくゆけ」「いさぎよくゆけ」という言葉には微塵の気負いも感じられません。一読すると



自己紹介のあと、長旅の疲れも忘れて班別討論に取り組む学生。

勇ましいだけの歌のようですが、繰り返し読んでゆくとか
しい歌だということがよく分ります。已むに已まれぬ思いに
つき動かされて何かに向って行こうとする人の、本当に素直
な気持ちがあるまま言葉になつていようのように思います。

友どちのおもわみつめつ語りあふも今宵ばかりとなりけるかも

他人の言葉で語つていた自分に気付いた

(青山学院大学 経営 三年 高橋健伸)

班長より「何故自分の気持ちを伝えようとしてくれないの
かな」と言われショックを受けた。そして国文研で話される
内容がある程度知つていふこととして聞いていた自分に気付
いた。しかもその知つていふこととはすべて他人の言葉であ
ることに気付いた。今まで自分は、知識と他人の言葉は無責
任に並べていただけではなかつたのか。歌をつくる心は自分
を欺かない素直な心だと思ひます。自分に重要な問いを与え
て下さつた班の皆さん国文研の方々、有難うございました。

合宿をふりかへりみれば友どちと語りしことの思ひ出さるる

第七班—男子学生—

大切なものが見えてきた

(福岡教育大学 教 二年 坂本一紀)

素晴らしい合宿だった。自分の言つたことに応えようとす

る班友の真剣な態度や、講師の先生方の言われる言葉によつて、天皇のことや核のことを、それだけに限つてどうのこうの言うことよりも、もっと大切な何かがあることがおぼろげながらも見えてきたような気がする。これからは、そのおぼろげなものがあるのか、そして、それが自分にとって真実なものかどうかを考えてゆきたい。

これまでの私の思ひの幼さを友どちの言葉に知らされるかな

来年もまた参加したい

(高野山専修学院 研究科 一年 白瀬忠法)

先生方の人間味あふれる御講義に何度も心を動かされた。
短い合宿期間ではあつたが、本当に語りあえる友ができ、すばらしい五日間でした。来年もまた参加したい。

合宿も最後の夜となり夜ふけまで眠りを忘れ友と語りあふ

さはやかな気持で実感できた

(早稲田大学 商 二年 藤新成信)

私にとつて二回目であるこの合宿は、二度と忘れられぬものとなりました。日本の国を支へ、守り、生きてゆくとは、人の心の奥底から発せられた言葉に静かに耳を傾けて、先人の姿を感じ、又、お互ひの心を感じ合ふこと。その中で味はひ合ふ人生観を心の礎として生きてゆくことではないかと思ひます。

班長として、初めて会ふ学生と過した五日間。各々が心を

開いてとつとつと語り始めた時や御製に表はれた天皇の御気持を汲み取らうとした時に、私はさはやかな気持でそれを実感できたやうに思ひます。

心より出づる言葉を友どちと交すこのとき最後の懇談

立派な人間になってゆきたい

(近畿大学 商経 一年 逢坂克也)

今、これだけの人々に包まれて合宿を終ることができて、喜びの気持ちでいっぱいです。班別討論での僕の感想や意見を、真剣になって理解しようとして下さる班の皆様本当に感謝します。この合宿で皆さんの真心に触れることによって、「本当に人には心がある」ことを体験できました。これからは、もっともっと学習し、人の真心を体得して、立派な人間になってゆきたい。

わがこころ師のまごころに触れてよりわれも歩まむすらをのみち

貴重な四泊五日だった

(西南学院大学 法 二年 森川昌英)

「太平洋戦争」「天皇」「反核」と、講師の方の話に最後まで納得がいけない点が残っています。しかし来年もこの合宿に来てみようかと思っています。正直に自分の考えを述べる喜び、それを熱心に聞いてくれる友がいることの喜び。これらの喜びは、合宿に来ていかなかったならば得ることができませんでした。貴重な四泊五日でした。



合宿導入講義は福岡教育大学教授・山田輝彦先生が「祖国・人生・学問を統一する視点の確立のために」と題され、合宿で取り組む指標を示された。

反撥を感じつつ来し合宿も今は楽しき思ひ出となる

胸が熱くなってきた

(長崎大学 教 四年 植松伸之)

小柳先生の読まれる天皇陛下の御製を聞きながら、天皇陛下は如何なる時代であろうとも、一つ一つの事件や、一人一人の心に心を傾けておられる。その御心は、常に深い思いやりと憂いを持たれている。その一点は絶対に変わらない。私が求めようとしている日本の歴史とは、その御心に私自身が回帰してゆくそのことではないか、と思ひました。小柳先生が御製を読まれ、天皇陛下の御行動を話されるたびに、陛下の御声と御表情が彷彿としてくる思いを感じ胸が熱くなってきました。

班付の青山先輩が我に語り給ひて

わかりたしと思ふ気持ちの高まりが太子の時代を更に知らしめむと

第八班—男子学生—

勇氣と力がみなぎる気がした

(産業医科大学 医 一年 江島邦彰)

この合宿教室に参加して、先生方や友の熱の入った言葉で聞いている内に、次第と、祖国日本に対する、言葉に表現できない何か大きな物を感じさせられ、明日からの人生観が多

少なりとも変化し、勇氣と力が心の底からみなぎる気がしました。短かった四泊五日のこの貴重な体験を大切にし、くじけそうになった時に、この合宿の事を思い出して明日に向かって前進しようと思えます。

師や友や私の生まれし母国はまくには誉れ高かる日本国なり

新しい道を聞く自信がついた

(拓殖大学 外国語 三年 三原義市)

四泊五日の合宿を終えて、私は人を信ずることがいかに大切かを学びました。自分の言葉で話すことや生きる力を感じること、人を信じてその人を理解しようとする心の働きの基礎だと感じます。人間の生き甲斐を探求する人生で、こんなに涙を流し、精神の高揚を感じた時はありません。今迄自分の大学の校歌が歌えなかった事や合宿での講義を真剣に聞けなかった事も、師や友のひたむきで暖かい心に救われました。新しい道を聞く自信がつき、本当に有難うございました。

古川修運営委員長へ

ろうかにて「いい歌だね」と声かけられ師の励ましを心に感ず

本当に「わかる」とは

(福岡教育大学 教 三年 太田和浩)

この合宿で、「わかる」とはどういうことか、班付の長内先生から教わったことが嬉しかったです。先生は「本当にわ

かるとは明日から生活が自然と変ってゆくものなんですよ」「こうだとわかった時、友達が自分の気づかなかったことを言ってくれる。その時に言葉は身近なものとなる。そしてそれは人生を切実に考えている人だからできるのですよ」と言われました。その時私の心には「傲慢な心」があった様な気がしました。その心を取りはらう様勉強してゆきたいと思えます。

いざ別れる時となりせばくさくさの友との語りひ思ひ出さるる

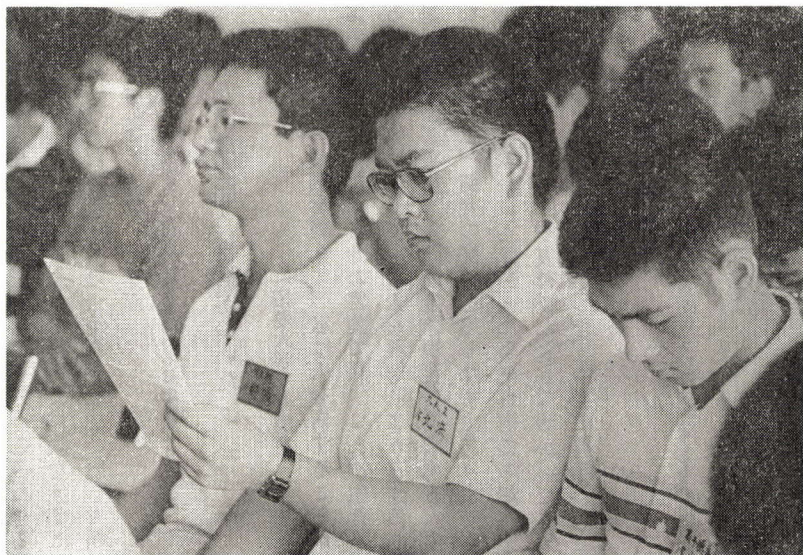
“一日一首和歌を作る”

(京都産業大学 経 二年 小津博英)

防人の歌を長内先生が読まれた時涙を流された。自分にはその和歌に詠み込まれた気持ちに分らなかつたが、限りなく長内先生の御心情に近づいてゆきたいと思った。和歌創作を大切にしようと思う。私は長内先生がお話しされるたびに、自分の日常生活の中にここで感動したものを詠む作業を入れていく必要性を強く感じた。“一日必ず一首和歌を作る”これを決意する。

昨日、班全員で歌を歌った時、連帯感、一体感を強く感じた。一人一人の気持を本当に各々が一所懸命にくみとろうとしていた。私はこの八班において本当によかつたと思う。

我々を案じて部屋まで来給へる師の御心をありがたしと思ふ



講義に心を集中させ、真剣なまなざしで耳をかたむける学生たち。

言葉にできない感激

(神奈川県 経 二年 平野耕治)

初めて班長となって不安で一杯だったが、自分が思っていることを話したら少しずつ皆も自分達の気持ちを出してくれて後は大変やり易かった。一つの思いを話すと皆がそれに対して自分の思っている事をいろいろ話してくれる。何と気持ちのいいことか。清々しかったことか。夜の集いが終わって班で歌った「海ゆかば」そして……。言葉に表すことのできない感激。最後の班別懇談の時、皆が本当にいい合宿だったと言ってくれた時、思わず涙が出ました。よかった。

ああうれし思ってくたさる先輩が私の囲りにあつたと思へば

無言で教えて戴いた

(九州大学大学院 文 二年 崎村耕二)

長内先生が僕たちの班で防人の歌を読まれた。ところが、先生は、歌を詠んだ人の気持ちに打たれたらしく、途中で、その先を読むことができず絶句された。僕は、今まで、防人の歌の意味を解釈してくれる人には出会ったことがあった。しかし、防人の歌はすなわち防人の心であって、その心を深く感じようとしなければ意味がないということを、無言で教えてもらえた人は初めてであった。

狭き部屋にふとんを敷きてそれぞれのさまに寝ならぶ友の姿よ

『信じる』という言葉を肝に銘じて生きたい

(亜細亜大学 経営 二年 土屋雅彦)

合宿に参加し、知識の修得は人生の助けにはなるが力にはならないということを認識できた。私にとって今の生きてゆく力とは何なのか。それはこの合宿で得た友であり長内先生の言葉である。その先生の言葉の一つに、学問に於ても友に於ても、あらゆるものの行きつく所は『信じる』に尽きる、というお言葉がある。信じるということも自分の責任に於て信じるということである。必ず、この『信じる』という言葉

を肝に銘じて大学生活を精一杯生きる決意である。
ただ一つ信ずる心の定まりて明日の我が身のうれしかりけり

第九班—男子学生—

すがすがしい気持ちだ

(早稲田大学 理工 一年 三谷直幸)

五日間の日程を終えた今、非常にすがすがしい気持ちで居ります。先生方の御講義に於て、繰り返し述べられた「心を曇らせているちりを取り除き、素直な気持ちになり日本人としての己れを取り戻そう」という御言葉には、深く心に感じるものがありました。国民という自覚、日本人という自覚が自分にはまだ感じられるとは言えませんが、「親、兄弟を思

う心、身近な者を思う心、それが日本の国を思う心に繋がるのだ」という御言葉をかみしめ、これからの日々を送っていきたいと思います。

悩みをる友の力となりたくも言葉の一つ我は言へざりき
語らひし夜ははや明けるも我が胸のたかぶる気持なほさめやらず

友がなつかしく思えてきた

(福岡教育大学 教 三年 是松秀文)

初めて班長をして大変勉強になりました。班別討論の折につたない言葉であったが、何とか自分の思いを伝えようと努めました。その時自分が肌で感じたことは、友の目を見て、その友の話をよく聞いて友の気持ちに少しでも近づこうと自らが努めないと、友は近づいてくれないし、本当の思いを決して言ってくれないということでした。友が自分の名前を呼んでくれて、いろいろと話してくれと、その友に対して、なつかしい思いがしてきて嬉しくなりました。今はこの気持ちを大切にしてゆこうと思います。

小林先生の御講話にて高瀬伸一先輩のお話を聞きて
弟を戦におくらるる兄君のかなしき思ひ伝はりてきぬ

『一つのものに命をかけて取り組め』

(九州大学 工 二年 原田三十義)

合宿中有意義な経験があまりに多過ぎて、まだまとまった感想はとも書けません、今一番心に残っている言葉は、



朝のすがすがしい空気の中で、体を思ひ切り伸ばすと、眠気も醒める。

班付の今林さんが言われた「何でもいいから一つのものに命をかけて取り組め」という言葉です。私はこの言葉を聞く事ができただけでも非常にすばらしい合宿だったと思います。私はこの言葉に大きな人生の指針を得た思いです。

高千穂のふところ深くつまれて学びしわれのころ晴れゆく

もっと勉強しなければ

(高千穂商科大学 商 二年 武田悦男)

自分がこの合宿を終えて、痛感した事は、もっと勉強しなければという事です。本を読むという事です。自分はこのことしか感じませんでした。それはそれでいいと思います。そして、霧島を去った時点で自分に掲げられた課題「勉強する事(本を読む事)」に対してどう対処するかは、これからの自分の考え次第だと思えます。

友どちと別れし霧島ふり向けば心通ひし友の浮かびく

『素直に信じる』

(鹿児島大学 教 三年 永山一三)

長内先生が言われた「素直に信じるということが人間にとって一番大切だ。学問もまた信じることだ」という御言葉が実にありがたく私の心に響いた。このことは、人の話や本をむやみやたらと信じるということではない。自らの心の中に素直に入り込んだ感動というものは絶対に信じられるものであるということであると思う。日々多少の感動は覚えるが、

それを素直に信じ、温めるということは本当に少ない様に見える。何事に対しても素直に思いの限りを尽くし実行してゆこう。「信じる」ということがとても尊いものであるように思われる。

それから、私は日本人なのに、実に日々、自分は日本人なのだという自覚なしに生活していることか。日本人として、日本の歴史を、今切に学びたいという気持だ。

神の国日の本に生れしわれなれば素直なますらをと生きてゆきたし

言葉の大切さを感じた

(多摩美術大学 美術 二年 佐々木勝浩)

合宿で感じたことは、言葉の大切さ、自分の語る言葉の大きさ、責任の重さということです。一時、班別討論の時に、単なる知識の振り回しになったりしないかと考えすぎて、思う様なことが言えなくなってしまうことがありましたが、自分に話を引きつけて話す様に、又、感じた事を話す様に気を使いました。すると、感じていたつもりが実は感じていなかった自分に気付くこともありました。そして、良く知らずに人を批判したり、深く物事を考えもせずに知った様な気度人に話すことがいかにつまらないかを気付かされた様に思います。

幾人もの真心こもりし霧島の合宿も今日終らむとする

第十班 男子学生

思いやりを表現する努力が必要だ

(専修大学 経営 四年 納村道一)

この合宿で最も感じたことは、諸先生方、運営委員の方々
の思いやりが行きとどいており、参加者一人一人の心が通い
合っていることです。特に小田村先生が齋藤先生の作られた
和歌にこたえられて詠まれた和歌には深く心を動かされまし
た。自分も大学に思いやりのある共同体をつくろうとこの合
宿に参加したのですが、人を思いやることはただ何となく思
いやるのではなく、思いやりを表現する努力が必要なのだと
痛感しました。

また、聖徳太子の信仰思想を学ぶことができ、うれしく思
います。「人皆凡夫」と、他と共に成長してゆくと、いう思想
は本当に大切なことだと思えますが、日本のことを悪く言う
人達、戦争で死んでいった先人をばかにする人々を許すこと
はできません。この合宿で学んだことを学友に知らせてゆく
など、具体的行動をしてゆきたいと思えます。

待ちに待ちし合宿なるに急病にて来られざる友の胸内如何に
無念なれど来られざる友の分までも学びてゆかむ友らと共に

「日本の心がすさんできている」

(佐賀大学 理工 四年 小野伴美)

カメラ・レポート
11



第2日目の午前、去年に引き続き御登壇となる齋藤先生の御講義である。「主権回復30年、いま再びアジアの危機—祖国の明日を憶ふ—」と題され、反核運動、教科書問題、米国との経済摩擦、中国内部の動きについて、これらの背景にある根深い問題について説明された。

合宿に来てよかつたなと思っています。小田村先生が「合宿をかへりみて」で「美しい日本の心がすさんできている」とおっしゃった言葉が強く印象に残っています。実際、道路の端には空カンやゴミくずが投げ捨てられ、公共物には落書きがいっぱい書いてあります。今までですと、ただバカなことをしているとは思うものの、それ以上のことはなにも感じられませんでした。しかし、先生の言葉を聞いて、本当に美しい日本の心がすさんできているなあと実感させられました。

—小田村先生の「合宿をかへりみて」を聞きて

先生の日本を思ふ言の葉を聞き得しだけでも幸せに思ふ

素直な気持ちに立ち戻って

(防衛大学 理工 一年 山本喜清)

なんとなく参加した合宿教室でしたが、きてよかつたなあと思っています。「素直な気持ちに立ち戻って、心のうちを吐露し合える謙虚な人間づき合い」を、これからも持ち続けたいと思います。

霧島の合宿終れば防大のサッカー合宿我を待ちたり

心の渇きがいやされた

(早稲田大学 教 一年 熊谷修二)

この合宿教室はまさに干天の慈雨でありました。大学に入ってから感じていた、いいしれぬ心の渇きは、天皇の御歌や

聖徳太子の御心の一端に触れ、さらに齋藤、黛、小田村各先生方の感銘深いお話をお聞きして大部いやされました。そして生まれて初めて「日本人であること」を意識しました。私はこの貴重な体験を心の糧とし、激動の時代に処してゆきたいと思います。

—小田村先生の合宿をかへりみてを聞きて

国思ふ御言葉聞きてわれもまたかくありなむと思ひこそすれ

祖国・日本に心がひらいた

(九州大学 経 一年 金子隆義)

講義はいろいろとむずかしい面が多くあり、理解できたとはいえませんが、全体的にはつかめたような感じがしました。日常、考えてもみなかった祖国・日本について心がひらいたような感じもしました。今、何かよくわからないのですが、すがすがしい気持ちになっています。このすがすがしい気持ちをこれからももちつづけて友と語り、学んでゆきたいと思います。

—友だちと別るべき日の来にけりと思へばこころの悲しくなりぬ

未熟な自分が恥ずかしい

(広島修道大学 商 三年 野村宗明)

講師の先生方が涙ながらに話されている講義中にいねむりをしたり、また班別討論では自分の気持ちそのままの言葉が言えないことが多々ありました。それでも先生方のせつせつ

と語られる祖国への思いが感じられ、未熟である自分が恥ずかしくなりました。身近な方をお俣びすることを旨として、真の学問に励んでいきたいと思えます。

全体感想自由発表にて

思ひあがりいさめし友の言の葉をいついまでも心にとどめん

活力を与えられた

(福岡大学 商 二年 宇野世史也)

この合宿中にいろんな話を聞き、いろいろな事を話し合っ
て、さまざまな思いが胸の中にあります、何よりもこれか
ら生活していくうえで活力を与えられたと思います。そし
て、ともすれば挫けそうになる自分を背後から温く支えてく
れるような大きな力を感じます。その大きな力というのは、
御話をして下さった先生方や、合宿を運営して下さった方々
の思いの深さだと思います。

全体感想自由発表を聞きて

我が友のくちびる震はせ語りたる熱き思ひを深く感ぜり

「心から信じる」ことが大切

(東京経済大学 経 四年 小林親樹)

昨年の阿蘇の合宿以来、大学の学友と話すなかで様々な疑
問が出てきました。それを今度の合宿で確かめたいと思っ
て参加しました。しかし、そのような疑問よりもっと根底に
ある「心から信じる」ということが、諸先生方の御講義、班



齋藤先生の御講義のあと、食い入るやうな目差して質問をする学生。

での輪読また討論を通じて大切な事であるとわかりました。まだまだ勉強不足で「心から信じる」域には到着しておりませんが、それを一生の勉強としていきたいと思っております。

感激に打ちふるへつつみ友らと歌ひし歌は「進めこのみち」

第十一班—男子学生—

人の心に心で応えることのすばらしさ

(鹿児島大学 教 二年 松谷晴朗)

合宿をふりかえって思うのは、やはり人の心に心で応えるということのすばらしさです。先生方の御講義にも、謙虚なお言葉の中に深い人生と私たちに対する願いがこめられているのを微力ながらも感じました。殊に齋藤忠先生の「同期の桜」の御歌にはただただ聞き入るばかりでした。先生は今の日本の姿を、そして私たち若い世代を思う時、どのようなお気持ちになられるのであろうか。戦後世代といわれる私たちにはとかく遠くに感じられてしまう大東亜戦争や日本の心の歴史、先生は今でも昔の御友人たちとお話をなさるのであります。その思いは私の偲ぶに余りあるところですが、その御心に応えるに足る自分でありたいと思えます。そして、その気持ちは気負いのない自然なものから生まれるのだということを思います。班別討論においても人の心に心で応える

ことの喜びを感じさせていただきました。

御友らの心に応ふる言葉こそ大和心のしるべなるかな

日本の文化・思想を研究すべきだ

(防衛大学 理工 一年 倉田 裕)

この合宿に参加して、日本の文化・思想というものをもっと研究するべきだと思いました。日本の文化・思想といっても、ただ漠然として、抽象的ですが、文献などを読み、知識を深めることが大切だと思いました。新聞等、マスコミの報道する反核運動にしても、社会主義国に操られていると知り、残念に思いました。一番嬉しかったのは、これまで見知らぬ人達とこの日本のことを語り合ったことでした。

霧島に語り合ひたる我が友よまたいつの日か集ひ会ひたし

講義・討論では相当苦しんだ

(岡山大学 教 三年 横溝龍一)

合宿前は国民文化研究会に対して反発を持っていて、合宿に入ってもその思いは消えませんでした。そのため講義や班別討論では相当苦しみました。天皇、祖国、神洲不滅とか、自分には思わず顔をしかめたくなるような言葉について、真剣に話しあい、講義を聴いたことは非常に有益であったと思います。しかしながら、この問題は自分にとって未解決のものです。

心をば共に開きて友どちとすこせし日々も五日となりぬ

五人の素晴らしい友を得た

(福岡大学 法 四年 手柴和彦)

この合宿で新たに五人の素晴らしい友を得ることができた。最初は皆初対面で緊張してゐたが、日程が進むにつれて気持ちもほぐれ、思ふことをありのままに語り合ふことができた。最終日の今日、皆の心は一つに溶け合ったやうに感じた。この共感の世界はこの合宿でしか味はへないと思ふ。これから各大学へ帰るわけだが、遠く離れても友のことは忘れずにゐたい。そして折をみては手紙を書いてお互ひに励まし合つてがんばりたい。

班別討論の折

日程の進むにつれて友どちは思ひのままを語りてくれたり語り合ひ心通はせゆくうちにこの霧島の夜は更けにけりこの五日共に学びし友どちを得たるがひたにうれしかりけり

人間として生まれた喜び

(高千穂商科大学 商 一年 黒田欣弥)

この合宿で得たことで一番うれしいのは、人間として生まれた喜びを感じたことです。人間として生まれた以上、人々と話をする口を持ち、話を聞く耳を持ち、そこに言葉がある——それだけの機能を持ち、深く考えることのできる人間は、お互いにどこまでもどこまでも深く通じあえるという喜びは、私の生涯のうちでなによりもたいせつなものでありました。そして、そのためにも、これから日本の文化、天



第2日目午後には、国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授の小田村寅二郎先生による「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読導入講義が行はれた。

皇、古人の心を深く学びたいと思う。

人の世に生まれしことの喜びは心の通ふ時にぞ感ずる

広やかな世界にゐる

(早稲田大学 政経 四年 斎藤 勝)

「自分自身の身近なところで、自分を先立てないで行かうとするところに日本があるのです。塵に塗れ、埃を被つてゐる心の汚れを取り除き、美しい自然をもつ日本、美しい心をもつ日本に立ち返らせることが、なんで歴史の逆コースであらうか」合宿最終日に小田村先生が言はれたこの力強い御言葉に、信の世界の強さ、深さが感じられ、国民文化研究会といふ一つの集団の世界ではなく、もっと広やかな世界に僕らはあるのだとしみじみと感じられて来て、狭隘だった自分の心が開けて来る心地がした。

合宿最終日の班別討論の折

友みなど心通はせ話せしがありがたきといふ友の面輪も

しみじみと語りし君の面輪には白き歯の見えずがしかりけり

謙虚なる大人の御心仰ぎつつ生きてゆかむと友は語れり

第十二班

男子学生一

心に勇気が湧いてきた

(九州大学 文 一年 竹内昭彦)

講師の先生方の御講義・班別討論、又直接会話の場は持て

なかつたけれども、合宿に参加された多くの方々のみならずや態度にふれ、僕の心の中に勇気が湧いてきました。まだうすすらすれども、希望の光が射してきました。この合宿に参加できて本当によかったと思います。ありがとうございます。

友どちと語りかはせど一瞬の心のすきま如何ともならず

素直な気持で日本を愛したい

(亜細亜大学 経 二年 大竹正彦)

講義等は自分にとり、大変難しいもので、自分の勉強不足を痛感した。聖徳太子の憲法十七条で和を以て貴しと為す、とは、心を開いて友とつき合うということであることを学んだ。また、天皇、祖国というと右翼思想と言われる昨今だが何故素直な気持で日本を愛することができないのかと思つた。

この合宿に参加して大変よかつたと思う。普段の生活にもどつても、この合宿の地で勉強したことを思い出して生活していききたい。

慰霊祭で祖国日本を守るため立ちし先人の想ひの知らるる

ジーンと来るものを感じた

(鹿児島大学 教 一年 上蘭進二)

天皇の御製や、聖徳太子の教えを拝読するうちに、あるいは、それらの方々の話しをされる講師のみなさんの言葉を聞

くうちに、日本人の中にある暖かい心、祈りの心を知り、自分の中にジーンと来るものを感じました。やはり自分も日本人であるんだと改めて感じ、またありがたいとも思いました。

最後に、班別討論の中で自分の中にあるすべてのものを語って下さった班長さんをはじめ、班員の方々に感謝したいと思います。

己が思ひ伝へんとする先輩の熱き言葉のありがたきかな

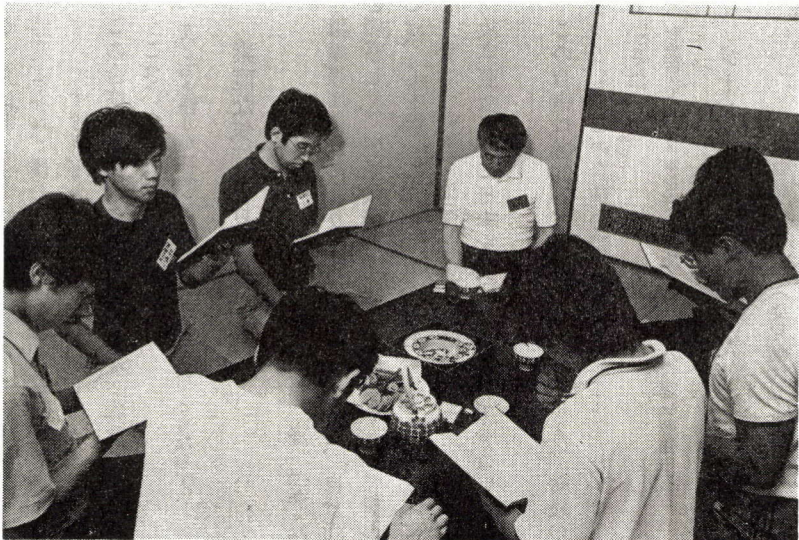
ここちよい緊張

(慶応大学 経 二年 山本展廣)

先生方の御話に感ずるものがありました。それよりも、その後の班別討論に得るものが多かったと思います。

この合宿は最初だけに遠慮が先だちましたが、同じ話を聞き、自分と異なるとらえ方をする人と討論する時、緊張しました。その緊張は過去のそれと違い、今緊張しなければ自分の考えやとらえ方がおし流されてしまうという必死さもありました。又その内容が普段話す内容より、もっと奥深く根本的なものである、日本の心についての話しであったためでもあります。今ふり返るとここちよいものだったと思います。

地中より天へと吹き出す白煙の力のごとくに我も生きなむ



班別輪読は、単なる意味の解釈でなく、著者の心に少しでも迫らうとするものである。又この輪読で班員の心も徐々に一つになってゆく。

やはり来て良かった

(防衛大学 理工 四年 吉村仁孝)

この合宿教室に参加すれば必ず感動し、自分の心にエネルギーを蓄えられると、私は去年参加して判っていたのですが、今年、一人で来るのはなかなかつらく感じていました。しかし、初日から山田先生の御講義で、自分の知らない事を次々とお聞きし、やはり来て良かったと今、思っています。今年较去年に比べて思うところが数多く、この感動を維持できるように努力しようと思心しました。

一人では極め難からむ問題に示唆を与へてくれるはうれし

自分を見つめ直したい

(徳山大学 経 三年 小豆沢貴志)

私は、実はここに来るまでは、自分に対して自信と言うものを少しなりとも持っていました。しかし、山田先生の御講義からはじまり、班別討論と日程が進むうちに、それは無惨にも打ちくだかれました。自分の考えの浅いことに気づき必死で考えましたが、急に考え方が深くなるものではなし、問題をたくさんかかえて帰ることになりました。私は、これを機会に自分を見つめ直し心から何事も見つめ考えたいと思います。

集ひたる友らと討論かはすうちに友情芽ばえ通ふを寛ゆ

心と心で語るすばらしさ

(早稲田大学 法 三年 打越孝明)

合宿に参加し、今思ふことは、「来てよかった」といふことに尽きる。

心と心で語ることのすばらしさ、そしてこのことが、現在の日本の誤まった姿を改める根本になるのだと確信することができた。これからは、この合宿で得た確信を、よりいっそう磨きあげ、より多くの友だちにそれを伝えていきたい。

全体感想自由発表を聞きて

壇上で涙流せる友どちの姿に我は感激したり

第十三班—男子学生—

全力を尽して合宿を過せた

(亜細亜大学 法 二年 上杉智)

不安な気持ちで合宿に参加したが、来て良かったと思つてゐる。苦しい事はあったが、皆と一緒に精いっぱい頑張つた。

感じたこと、思ったことを素直に語つてゆけば、受け取り方は違つても、自分の気持は伝えられることがわかつた。「日本の心」がよく感じられる事が、日々の生活に大切なものであると感じた。そのためには、古くから日本に伝わつて来たものを正確に学んでゆくことだと教わつた。僕は、明治から

の真実が書かれた本を読みたい意欲を初めて感じている。

全体感想自由発表を開きて

つまりつつ己が思ひを話す友のその姿にはうれしさあふる

光明が見出せた思いがする

(千葉工業大学 工 一年 吉村浩之)

学生生活のなかで、一緒に日本の歴史を学び合える友達もなく、孤独でした。そうした時、父から、この合宿の事を聞き、光明を見出した思いで、参加しました。合宿が終わった今、多くの友が出来たような気がしています。一人で、大学生活に戻りますが、今までと違った明るい気持ちで帰って行けそうです。合宿で学んだことを、身のまわりの友だちに、少しでも伝えたいと思っています。

討論の理解しがたき内容に友は静かに目をとちけけり

素直な気持ちを取り戻すことができた

(九州大学 工 二年 菊池正浩)

初めて素直になれた気持ちです。今までいかに自分が傲慢であったか、合宿で友らと語ることにより、思い知らされました。この素直な気持ちを大切にしたいと思います。全体意見発表で、次々に壇上に立った友らの何と生き生きとしていることか。魂の生きている日本人がここに居る。「魂を奪われた日本人」という事が言われたりしているが、「そんな事はなし。日本は大丈夫だ。日本は不滅だ」という感を強くしまし

カメラ・レポート 15



「青年研究発表」。右から九州大学医学部6年の笠普一朗氏、宮崎県立日向高校教諭の竹下鉄郎氏、(株)講談社勤務の磯貝保博氏。御製や松陰の歌を紹介しながら、学生時代の体験や、社会生活の生々しい体験を語り、学生に大きな感動を与へた。

た。

全体感想自由発表にて

涙ぐみつ語る少女も父上の話始むれば笑顔こぼれぬ

合宿で学んだことを大学の友達に伝えたい

(久留米大学 商 三年 坂井宏行)

「合宿教室」という良い機会に恵まれ、講義や、班別討論で、多くのものを学びました。大学に戻ってから、周りの人々に合宿で学んだ事を伝えてゆきたいと思えます。

また、来年も参加したいと心待ちにして居ります。

友と来し霧島の地に別れ告げ明日より励まん心の道に

人と人との本当の付き合いの場を見いだした

(和歌山大学 経 三年 内田欣吾)

班別討論で友の言葉に心を集中させる努力を通じて、お互いの心が通い合うことを知り、これが本当の「人と人との付き合い合い」だと思いました。立場を越えて、お互いの心を通い合わせる美しい世界を、この合宿で見出すことが出来ました。講義を御聞きして、日本の心の美しさを思いました。その美しい日本の心を表わして生きられる人になりたいと思えます。この合宿で、これからの人生の指標が与えられたと思えます。

小田村先生の「合宿をかへりみて」を聞き

先生の真心感じ応へんと思ひ受け継ぎ我進みまし

心から語り合うことが出来た

(早稲田大学 文 一年 石田雅二)

合宿で一番心に残ることは、班生活を通じて、自分自身の素直な言葉で語り合うことが出来たことです。大学でのサークル活動に専心できない悩みを班長さんに告げた時、班長さんは夜遅くまで熱心に語って下さり、よき指針を与えて下さいました。このことを最終日の緊張した全体意見発表で述べることができ、自分を確かめることができました。つらい事もありましたが、多くの貴重な体験を得られたことを嬉しく思うと共に、周りの方々から感謝しております。

夜を徹し後輩とともに語りたまふ先輩の真心のなんとうれしき

この合宿には何かがある

(福岡教育大学 教 一年 木村賢二)

先輩に誘われ、初めて参加した合宿教室。正直言って、これ程ハードなものとは思っていなかった。講義、班別討論と何か重苦しい時間に支配され続けた思いがしている。今、心の中を占めているものは、何とか五日間をやり終えたという安堵感である。合宿で学んだことは、家に帰って、じっくり考えてみたい。今は、まとまりのつかない状態であるが、ただ「この合宿には何かがある」ということだけは、はっきりと感じられるのである。

合宿の最後の時を惜しみつつ雨のそぼ降る霧島を去る

班生活での付き合いの大切さを実感した

(西南学院大学 文 四年 重 博巳)

学年や学部など様々の違いがあつて、最初は、班生活に戸惑いが感じられた。班別討論においても、最初のうちは、意見もポツポツと出て、あとが続かないことが多かった。班長として何もできなかったが、班生活での付き合いが、合宿のなかで、いかに大切なものであるかを実感させられた。これが土台となつて、講義のあとの討論も、理解が深められたのである。

石田兄と話して

合宿に初めてゆきし時の事思ひ出さるこの友見れば

「どうしたらいいのかわからぬ」と訴ふる友の思ひの胸につまりぬ

大学で抱きし悩み語りたく参加したりと反の語りぬ

信頼とふ言葉頼りに語り出す友の思ひの尊かりけり

第十四班——男子学生——

言葉の難しさを学んだ

(徳山大学 経 二年 中村道陽)

和やかな班の雰囲気の中で、輪読や討論に真剣に取り組むことができた。諸先生方の御講義には、深い感動を受けた。

特に齋藤忠先生の謙虚な御人柄とまごころのしのばれる御話は印象深いものでした。班別討論では、話す人の身になつ



和やかに食事をとる学生たち。

て、考えることの大切さ、言葉の難しさを気づかされました。班長さんには、誠意の限りを尽していただき、班員の皆さんとも打ち解けることができ、良い班に巡り合えたと感じております。言葉の難しさをかみしめつつやっ行ってきたいと思えます。

班別討論にて

感動が感じられぬと言ふ友に旅に出るべしと助言をしけり
先輩は彼にとつては人生の大問題だと静かに言はるる

君の言ふその言の葉は友のこと真に思へば言へぬはずなりと
我が友に我がことができることただひとつ心を尽くし友に近づかむこと

学問に対する姿勢がかすかにつかめた

(独協大学 経 四年 原 正稔)

「祖国と学問と人生とを語り合おう」というテーマに興味を持って参加しました。合宿で講義を御聞きして、教養を深めたいと思ってやってきた自分の勉強が浅はかであったことを痛感しました。しかしながら、本当に自分自身のためにやる学問をやるための姿勢が、おぼろげながらつかめたようである嬉しく思っています。奥の深い御講義を数多く御聞きし、頭のなかは、混乱しておりますが、家に帰り、じっくり考え直し、できるだけ吸収したいと思っております。

齋藤先生の御講義を拝聴して

国思ふ熱き御心こもりたる師の御言葉の力強きかな
これまでのおのがことばのあまりにもかるく思へてはづかしきかな

自分の殻に閉じ込もってはいけない

(神奈川大学 経 四年 若山和宏)

「一人では達成できない事も、友達のを励ましや、協力で成し遂げられる」というような事を、最終日に小田村先生が話されましたが、その事が、深く心に残っています。今までの自分は、友達と学び合う難しさを避けて通ろうとしていました。しかしそれではいけないのだという気持ちになっております。一人よがりの考えの拙なさ、そんなものを、これからみつめ直していかなくてはと思っています。

国思ふころを友と語らへば今日の別れの悲しくなりぬ
つどひきて祖先の御霊まつりせば我心根の安けくなりぬ
国思ふ友とつどひて語らへば時のすぐるも忘るる心地す
講義をはり疲れし我眼ふとやれば霧島の夕暮れ美しきかも

参加して本当によかった

(宮崎大学 教 三年 廣木伸一)

日頃の感動のない生活のまま、合宿に参加し、最初のうちは、気持が集中できなかった。しかしながら、合宿四日目の班での打ち解けた語らいのなかで、ほのぼのとしたものが湧いて来て、気持がスッキリとしました。久し振りに生き生きとした心地がしました。これを機会に、今後は自分の心を見つめる学問をしたと思います。

今は、参加してほんとうに良かったと思っています。

小田村先生が「国民同胞感の探求」を私達にさし上げますと言はれしことに

先生のわれらを憶はれしみにこころに触れひさびさにわが胸うるほふ

勉強不足を痛感した

(亜細亜大学 法 一年 長谷部祥生)

合宿を振り返ってみて、今まで自分がいかに不勉強であったか思い知らされました。先生方の御講義を御聞きしても、難しすぎて、よく解りませんでした。班別討論によって、いくらか理解ができたようなものでした。私を導いて下さった班長並びに班員の皆様には深く感謝致しております。

ここで、いくらかでも学ぶことができたことを、これから生活の糧として行きたいと思えます。

峰かくす霧もはれゆき友どちと語らふことのいよよ楽しも

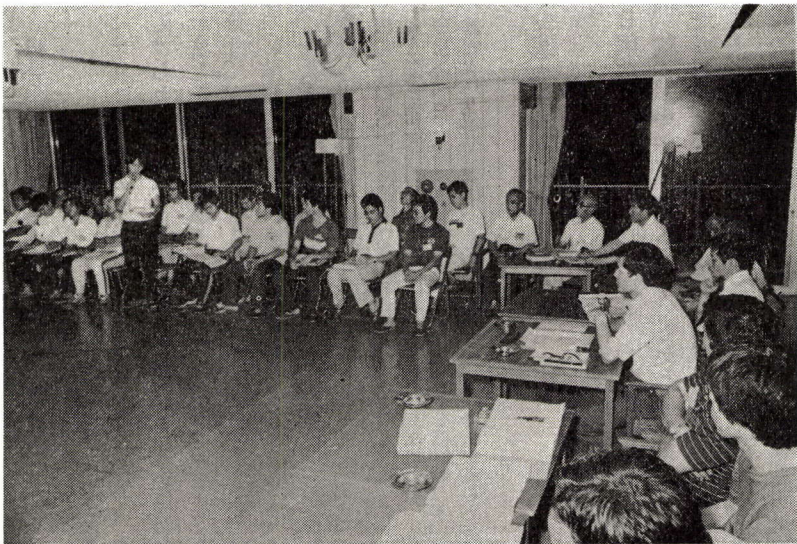
心に残る班の友との付き合いと和歌創作

(中村学園大学 家政 一年 中村博隆)

合宿で得た第一のものは、班生活での心の通った班の友との付き合いであった。親しい気持がしている。

第二は短歌創作である。自分に新しい心を与えてくれたと感している。三十一文字のなかに、自分の心がそのまま表われてくることを班別相互批評で知り、一段と創作意欲が湧いてきた。これからの生活は、歌を作ることにより、自分の内面を見つめ、この合宿で得られたような友達付き合いを深め

カメラ・レポート 17



その日の日程が終った夜遅く、検討会で班長からの報告を受けて、各班の問題点を整理し、明日からの合宿運営を考へる。

て行きたいと思つている。

合宿の友と別るにあたり

霧島を去ると思へば我が心に過こせし日々がよみがへりくる

第十五班——男子学生——

共に学んでゐる喜びが生れた

(九州大学 工 二年 北浜 道)

如何に班員を引っぱっていけばよいのかにとらはれて、心が閉ざされてしまひ、かへって苦しくなるのを覚えましたが、そんな氣負ひを捨てて、とにかく御講義をよく聞き、お話の内容の難しいところや脈絡のわからなかつた箇所、或いは、御講義中眠つてしまひ記憶に無い箇所を率直に述べ班員皆で自分の記憶を辿り述べ合ふ中におのづと共に学んでゐる喜びが皆の心の中に生れ、自然に皆の心も自分の心も開かれていった様に思ひます。こうした経験を今回班長を努めることにより、させていだいたことは、本当に有難いことだと思ひます。これから大学に戻つて輪読会を開き、友に語りかけてゆく時に、この経験がきつと私を勇気づけてくれると思ひます。

これからも学びゆかむとの友どちの明るき声の有難きかも別れても手紙を出すよと語るる友の言葉の胸に沁みぬる

大変重要な経験になつた

(拓殖大学 外国語 三年 篠窪 実)

この合宿に来て、想像以上に国粹主義的だなあと感じた。学校教育などで習つて来たことは、右でも左でも無く、少なくとも事実を述べている筈だから、この合宿における諸氏の講義が、それに正反対であることには、大変驚き、不気味な保守派の台頭であると感じ、「いよいよ日本もキナ臭くなつてきたぞ」と思われて、厭になつた。しかし、今まで、自分の意見を吐き出すということが一度もなく、あつたとしても「口先の深さくらべ」に終つていたので、他の人々と意見を述べ合つたことは、大変重要な経験になつた。

すべきことせずしてベラベラ言ふよりも行ひてのちに言はんとぞ思ふ

日本を愛する氣持ちを持ち続けたい

(八幡大学 法経 三年 上村謙一)

この合宿教室に来る前は、内容が難しそうで非常に不安でしたが、班員の皆もやさしくしてくれて、来て良かったと思つています。毎日が、驚きの連続でしたが、特に齋藤先生の御講義は、正直言つて、今まで思つていたことがくつがえされて、ややショックもありました。しかし、先生は本当に日本の国を愛されているんだなと思ひ、深く感銘しました。私もこの日本を愛する氣持ちを持ち続けたいと思ひます。この合宿教室は私にとっては、かなりハードスケジュールで、

三日目あたりから食欲もなくなるほど疲れましたが。本当に充実した五日間でした。

しみじみと深き感動いだきつつわれ霧島をくだりゆくなり

有意義な合宿だった

(熊本大学 教 一年 養田誠一)

本当に有意義な合宿でした。「学問と人生と祖国を考える」——これまでの自分はなんと貧困な精神生活をしていたのでしよう。一年浪人して入学した憧れの学園生活・それなりに楽しい毎日を過ごしてはいたが、果して、その中には本当の自分は存在していたのでしょうか。ただ周囲に流されていた様な気がしてなりません。その様な自分に、この合宿で気付かされました。そして、入学試験の難易で大学を見るような視野の狭さや勉強不足を痛感しました。

知らぬ間に激論深夜に及ぶ中我ら日本人とふ思ひわきくる。

人の真心に触れることができた

(防衛大学 理工 四年 神谷正一)

この合宿で得た最も大きなことは人の真心に触れることができたということだと思います。ともすれば現代社会では表面を取りつくりうただけに言葉が用いられがちですが、美しい大和言葉には言霊というものがあって、本当の言葉というものは真心から出て言霊を持っているものなんだと思います。合宿の中で講師や班友たちの語る言葉は何と直接私の心に訴えて



第3日目は作曲家・黒敏先生の御講義から始まった。先生は「日本の心」と題されて「日本人は古来より国土の豊かな恵みへの感謝の念から、自然と共に生きるといふ人生観を育んできたのです」と強調された。

きたことでしょうか。彼らの実のある真実の言葉から、私は彼らの真心に触れることができたのだと思っています。そしてまた、その彼らの真心の中に私達が本当に大切にしていかなければならないものを見出すことができました。今日日本では大切にされるべきものが随分とないがしろにされています。うかつな思いでいるならば、むしろその方が正常であるかの様に錯覚さえさせられてしまおうでしょう。この合宿では語られるひとつひとつの言葉の中に本当に大切なものはこれなんだということが力強く込められていましたが、それによって私は大変勇気づけられました。残すところ半年余りとなった学生生活の中で、私は自信を持って友人たちと語り合い考えていくことができそうです。言うまでもなく、それは本来の日本の姿を見つめ、日本人として何をなすべきかを知るためです。

小田村先生の最後のお話をお聞きして

日の本の国の心を説きたまふ老師の面のやさしかりけり

日の本の国は吾が心の内にありと聞きて胸内熱くなりゆく

心が洗われた

(亜細亜大学 法 二年 林 広樹)

輪読も講義も理解に困難で、自分の読書量、勉強量の少なさが反省点として自覚させられた。しかし、御講義、班別討論そして、全体感想発表の中で感じられた人の真心の大事なことがわかった。涙ながらに語る師の、そして友らの純粋な

気持ちに、久し振りに心洗われた。このようなことが感じられる場であった合宿は大変自分の為となったし、本来の日本というものに改めて感じさせられることがあった。

次々この地去りゆくみ友らに「再び会はず」と握手するなり

学問の奥深さを学んだ

(高千穂商科大学 商 一年 岩佐憲良)

この合宿教室に参加して今まで学んで来たものより一歩踏み込んで、ある事柄を見る大切さを感じた。歴史について一面からだけ見るのではなく、あらゆる角度から解いてゆき自分で判断するということを学んだ。班の先輩方のご指導、諸先生方の講義を受け、日本の歴史、日本人の精神、日本語の奥の深さを学び取ることができました。一語一語について深く味わい、作者の意図を論じ合う輪読会、疲れも忘れてはしゃぐ風呂でのひととき、いろいろの面で良い話を聞かせて下さった諸先生、先輩方に感謝の気持ちが絶えません。

いつまでも語り合ひたる友とちと別れ帰るはさびしかりけり

人との交流の素晴らしさを実感した

(日本大学 文理 二年 金谷美保)

物事をイデオロギッシュに考えてしまいう自分自身を正そうと思い、合宿に参加いたしました。参加してみても、素直に感じたものを、そのまま出せず口先の深さだけを追い求めていた自分に気づかされました。また、合宿での人々の交流は

本当に素晴らしいと聞いておりまして一種のあこがれの様なものをいっていました。大学にもどっても、一人一人の人を大変嬉しく思いました。大学にもどっても、一人一人の人を尊敬でき思いやれる、無理やこらえることのない自然なつき合いを友だちとしたいと思います。

国守りし御霊の前で誓ふのは吾が大学を正すことなり

第十六班—男子学生—

自然な心を実感できた

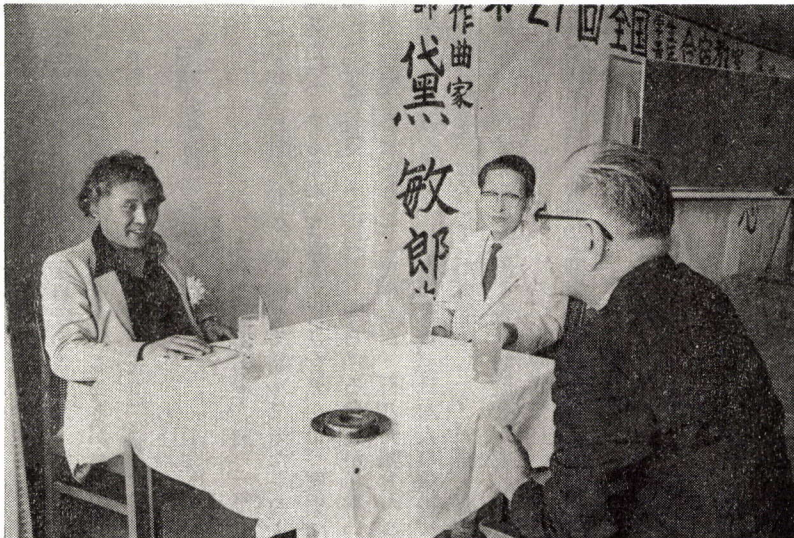
(防衛大学 人文 一年 是永裕樹)

強く印象に残っているのは加納先生の御講話の中で、A・スミスの「人間には名前の付けられない感情がある。それは欲情と節制の間の感情である」という言葉です。憲法十七条の中には、「人皆黨あり、亦達れる者少し」という一節がありますが、これと照らし合わせながらその中間の感情というものを考えると非常に難しい境地であるのに気付き、又それこそ自然な心なのだと思えました。和歌を作る時の心もこうでなくてはならないと思われ、和歌の難しさというも自分の心次第であることの意味を知りました。

合宿を終へて

我が不安ぬぐひし友の笑顔とも合宿終はりてわかれとなりぬ

カメラ・レポート 19



休憩時間に歓談される先生方。(左から黒敏郎先生、高村坂彦先生、小田村寅二郎先生)

御製を班員全員で味わうことが出来た

(早稲田大学 理工 四年 桑野忠生)

天皇陛下の御製については今迄幾度か学んで来たつもりでしたが、輪読で一つの御製を班員全員で一時間以上もかけて味わい、他の班員の思いがけぬ新鮮な感覚に驚かされたりして本当に深めることが出来たと思います。私にとつて一つの和歌をこれほど長時間みつめ続けるのは初めての経験でした。又、和歌の相互批評も夜遅く迄行い、心満たされる思いがしました。文章に接する姿勢、心構えも正され非常に喜ばしく思っています。

小田村先生の「合宿をかへりみて」を聞き

皆が心ひとつになれば日本は守られむとぞ師の君のたまふ

学問に対する基本的な姿勢を学んだ

(熊本大学 医 一年 藤川恭浩)

全体感想発表で涙ながらに語る仲間の姿に或る種の感動を覚えたが、自分はそれだけの感動をしただろうかと懐疑的な気持になった。学問は自分でするものだけれども、学問に対する基本的な姿勢についてこの合宿はかなり具体的な示唆を与えてくれたと思う、学問を志す者の態度、或いは人として生きる姿勢をこの合宿で学んだと思う。

霧島の山

いつの日かこの山のごと雄壮な男ならむと我は誓へり
日をうけてしるけく浮かぶ山の姿流れる霧にかくれ口惜し

生きた御話を聞けた

(西南学院大学 経 四年 町田周二)

講師の方々や国文研の先生方の御話は今まで学校で聞いた話とは全く違い生きた御話でした。それは先生方の御話には日本という国を本当に大切にするという真心が籠められていたからです。また班長さんを初め班の方々も其々個性があり輪読も討論も充実したものであったと思います。この経験をこれからの私の生活に生かし実りあるものにするのが課題であると思いました。それは多くの本を読み勉強して自分自身を見詰め直し真っ直に生きていくことであると感じました。

合宿最後の日

笑ひたる友のおもわにみ友らの心は一つになりゆく心地す

充実感に包まれている

(拓殖大学 外国語 三年 高橋恭一)

今回の霧島合宿が終わろうとしている今、僕は澄んだ空を見つめるような充実感に包まれています。去年の合宿から一年間様々なことを経験し色々なことを知りました。そして今回は身構えずに合宿に参加したいと思いました。それでこの様な充実した気持になることができました。皆さんどうもありがとう、ありがとうございました。

つどひたる友らよ互ひの心聞き最後の夜を語りあかさん

歴史を受け継いでいるんだと思った

(鹿児島大学 水産 三年 稲留康二)

四泊五日間の合宿において講師の先生方が話されるのを聞いていくうちに、日本の歴史、伝統文化は今日まで守り、受け継ぎ、伝えてゆこうとする人々の意志の力によって守られて来たということを実感させられました。そして、この講義を聞いている今、歴史を受け継いでいるんだと思いました。先生方の人生に対する姿勢そのままが感ぜられ、自らのそれを問い返させられました。班別討論においても、本当に実感した言葉を使っているのか、友の気持を察しようとしているのか、友の言葉に出来ない苦しみをかろうとしているのかを問い返さずにはいられなかった。和歌創作と相互批評において思ったままを言葉にするすばらしさを体験でき、うれしく思っています。

語り合ふ言葉の数は少なけれど吾らが心は通ひ合ひたり
五日間の合宿の思ひむねに秘め霧島の地をいで立ちゆかむ

もっと勉強しなければと思った

(亜細亜大学 経営 三年 佐和田立雄)

合宿を終えた今の気持は来て良かったの一語に尽きまず。御講義、班別討論等での一つ一つの言葉に問い掛けられ、考えさせられました。班別討論では皆に中々ついてゆけず、恥ずかしい思いがしたとともにもっと勉強しなければという念

カメラ・レポート 20



第3日目の午後。「和歌創作導入講義」をされる亜細亜大学教授の夜久正雄先生。歌をつくる意味として基本を述べられ「歌は人生のしるべとなる」ことを訴へられた。

に駆られました。最後に、小田村先生の言葉で「目標を持つことは生き甲斐を持つことだ」という言葉に感銘を受けました。

我友の皆に伝へたきその意志は言葉知らずとも伝はりにけり

第十七班—男子学生—

もっと勉強したい

(拓殖大学 外国語 四年 大嶋博文)

合宿を通じて、今までの考えとは異なったものが自分の中に生まれてきた。そして今自分の頭の中は混乱している。この五日間、新たに、自己に忠実になれ、自分を見詰めることができたことに驚くとともに、講義を聞いても良く分からなのまま過ごしてしまっただけで自分が情無かった。今後はもっと勉強して参ります。

合宿の最後が近づくにつれて

時はすぎ語りあかせし友どちと別れとはなれどまた語りたし

素直な気持で接してゆきたい

(熊本大学 薬 一年 有馬英俊)

初めての参加で良く分からないうちに終ってしまっただけもするが、これから自分が勉強してゆく上での目標は自分なりに掴めたと思う。小柳先生の御講義の中の「皆の持っている

感受性を学問で隠してはいけない。生意気な心で傲慢な心で隠してはいけない。さういふ傲慢な心さへなければ諸君の感受性はみな育つのです」という小林秀雄先生の言葉に大事なことを気付かされた。班別討論で「観念、知識だけでものを言っではいけない」とよく云われたが、この言葉に触れ目の前が明るくなった。そうして、もう一度自分の素直な気持で人や書物に対して向かってゆこうと強く思った。

班付の先生がお別れにこられて

班討もうれしかつたと話さるる師のおこころにうれしくなりぬ
来年もまた来ようといひたまふ師のお言葉の有難きかな

もっと広い視野を持つとう

(福岡教育大学 教育 一年 有田 浩)

この合宿に参加して、私がいかに小さな世界の中で生きていたかを感じました。先生方の御講義や輪読での討論は私にとって真新しく今まで考えもしなかった次元の違う事のように思えました。私たちが今真剣に考えなければならぬ事が無数にあることに気付かされました。これまで身勝手に小さな見方しかできなかった自分が恥ずかしい。もっと広い視野で心から何にでも取組んでいくべきだと痛感しました。

苦しくも先輩方の励ましに胸の奥より力湧き出づ

味わうことの大切さを知った

(長崎大学 教育 二年 伊藤和久)

四泊五日過ごしているうちに、忘れかけていたものが自分の心に感ぜられてきた。それは「味わう」ということの大切さであった。大学に入学し、天皇陛下の御製や国を守り先立ってゆかれた人達の御言葉に触れ得、この尊い思いを学友に語りかけて来た。しかし、それとともに、自らの心の中に抱えているものをじっくりと見詰めることも決して忘れてはならないと思った。

慰霊祭にのぞみて

たなびける煙いだして燃えあがる迎へ火あかく闇を照らせり
頭たれ御霊迎へし吾が前に亡き師の君の降り立つを思ふ
頭あげ再び見つむる迎へ火に御霊やどりてあかあかと燃ゆ
海ゆかば歌ひあげたる皆の声のみだるる節のひとつだになし
もろともに歌ひあげたる海ゆかばたどるしらべの何ぞかなしき
直会も済ませて帰る足どりのなどて軽しや心ならずも

自分の方からぶつかってゆけた

(高千穂商科大学 商 二年 小林克浩)

先生方の御講義は難しく充分に消化しきれず、班別討論でも自分の方から話し合いに中々入れなかった。その時班付の先生が「自分の方からぶつかっていかなければいけない」と云われ、もやもやしたものが消え、その後は何とか自分で感じたことを云えるようになった。今年の合宿の収穫であった。新たな友と巡り合え、心の底から話し合える喜びが昨年も増して強かった。

合宿の最後の夜の討論はかたれどもかたれども話つきなし



霧島神宮の宮司さんに神社の由来を聞いた後、参拝を終へ、杉並木の参道を語らひながら降りる学生たち。

先生の友を思ふ御心に感動した

(西南学院大学 文 四年 結城誠二)

今回の合宿で特に印象深く、僕の胸に刻まれたのは、小林国男先生と加納祐五先生の御講義をお聞きしてのことです。

小林先生が故高瀬伸一さんの

「荒れ狂ふ海のはたてはますらをのいのちのすてどいさぎよくゆけ」

といふ遺歌について、「高瀬君が私に、荒れ狂ふ海の姿が自らの人生の実相であると語ってくれてゐる様に思ひます」と切々と語られ、先生の友を思ふ御心が非常に尊く感ぜられました。これから山を降りて、僕の学問を支へてくれるのは、これ等先生方の御言葉や四泊五日共に学んだ友らの言とだ葉思ふ。

小林国男先生の御講義を御聞きして

切々と御友のことを語るる師の御言葉のしらべかなしも
今はなき御友思はるる師の君の御言葉聞けば涙のこみあぐ

心から感動したことを語る以外にない

(立命館大学 文 三年 濱田清人)

班別輪読、討論、短歌相互批評の場で、班付の先輩から「文章を深く読んでないから感じられないんだ」と指摘され、悔しくて思はず涙が出ました。そしてこれまで分かった積りでいたことが自分自身全く分かっていなかったのだと氣

付かされ愕然としました。根本のところは欠けていたのではないかと思いました。自分が心から感動したことを友に語る以外にないと思いました。深く書を読み、短歌を味わうことしかないと痛切に感じました。

この日々をともに励みしみ友らの一人一人を見つめをるなり

第十八班—男子学生—

多くの学友にも拡げていきたい

(宮崎大学 教育 四年 榎原和彦)

合宿教室を一日一日過していくうちに、班の皆と少しずつ心が通いあっていき、最終日には、学年、年齢を超えて心が通いあっていたように思う。しかし、自分にももう少し心を開ききれないところもあって、これから宮崎に帰って、この合宿教室に参加した宮崎の友、また、竹下先生方と共に、日本人の心のつながりを、もっと多くの宮崎大学の学友にも拡げていきたい。小田村先生の最後の御話には、一人一人の心のつながりが本当に大切であり、人生の根本の問題であることを感じさせられた。

小田村先生の「合宿をかへりみて」を聞きて

先生の言はれし言葉胸にきざみ学びの道をはげみてゆかむ

共感の世界こそ人生の喜びだ

(福岡教育大学 教 三年 森田重隆)

長内先生が「身近にいる人に心を寄せてゆく、そこに日本の心があるのだ」と言われた御言葉に深く感動しました。やもすれば、日々の勉強が自分だけのものとなり、それ以上何も得られないことに陥っていたことを思うと、この合宿に来て大切なことに気付かされて有難く思っています。本当に、既成の知識だけで講義を聞き班別討論に参加しても何も得られないと思います。そして、友だちとの共感の世界こそが人生の喜びだということを肌身にかけています。

真夜中に班長と語りて

何故に志続けられしか班長は友どちのことすまぬと言ひし

班長の思ひこめたる御言葉に我が心内開かる思ひす

志半ばに逝きしその友のことを思へばかなしかりけり

我一人残るといへども新しき友どち求めむこの地を去りて

熱いものを感じた

(亜細亜大学 法 一年 渡辺誠司)

自分が今まで受けてきた知識や考え方で、先生方のお話をお聞きしても困惑するばかりであるが、先生方や友だちの御心に触れて、熱いものを感じました。また、天皇の御製を拝読させていただいても、みなおだやかでやわらかさを感じさせられました。自分は合宿でこういうものを大事にしたいと思いました。

静かなるひぐらしの声に聞きいりて天地のめぐみしみじみと思ふ



黛敏郎先生も御講義でふれられた天孫降臨の地、高千穂河原で古を偲びながら楽しい一時を過した。

今までに無い感動があった

(中京大学 商 二年 竹野浩司)

「高千穂の河原に立ちて偲びをれば古の人を身近かに感ず」高千穂での率直な感じである。今までに霊峰御岳山に数回登ったことがあるが、その時の感動とは全然違うものを感じた。

又、今の学生は三無主義と言われているのに、全国から三百余名の人が集って、一つのころざしに感動共感しているのには驚いた。

古の書を友らと読みゆけど何を言はんとするかみえず

日本人の心を養ふ和歌創作

(国学院大学 第二文学 一年 柏本吉朗)

浪人時代より、今の社会通念に疑念を持ち、本当の日本人になろうと神道を学んで来たが、今回の合宿で、更に学ぶことがあった。一つは、和歌の創作により、先人の心に触れ、又、自分自身が自然に触れることによって、日本人の心は、日本の気候風土によって作り上げられることを感じた。又、知識の積み重ねだけでは駄目で、人と人が、心を通はせることこそ、日本人が長年養って来た日本人の心にはかならないことを知った。

はるかなる霧島の嶺ながむれば雲わさうごくたくましささま

人間として生きるための学問を心がけよう

(防衛大学 人文社会 三年 山本正浩)

この合宿では思ったことを素直に口に出すことが出来ました。変に理論付けることもなく話をした後すっきりした気持ちになりました。それが人間の生活の中で自然だと思えます。お互いに真剣に語り合えば、いつか気持ちは相手に伝わるということを知りました。日常の生活では、忙しいなど云ってじつくりと語り合うこともあまりなく、また外からの知識をそのまま取り入れてしまう感があります。しかし、それでは何の為に生きているのか分かりません。これからは人間として生きる為の学問を心掛けようと思っています。

バスを降りホテルに向かふ雨の道かさをさしかけし友有難し

第十九班—男子学生—

国文研の先生方の生き方に心を打たれた

(熊本大学 医 五年 古井博明)

慰霊祭の折の先生方の御姿に、御国を思はれる心がありありと見え、自らその心を通ひ合ふ思ひで一杯でした。また閉会式の最後に御挨拶された宝辺先生の御言葉に「国文研は今までいかなる政治的な力に左右されたこともなければ、またこれからもない。たゞ御国が安らかなことを念じてゐるだけ

です。」とありました。かういふ尊い思ひで生きて来られたことに胸が熱くなり頭が下がる思ひでした。

加納先生の御講義の折、小田村先生が涙をこぼさるるを見て
友だちに助けられつつ生き来しとふ師の御言葉に大人涙さる
国の為ともに戦ひ生きたまふ二人の大人の御心せまり来

生きる活力を得た合宿であった

(西南学院大学 経済 三年 中村洋一郎)

不安と期待を胸に集い合った私達でしたが、今、ほんとうに人として、心の底から通じ合う何かを感じていると思う。感動と発見の四泊五日間でした。この合宿教室には、人と人とのふれ合いがあり、美しく輝く真実の魂の叫びがあったように思えてなりません。今まで自分自身が物事にいかに誤った態度で接していたか、そしていかに認識不足であったかと云うことを思い知らされました。

明日の世界、明日の日本を背負って立つ私達若者がイデオロギーなどというものに囚われる以前の人間の生涯目的というものを今一度考え直し、そこから自分自身の進むべき道というものを見つけて行くべきだなあと感じました。

日本を良くすることは取りも直さず私たち一人一人の人間関係を良くすることであり、それがひいては地球全体を良くすることになるんだと思ひます。

全体感想発表で「私たち人間は自由で、すばらしい世の中を作る力を持っているのです」とある人が云はれましたが



夜久正雄先生の御指導をかみしめ、レクリエーション中、和歌創作に余念のない学生たち。

私はこの言葉がこの合宿のすべてを言い表わしているように思えます。この合宿で、すばらしい友や先生、先輩にめぐり合うことができてほんとうに、うれしく思います。この合宿から私は生きる活力を得たような気がして、今、すがすがしさを胸が一杯です。

去り行かむこの霧島を後にして我は忘れじ友しらの声

御製に心がゆさぶられました

(亜細亜大学 経 四年 石川誠司)

小柳先生の御製の講義でお聞きした数々の御製に、心がゆさぶられました。今までただ読んでいた御製の「祈る」、「思ふ」といふ御言葉に、陛下の並々ならぬ御氣持が込められてゐたことを初めて知りました。何か大切なことを一つ学ばせて頂いた氣持で山を下りられ、本当に有難く思っております。

御製を読み

国民の上を思はれ祈らるる陛下の姿目にうかびくる
かくばかり国民のこと思はれし御心知らず悲しく思ふ

真剣に学ぶことの重要性を再確認した

(九州大学 法 二年 溝口正久)

講義や討論を通じて真剣に学ぶことの重要性を再確認できたことをうれしく思います。日本をもう一度自分の心を見つめながら思いかえしてゆきたい。防衛問題のような時事について、歴史に対する認識について、講義ではいつも自分の心

になじまないものを感じながらすごしてきましたが、さらに考えていく契機になったことは確かです。どのような考え方をしていくにしろ、他人まかせに追従していくのではなく、自分の心の自由を守り貫くためにも、自分で学び考えなければならぬと思います。禁欲的な五日間でしたが、次への飛躍のステップとなったこの合宿に感謝します。

情熱をかけて学ばむ真実を生きる糧でなく心の自由のため

何でも体験してみること

(中村学園大学 家政 一年 福田天志)

僕が今、思っていることは、自分の小さな「から」に閉じこもらないで、何でも体験してみるのが大事だということです。そういう意味で今回の合宿は非常にためになったと感じています。

しかめ顔で堅き話をせし人も今となりては別れがたき友

心を開くことは自分が素直になることだった

(佐賀大学 経 四年 藤井勝)

友よ！ と自分から心を開いて語りかければ、友は心を開いてくれることを経験したように思います。心を開くことによって自分の氣持がようやくにして友に伝わった時、私には本当にうれしく思われたのです。

今回、私にとって心を開くということは、自分のメンツを捨てて、自分の素直な氣持を語ることでした。このことは、

頭でわかっていてもなかなかできないものです。これを修練するために、和歌創作にはげみ、毎日明治天皇の御製を拝誦していきたいと思います。また、黒上正一郎先生の「感応相称の世界」という御言葉こそ、日本の心であると思い、これを大切にすることこそが国を守ることではないかと思はれます。

最後の班別懇談にて

さはやかにすなおなるらむと言ひし友その言の葉のすがしかりしも

学びの心を失なっていたことを痛感した

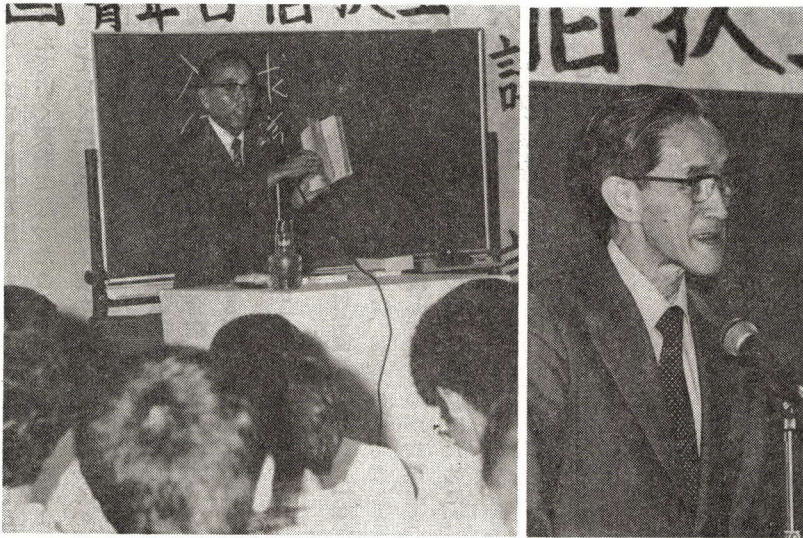
(早稲田大学 大学院 二年 勝岡寛次)

自分の中にある妙な自信、己惚れが恥ずかしくなった四泊五日間であった。人を学歴で判断してはいけない。そんなことは当然のことのように思っていた自分が、いつしか自分のレットルに抛りすがって生活していたことをたまらなく恥ずかしく思う。

人、皆凡夫のみという聖徳太子の御精神が限りなく尊いもの思われてならない。小田村先生をはじめ、国文研の方々には一等感じるの、そこに少しのおごり高ぶったところや、傲慢さの微塵もないところである。

私は後輩を多く連れてこの国文研に参加したが、後輩を指導せねばならぬ私が後輩の誰れよりも傲慢で、学ぶ心を失っていたことを痛感した。

後輩の感想発表を聞き



第3日目の夜、二人の先生の御講話を拝聴した。短い時間ではあったが、参加者一同、深い感銘を受けた。(左から元若松商業高校校長・小林国男先生、元日特金属工業株式会社常務取締役・加納祐五先生)

次々と立つ後輩の姿見ればありがたきかな胸のあつくなる壇上に初めて立てる後輩よしつかりやれよと小声で励ます

先輩についていきましと詠みし君その真心の専かりけり

さはやかに気負ひ捨てたりと言へる君思はず我も学ばざれたり

後輩の思ひにこたへ席を立つ先輩の姿麗はしく思ほゆ

おもむるに和歌取り出して詠める君朗々たる声会場に響けり

心を開いて話すことが不安であった

(防衛大学 理工 一年 山倉幸也)

合宿へ向う車中「本当に心を開いて話ができるのだからか」と不安に思っていた心は、日が経つにつれて薄らいでいきました。

合宿を終える今、参加させて頂きうれしく思っています。心を開いて素直になって、友達と語り合う喜びを、わずかではありますが、知ることができました。班別討論の際、真剣に耳を傾けてくれる友達の間には、何か伝わってくるものを感じ一体感を持つことができました。このような体験は貴重なものだと思います。

知識を求めただけの学問ではなく、心を開き、研ぎすまして、物事を敏感に感じとれる心を練る学問をするように心がけていきたいと思っています。

涙して思ひ語れる友どちの姿に我は心打たれり

第二十班—男子学生—

自分の心を慰め励まして下さった

(産業医科大学 医 一年 井上義崇)

今年も多くの貴重なことを学ぶことができて感謝しております。多くの感銘深いお話の中で特に思い出されるのに、加納先生の御講話があります。何かを学びとろうとすると、どうしてもそこに焦りができて、自分でも気付かないうちに心の働きはにぶくなる。先生のお話は、そんな自分の心を慰め励まして下さるようでした。限りある生命を受けた人間が生きてゆくということは、どういふことなのかを考えながら、この合宿で学んだ経験を日頃の生活にも生かしてゆくべく頑張りたいと思います。

阿蘇の地でもに学びし友ごちはいまはいつこにて学びをらむ

目が開かれる思いがした

(熊本大学 法 一年 跡部隆文)

私は初めてこの合宿に参加したが、もともとあまり乗り気はなかったのである。それは、私があまりにも外観にとらわれていたからだ。「天皇」、「国家」という言葉を聞くだけで逃げ腰になっていた。しかし、この合宿は私の片寄った考えを正すのに大いに役立ったと思う。小田村先生が最後に言わ

れた「イデオロギー以前の人間の本質的な生きる姿」を求めること。このことを考えたとき、目が開かれる思いがした。

「人間の本質的な生きる姿」を求める先生方や先輩方にめぐり会えて本当に良かったと思う。講師の方々の御講義は、私には難しく容易に理解できないと思うが、その一つ一つの言葉の中には、私達にとって最も大切な何かがあると信じて、これからもしっかりと学んで行きたいと思う。

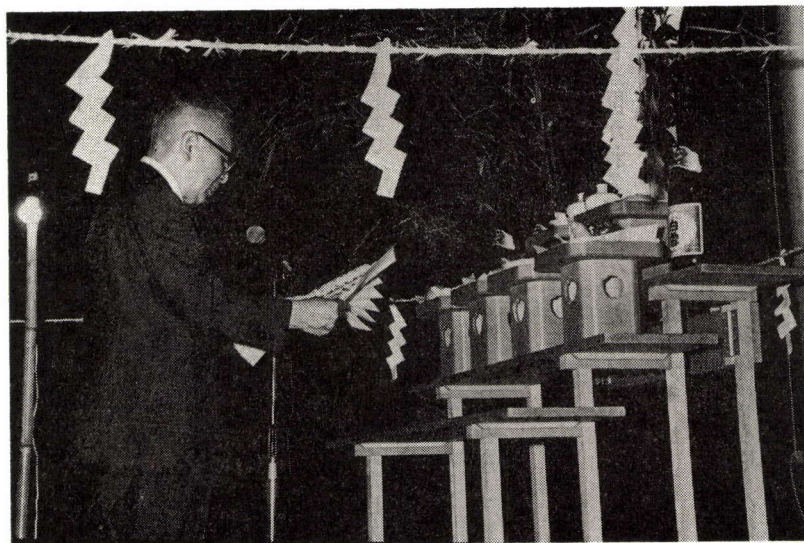
温泉のけむりにほひなごりをしはじめは悪しと思ひてをれど

日本人としての自覚の希薄さを感じさせられた

(早稲田大学 社 二年 野口孝造)

この合宿を終え、まるでもう夏休みが終わったような気が致します。この合宿で得たものが真に自分の血肉と化すか否かは、これからの僕の生き方にかかっていると思います。ただ、痛切に感じたことは、小田村先生や齋藤先生の、祖国日本に対する思いが自分の思いとは天と地ほどの差があるということだけです。自分の日本人としての自覚、意識の希薄さを改めて嫌と言うほど感じさせられました。これを克服するには幕末の志士等の先人の遺した生きた文章、天皇陛下の御製等を、丹念に繰り返し繰り返し読む以外ないでしょう。そしてそのようなことを積み重ねることが、自己の思想營為、日本精神の昂揚につながるのだと、僕は確信しております。

吾が後輩の熱き言の葉耳にせば思はず知らず吾が眠うるみぬ



「慰霊祭」。高千穂商科大学教授の高木尚一先生が祭文を奏上される。

自分の至らない点が見える思いがした

(中央大学 法 四年 小柳太喜夫)

我々にとつて大切なのは、各々が人生の目標を立てること、生き甲斐を見出すことであり、そうした目標や生き甲斐というものは、我々が日々使う日本語や、生を営む文化や伝統とは切り離せないものだと言われたとき、今の自分の至らない点が見える思いがした。今、合宿を振り返るとき、未だにぬぐえぬ思いがある。それは、自分の思いが容易に他人に伝わらないということである。その問いに対する答が、先生のお話から得られたような気がする。自分の言葉にならない思いなどというものは、所詮、人生の目標などではないのではないか。生き甲斐とは、やはり自からの生そのものでなければならぬのである。そうした生き甲斐こそ、他人にはじめて語り得る言葉を伴うのではないかと思われる。

言の葉の拙なき我をかばひくれし班長の思ひやりありがたきかな

ハンマーで後頭を殴られた思い

(岡山大学 教育 三年 難波真二)

今年初めて合宿に参加して有形無形の多くのことを学んだと思う。小田村先生が、「日本国民が、我が国固有の文化、伝統を守ることは、イデオロギー以前の問題である。」と話されたとき、自分は一体今まで何をしてきたのか、また、何を学んできたのかとはずかしく感じた。まるで、ハンマーで後

頭を殴られた思いがした。これから、合宿を終え日常の生活に帰ってゆくが、小田村先生の言葉を忘れることなく、これからの大学生活を送ってゆきたいと思っている。

心ひらき友らと語る楽しさを霧島に集ひ初めて知るなり
合宿で学びし心忘れずて日々のささへとは励まむ

お互いに心に通じ合うものがある

(拓殖大学 外国語学部 四年 國井隆之)

今の自分には、何か言い表わせないものを心に感じて言葉になりそうもありません。敢えて言えば、正に日本への回帰と申せましょう。日本に生まれて日本語を話すから日本人というのではなく、この日本の大地に生を受け、そしてお互いに心に通じ合うものがあるということを、この四日間で自分の中に意識したことは、これからの人生において大変に大きなことであります。また、私が肝に銘じようと思うことは、あの高齢の齋藤老師が、これは遺言になるかもしれない言われつつ熱弁をふるわれるその姿……その姿であり、その行動を起こしている意志を学びたいと言うことです。松陰先生の「留め置かまし大和魂」の心は、私達の心に内在しているでしょう。

友どちの静かに語る言の葉に思ひのこもりて心うたるる

同志がたくさんゐる

(防衛大学 理工 二年 村上和彦)

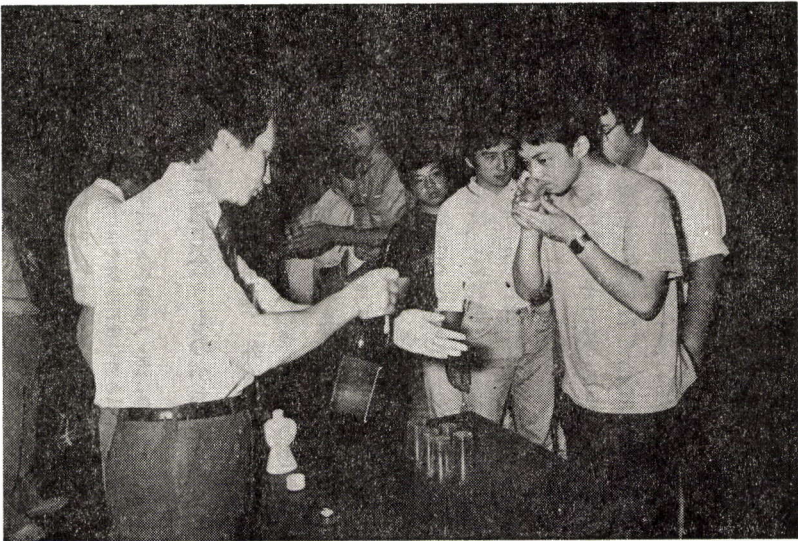
この合宿における班別討論、そして、朝の三時、四時まで他大学の学生と語り合へたといふことは、私にとって本当に良い経験になったと思ひます。今、この合宿を振り返って一番強く思へることは、我々防大生と同じ考へを持ってゐる人がたくさんゐるんだといふことです。「あなたは、自分の身はどうなるうとも国のために戦ひますか」と問はれたとき、胸を張って「戦ひます」と言い切れる、それは防大生にとつてはあたり前のことなのかもしれないが、さういふ純粋な気持がこの合宿を通じて強くなり得たと思ひます。

漠然と今までもてる防衛の心強くし任にはげまん

友に一步近づけた

(九州大学 医 六年 杉谷 篤)

私がこの合宿に参加したのは、日頃からつきあっている友達の間を知りたかつたからです。彼らには、私が慕い、学びたい、かくありたいと思う何かがあります。合宿を終えた今、一步近づけたように思います。また、先生のおっしゃること、友の話していることを「わかるう、わかるう」と思い



慰霊祭の後、神々の御霊に捧げられた御神酒をいただく。

ながら耳を傾けておりましたが、何ひとつとして完全には理解できぬ自分に気づくばかりでした。

合宿が終わるとすぐさま桜島の噴煙を見に行こうと思っていましたが、全体感想発表で壇上に立たれた方々の気持を聞いたとき、桜島の雄大な姿は今の自分には似つかわしくない気がして、すぐには行けそうもありません。

君が代を声高らかに唱ふとき大和心のおのづとわきくる

疑問の答が得られた

(熊本大学 工 二年 杉浦 斉)

僕は、今の自分で良いのだろうかという疑問を抱いて合宿に参加しましたが、それに対する答を風呂の中で出会った北浜さんとの会話に見出したような気がしました。それは、風呂から戻って班長の上村さんと語り合ううちにもっとはつきりしてきました。本當にうれしく仕方ありません。

それから、最後の小田村先生の御話を聞いて、先生への尊敬の念を新たにしました。それは、事実に基づいた冷静な御姿勢を御話の中に感じることができたからです。その御話を聞いて信ずることの難しさや素直な心というものの尊さを痛感しました。

友どちの短歌の才をうらやめどもうらぬ我身なるかな

真剣な討論

(関東学院大学 工 二年 益田聰一郎)

私は、これまでにこれほどの時間の討論をしたことはありませんでした。友人ととりとめのないことを語り明かしたということはありませんが、ここでは初めて顔を合わせた者の合宿であり、ここまでお互いの意見、感想をぶつけ合えたのは、自分自身でも信じられないほどのことであります。

先生方のお話は、私としては養成できない場合も何度かありましたが、その都度、自分の考えより先生方の考えの方が良いとか良くないとか新たに見直すことができたのは、とても大切なことだと思っています。

五日間を通して感じたことを、とある人々に伝へたくて詠める
我が心日の丸にあり君が心何処さまよひ道それたるか

論理ではなく心

(長崎大学 教育 一年 宮崎正樹)

この合宿を通じて一番感じたのは、「論理じゃなくて心だ」ということです。日本を否定する、イデオロギーで固まった人達に対し、理論武装して論破しようと思っていたのですが、それは、自分がイデオロギーで固まることだ、本當に日本を守るのではないと知らされました。日本を守るとは、隣の人を思うこと、美しい心をよみがえらせることだと教えられました。まだまだ自分は日本の心を実感できていないなと思いました。先生方の御講義を聞き、今上陛下の御製に触れ、班別討論をするうちに、そういった思いに至りました。

全体意見発表にて

壇上で語る友らの言の葉は熱き波となり我が胸をうつ

心を開いてくれた友

(宮崎大学 農 四年 上村栄章)

短い合宿であった。だが、自分の心が美しくなりゆくのを覚えて嬉しく思う。振り返れば、講義の言葉の一つ一つがよみがえって来る。大学生活の中では得られぬものであった。四日目まで心開いて語ってくれぬ友に、なんとかして語ってもらいたいと思うのだが、自分の言葉だけが空しく響いていた。そのいらだちを思いつつ自分の思いを述べるうち、友が少しずつ語りかけて来たのが嬉しかった。その言葉が今も忘れられぬ。

この地よりわかるることの惜しきかな心かはした友と思へば

班長の言葉

(早稲田大学 政経 三年 石黒雄一)

班長さんと話しているときに、「友と話している時には、自分の思ったことはすぐに相手に言わなければならない。自分の思っていることを相手に話さないとは非礼なんだ。」と指摘され本当に感じ入りました。私は、自分の考えたことをややもすれば自分の裡に留め、話すのを控えがちにしています。話さないということは、相手と心を通わすのを妨げていることが多いのだと思われました。班別討論を重ねてゆくうちに、友らの心からの言葉を聞き、本当に充実を感じまし



編歌の終わった和歌を、翌日の和歌全体批評に間に合はせるために、国文研若手会員により深夜までガリ切りを行ふ。

た。

慰霊祭にて

警蹕の声に誘はれ祖先らの魂魄ここに集ひたまひぬ

友と本当につき合えた

(亜細亜大学 経 三年 天野敏也)

今、合宿を終えた時、何か素晴らしい感激が頭の中から体全体にまで溢れ出ています。なぜならば心の大切さがわかったような気がするからです。小田村先生の有名、無名大学の差など考えることのないつき合いができるということを言われ、それが五日後には何年もつき合った友のようになれたことをとても嬉しく思います。そして、その中で自分がひとつ成長したのではないかと感じています。合宿中は、常に苦しい事ばかりでした。なぜなら、講義を聞いても全部を理解できたものはひとつもありませんでした。討論の時になくても自分自身の意見もろくに言うことができなかったからです。しかし、そのような場合でも班长さんの心暖い愛情によって助けていただきました。非常に感謝しています。

五日間寝食ともにつきあへばわかれのつらさ身にしみるなり

第二十二班

男子学生一

人の心を大切にしている心情を感得した

(一橋大学 社会 一年 下村訓弘)

この合宿では、日本の源を、日本の伝統を、日本の進むべき未来を、そしてそれらには一貫した日本の精神が存在するのだということを教えていただきました。しかしまだ、その教えを自分の血とし肉とし得たわけではありません。もし仮りに明日、まったく別の教えを受ければ、それに流れるやもしれぬ、危きわが心であります。とはいえ、僕はこの合宿の間中、先生方の教えに、参加者全員の心の間に満ち満ちていた「人の心を大切にする、素直なる心を持つのだ」という心情だけは、心から感得いたしました。これは実に私の成長であります。

合宿最後の日

合宿の明くる朝に雨降りてさびしさひとしほ胸にこみあぐ

心からの言葉に動かされた

(防衛大学 理工 一年 宅間秀記)

私は、この合宿で本当の学問に触れたと思う。大学の授業は、無味乾燥なものであった。しかし、この合宿では、先生方の胸に迫ってくるような講演を一言半句も聞きもらさないようにと真剣に聞き、班討論でも、時間のたつのも忘れ、夜中まで心を開いて討論し合った。

また言葉の大切さも知った。意見を言おうとするのだけけれど、自分の考えがうまく言葉にならないもどかしさ。やはり自分が生半可な知識のみで頭で考えていたからだと思う。友の、自分の体験に即しての、心で感じたままの意見を聞いた

時、心動かされるものがあつた。もつと本を読み味わい。感受性を養い、心の言葉が発せられるようにならなくてはいけないと思つた。

心より出でたる言葉皆人の心に伝はり心動かす

真摯な会話が行われるよう語りかけて行く

(国学院大学 文 二年 水嶋朗美)

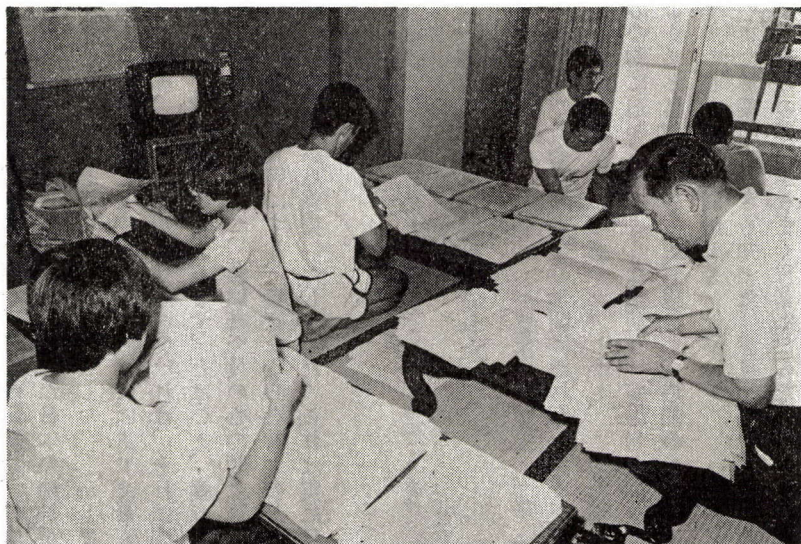
日本の本来の心をあらはして行かう、といふ事は、先づ自分の内に日本を回復せねばならないといふ事である。学内において、友が愛が平和が、むやみやたらに語られる事を見過ぎしにはできない。日本人が一言一句に心をくだき、伝へんとし、あるいは汲まんとしたやうに、真摯な切実な会話がなされる大学であつて欲しいと願ふのである。

黙つてゐては始まらない。自分の方から積極的に語りかけて行かう。それは時には失望であり、時には哀しみであらう。私は、日本人にとつて「かなし」といふのは己が傷つくことではないと思ふ。「かなし」との心あるが故に、「いとし」の心が出るのではないか、と今合宿中、諸先生方のお話を拝聴しながら思つたのである。

本来あるべき日本の心を、そのくもりを払って、そのままにあらはしむれば良いのである。そのたかひを、吾がたかひの原点と再確認して、大学に戻って行きます。

班別討論にて

身の上のまことのはなしせつと語り給へる友ぞたふとし



1万数千枚にも及ぶ印刷を終へ、最後の仕上げに向けて頑張る高校生たち。

「日本語を愛する詩人であれ」の言葉を心に刻んだ

(早稲田大学 第二文 二年 樋口 徹)

難しいことを得た訳ではありません。ただ心に強く刻んだことは「日本語を愛する詩人であれ」ということでした。

大東亜戦争を考える場合にも、「戦争は悪だ」と規定することはいかにも簡単です。しかし、この空虚な言葉で全てをかたずけていいものでしょうか。ある英霊の方の遺書を班で輪読しました。その言葉を追いつつ、英霊の方の気持ちに一歩一歩でも近づくことはできません、その気持を僕達の言葉で規定することは決してできませんでした。

これまでの日本人は、数千年の昔から、先人達の残された言葉の心を大切に後世に受け継いできました。これが文化であり、伝統であったと思います。そして、また、僕達も、この心を次の世代に伝える使命を持っています。僕は、全ての日本人が、「日本語を愛する詩人」であってほしいと願います。

全体発表の折

先輩の思ひに答へ後輩のとつとつ語る姿うつくし

意味の深い出会い

(福岡大学 商 四年 東瀬戸 格)

班別討論時の皆の一つの事がらに対する様々な意見等を聞く中でいかに自分が未熟であるかを痛切に感じました。私の

これまでの人とのめぐり合いの中で、これ程意味の深かった出会いは、今回が初めてであったように思えます。学問の本質、それに取り組む時の姿勢、一つの歌にしても、三十一文字の中にある意味、そこから何を学ぶか、何がつかめるか、つかんだものをどうかすか、……実に奥が深いものだと感じます。

戦争体験のない私にとって、ギリギリまで生きた人の遺書というものが、どれ程重いものかは、だいたいのことしか感じとれません。私と同世代の若者たちが、何のために生き何のために死んでいったのかを、私のこれからの人生に問いかけながら生きてゆこうと思います。

合宿を終へて脳裡に残れるは生きることとは学ぶことなり

真に語り合うということを学んだ

(西南学院大学 文 四年 松下 誠)

合宿で学び合った班友と最後の懇談を終えて、この紙面に向かう時、まずこの合宿で経験したさまざまな驚きと感動とがこみあげてきます。諸先生方の御講義や友との語らい、討論を通して、毎日の生活では味わうことのできない充実感と疲労感とが緊張した気持ちに次々と積み重ねられてゆきました。殊に、班別討論では遠く各地から集まった同じ世代の友だち同士が、定められた時間をすぎ深夜に及んでも尚ひとつの歌、ひとつのことば、一人の友のことばを味わうと共に心開いて語り合え、本心にうれしく思っています。真に語り合

うとは、口数の多さ、知識の多さを競い合うがごとくに各々が自分の意見を言うのではなく、各々が自分の思いを精一杯ことばに表わし、そのことばを自分のことばとして聞き、その話をしている友の心をつかむことができるのではないかと感じました。今後とも、毎日の生活の中で、人々と真に語り合い、心を動かし動かされ生きてゆきたいと思っています。

合宿終へ我らははなれ生くとも今ははなれじ心の友よ

日本についていろいろな角度から調べたい

(徳山大学 経済 四年 谷本光生)

この「合宿教室」に参加できて大変よかったと思っています。自分は、今まで天皇とか宗教とか戦争など、そのようなことに対してここまで考えたことがなく、またあまり考えないようにはしていましたが、それが誤まりであることに気付きました。各先生方、講師の話しを聞かせていただいたり、友と討論している内に、いろいろな角度からの話しが出たり、意見が出たりして戸惑っている自分が、はずかしくもあり、なさげなくもありました。これを経験として、日本というものについていろいろな角度から調べてみたいと思います。

合宿が今日で終わってさみしさが胸にたちこめ目もあつくなる

戦争について考える

(拓殖大学 外国語 三年 須藤 淳)

今、我々をとりまわっている状況では、いつどこで戦争が起

カメラ・レポート 29



第4日目の午後、「天皇の御歌と日本の国がら」と題して、福岡県立修猷館 高校教諭・小柳陽太郎先生が御講義された。「天皇について考へる場合、自分の目と心を用ひ直かに天皇様の御歌を読み味はってゆくことから始めなければならない」と御指摘された。

こつても不思議ではない。この平和な国、日本にもいつ戦火がふりそそいでくるか全くわからないのである。別に日本に限らなくてもよいのだが、その国に戦争をしかける国があったとする。平和を愛し、祖国を愛する彼等。彼等もまた戦うだろう。自分の愛する人達を守るために、愛する祖国を守るために。誰だって戦争などしたくはない。でもやむを得ない場合だつてあるだろう。しかし戦争はきれいな事では出来なはずだ。多くの人が死に、国は荒れる。もう二度と戦争などしたくはない。

人間は、この戦争という「業」を永遠に背負っていかなければならないのだろうか。

わが想ひたとひ間違ひであらうとも言ひおほせたるいまぞうれしき

第二十三班 男子学生

より美しく雄々しいものに向かふ喜び

(熊本大学 法 三年 緒方則嘉)

所感で、小田村先生は、「一人では出来ない何かしかの力、不可思議を感じたのなら、それを大切にしておきたい。」と述べられた。この合宿で営まれるすべての言葉に接する時、自らの態度を省みてみれば、相手の真の苦勞と相手を真の同じ仲間である、といふか暖かい目で見える努力が足りなかつたと思う。他と共なる生——聖徳太子の言はれる「ともにこ

れ凡夫のみ」との御言葉は、太子の深い愛情と哀しいまでの御決意を自ら偲ぶ中からしか感じとることはできないと思う。特に心に残りし歌は、次の小柳陽太郎先生のおつくりになられた歌である。

かくばかりかなしきものか遠き日の日の本をみな生きこし道は(連作五首中の一首)

自分が最も心ゆずらるるのは、このような哀しみのうたである。肉親にはあらずとも肉親以上の心魂の通ひ合ふ尊き御姿を偲びつつ、先生方、またその先生のもとに慕ひ集ひし学生の方々の意気に触れることが出来ました。

これからの自分に一体何が出来るのか、それはわかりませんが、先生方の御跡を仰ぎつつ、より美しきもの、より雄々しいものに向かふことに喜びを感じます。ともに四泊五日を過ごせし友だちともこれからまた新しいつき合ひが出来るのだと信じてをります。

鹿兒島空港のうへにたなびく白雲を見つめし事を我は忘れし

自分の今までの姿勢を正される思いがした

(東海大学 文 三年 杉本 浩)

今回初めて参加させていただき、強く感じたものは、まず第一点として、自分自身を知ることの大切さと、そしてまた自分自身が誰かの言葉でしか自らを表現し得ないのではないかという焦りにも似た感情でした。それは知らず知らずの内に自分自身の心の働きを規定しているようにも思え、もっと

素直にならなければと感じています。

小林秀雄先生の「みな持ってゐる感受性を学問で隠してはいけない。生意気な心で、傲慢な心で隠してはいけない」という言葉に自分自身の今までの姿勢を正される思いがして、大変勉強になりました。

人を生かし、自分を生かす豊かな言葉が吐ける、その時まで、心の修練を積みたいと思います。またそうすることが日本の心を回復し、日本を本来の日本たらしめる重大な鍵の一つであるように感じました。

豊かな霧島の峰にこだまする歌声吾は永久に忘れじ

心にしみ入ってきた御言葉

(九州大学 法 四年 榎本伊市)

御講義の中で、とりわけ心に残ったのは加納祐五先生の御話でした。壇上に先生が立たれた時から、先生もおっしゃって居られた様に、なつかしい心持がして居りました。走り書きの感想文で言葉を尽せませんが、御話される先生の御言葉一言一言が実にしみじみと心にしみ入って参りました。「よきひとのおほせをかうぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」といふ「歎異抄」の言葉を御紹介下さいましたが、御話を御聞きしながら、まことの言葉だとしみじみ感じられました。

合宿に参加の当日発病入院した友を思ひて

壇上ゆ友のみ病ひ語る言葉を聞けば涙こみあぐ



第4日目の夕食前、「地区別懇談会」がもたれた。自己紹介をする福岡地区の諸君。

やうやくに願ひかなひて今年にも参加しますに病みませるとは
壇上に思ひかみしめ立つ友を見ては御病とく癒えませと思ふ

友情のつながりをもつことができた

(亜細亜大学 法 一年 鈴木誠司)

諸先生方の講義は、今まで自分では考えていなかったようなこと、知らなかったことなどがたくさんできてきて大変むずかしいものでしたが、同時に自分からどうという勉強をして行き、どういう本を読めば良いのかを教えられ、お話を聞けただけでも、自分のためになったと思えました。班内では、自分の意見でも真剣になって、先輩の皆様が聞いて下さり、意見や忠告をして下さって、大きな友情のつながりをもつたことは大変うれしく思っています。また生まれて初めて短歌を作れたことは、大きな経験となりました。自分の気持ちに素直になり感じるままに作る短歌。短歌にこんなすばらしいものがあつたことは、初めて知らされました。

過ぎ去れば初日の不安消え去りてしるけく残る友の言葉は

「国を守る」と言ふ言葉が素直に胸に入ってきた

(早稲田大学 法 二年 八木秀次)

短歌全体批評の中で長内先生が言はれたことを思い出して
ります。「自分のまわりの人達、まわりの自然に思ひを寄せ
ること、それが国を守ると言ふことなのだよ」

国を守る—何か抽象的で、自分とは疎遠なことだと思つて

をりました。先生のお話を聞いて「国を守る」と言ふことが、身近な言葉として自分の胸に素直に入つて来る思いがしました。美しい国土に、自然を神として奉り、自然と一体化する。同じ言葉を話す同じ日本人としてお互ひに思ひを寄せ
る。むづかしいことは要らない。このことこそ「国を守る」
ことではないか、そんな思ひがしてをります。

浴場にて

嫌な顔一つ見せずに洗ひるる友のその顔すがすがしきかな

日本人として生きることを覚つた

(独協大学 経済 一年 町山直人)

この合宿を終え、私はこれから自分が生きるべき人生像の
ようなものを覚りました。それは、「日本人」として生きる
こと、ただ日本で生活するのではなく「日本人」になること
です。生活していく上であらゆることに感謝し、となりの人
間の気持ちを思う心を持ち続け、日本語を大切にすること。
これからもっともつとたくさんの本を読んで、多くの人と接
し、よい和歌を詠めるように努力したいと思ひます。

合宿中に覚りし思ひ忘れじと手に持つ筆はやすみを知らず

静かに心の底が満たされるような感動

(防衛大学 人文社会 三年 石崎吉和)

私は、昨年の阿蘇での合宿に続いて二度目の合宿参加でし
た。昨年はいろいろな先生方の御講義や合宿で出会つた友達

の話や態度にとても心打たれ、そして強固な決意を持って帰ったのですが、日々のたつうちにその時の新鮮な気持ちは薄らいでしまいました。そして一年たち今年の夏がやってきました。始めは参加を迷っていましたが、何故かもう一度行ってみたい気持ちになり今回もやってきました。

ところで今回、聖徳太子の本の輪読導入講義中、先生が黒板に「信」と書かれ、その御話をなさっている時、ふと、私の兄の名「信宏」が浮かびました。と同時に私の名前には、「和」という文字があるのに初めて意識的に気づいたので、講義をなさっていた先生には大変申しわけありませんでしたが、この時このショックでしばらく先生のお話が聞こえなくなっていました。この気持ちがどういものか言葉ではうまく言い表わせません。

霧島の山を降りなむ熱くして静かなる決意胸にいだきて

心の中に芯がでぎ始めた

(西南学院大学 法 二年 松元法彦)

期待もありましたが、ほとんど不安な気持ちでこの合宿教室にやってきました。祖国、天皇、君が代等々の言葉は決して耳新しいものではありませんでした。しかし、いざ正面きって論議すると、それらは僕にとまどいを与え、時には苦痛さえも与えたのでした。

僕がこの合宿で何を学んだのかは、僕自身はっきりとはわかりません。でも、「勉強しよう。もっと心を素直にし、開

カメラ・レポート 11



「和歌全体批評」をされる長内俊平先生（開発電子技術株・取締役）。作った人の思ひを偲べながら一首一首心を込めて添削された。

いていこう」、言葉にできない、心に強く感じた諸々の事を大切に前に進んでいこう、と思っっています。また初めて短歌を詠みました。本当に人の心が映るものです。これからも詠んで行くつもりです。

まとまりのない文章となっていましたでしたが、それとは反対に僕の心には一本の芯になりかかっているものであります。合宿教室に来て本当に良かったと思っっています。

合宿最終日

時刻表をめくる友見て我が胸に寂しき思ひあふれ来にけり

第二十四班—男子学生—

先生方の御心に応えていきたい

(熊本商科大学 経 二年 西本信二)

この合宿で最も感じました事は、先生方の美しき日本を思われる御心です。忙しいさなか、私達のためにわざわざ来て下さり語って下さった先生方の一言一言が胸に響いてきました。そしてその中で日本の歴史・伝統を受け継いでいくという事は、先生方の御心を偲び、その御心に応えていく事であると実感させられました。

班員に良き思ひ出を持たせんと今日もやさしく君は語りき

国をまもるといふこと

(長崎県立国際経済大学 経 四年 皆山武夫)

黛敏郎先生の御講義の中で、「自然の美しさというものは国の美しさに通じる」と言われたことが心に深くのこっている。自分の国をまもるといふことがおぼろげながらわかってきたような気がします。もしもの時に自分が戦って国をまもるといふことは、自分の住んでいる国の中にある愛すべき美しい自然と、自分と同じ国に住んでいる愛すべき家族と、最も愛すべき人のため自分が戦ってゆくことではないかと思う。この気持をもっと深めてゆきたいと思う。

霧島の山に集ひし友どち西へ東へ今日別れゆく

日本人としての正しい生き方を知った

(防衛大学 理工 二年 安楽広樹)

これまで国家を思う心とか天皇に対する考え方といったことについて真剣に考えたことはなく、また、マスコミが伝えてくれる事柄もほとんどそのまま事実としてうけとってきていました。それが、今回の合宿に参加し、著名な先生方の口先だけではない心から語られた御講話を拝聴することによって、今まで知らなかったこと、あるいはゆがんだ考え方が物を素直にとらえることを邪魔していたことなどがわかり、何が日本人として正しい生き方なのかということを知ることができたと思います。最近の教科書検定問題に対する世間の接

し方を見てわかるように現代の日本人は日本人としての心を見失ってきているように思われます。このことは大変残念なことですが、私たちが自分のかたく信ずるところのものをしっかりと持ち、行動していくことで、同じ日本人にいつか通じるところとなると思います。

雨あがり霞晴れたる高原でセミの声のみひびきわたりぬ

言葉の深さの足りなさを感じた

(高千穂商科大学 商 四年 福井信次)

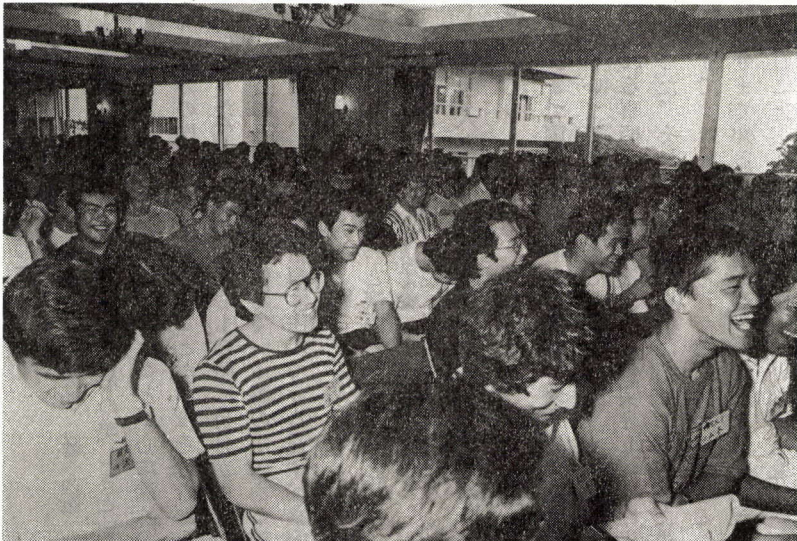
私は、班の友だちに対して自分から心を開いて当たらうと努力したのだが、まだまだ努力が足りなかった様に思う。全体感想発表のうちに、女子学生の方が言葉の深さの足りなさを述べておられたが、正に自分もそのことを強く感じた。人に自分の話をわかってもらうためには表面的な知識のうけ取りだけではいけないと思った。また、自分の知識自体が不正確であることも反省させられる。

ころざしそしきゆゑに友とち己が思ひを伝へ難しも

充実した日々

(亜細亜大学 経 三年 野田佳宏)

四泊五日の日々をふりかえってみますと、まことに充実した日々であったと思います。友の意見を聞き、先生方の講義を一つ一つ聴いたのをふりかえって、それぞれがまことに真剣なものであったと思います。高千穂登山の際、私は緊張と



長内先生の率直な御指摘は、敷しい中にもユーモアに溢れ、講義室は度々爆笑に湧いた。

疲れからバスに酔ってしまったのですが、班長さんを始め班の友だちは本当に心配してくださいました。

この五日間をすごしてみても、本当に自分ばかりないところが沢山ある、もっとももっと勉強して本当の日本の心をもった日本人になりたいと思うのです。今までの大学での私の生活を一気に大きく変えてしまったようにも思います。

霧島ですこし日々をかみしめてわれ行かんとう希望をもちて

齋藤先生の御言葉に教へていただいた

(甲南大学 理 一年 二神俊二)

齋藤忠先生が「私の悩みを聞いてください」といって国家の話を読んだのは、本当に驚き、これが本当の日本人なんだと嬉しく思いました。「国の悩みをわが悩みとする」のが日本人の自他一体感であるといふことを、先生は後姿で教へてくださったやうに思ひます。

今回の合宿で得たものは多くありますが、中でも素直に感じる心、美しいものに魅かれる心を自分の中にとりもどすことを教へられました。また和歌を作るとは自分の心を知るといふことも教へていただきました。これからの日常生活の中で実践してゆくべきものだと思います。

合宿を省りみるたびわがころまだ軽薄なるを恥かしと思ふ

“自分”との出会い

(九州大学 理 二年 稲員邦久)

自分の心の底に昔からあったものに、再び、しかも自信を持って会えるということは、嬉しいものだ。前は、国文研の合宿に行くことは人につとめて隠していたのだが今はちがう。堂々と、いや誇らかに言うことができる。

歌を作るといふものも楽しいものだ。そして更に楽しいのは、それを皆と検討することだ。唯、如何せん、散策の時間が少きに過ぎた。

雨の後の明らむ空の下なればすがしき気持ちでこの地を離る

第三十一班—女子学生—

素直に国のことを思える自分になりたい

(鹿児島大学 教 一年 窪田実代子)

合宿の御講義には感動したのですけれど、感動しているだけではだめで行動に移して実際に日本のすばらしさを他人に語ってゆかないと日本は変えられないのじゃないかという考えで頭が一杯になっておりました。けれど小田村先生のお話を聞いて自分はただあせていただけだと気づかされました。実際に活動することも大切だけれども、その前に本当に日本のことを心で感じなければだめなのだと思います。もっと厳しく自分をみがいてゆくことをしないと人に日本のことを話してもそれは口先だけになってしまふ。もう少しで私は自分を見失い、傲慢になるところでした。もっと深く勉強

し感動し、昔の日本人のように素直にお国のことを思える自分になりたいと思います。

神国に伝はりてこし真心を我的心とちてゆきたし

本当に来て良かった

(拓殖大学 外国語 三年 東 晃子)

合宿がおわると思ったとき思わず顔がほころびました。でもそれは「やった！おわりだ。」という気持ちからきたものではありませんでした。「ああ、本当に来てよかった」といううれしさからなのです。私にとって御講義の内容はとてむずかしいものでした。しかし、先生のお話をお聞きする度に何かしら熱いものがこみあげてまいりました。それは言葉にしてしまったら何だか安っぽいものになってしまいそうでこわいのですが、新鮮なよろこびともいえるものでした。今のこの気持ちを大切にしたいと思います。

うちとけし班の友らと別れゆく時のせまりてただにさみしき

今日から心の勉強をしよう

(中村学園大学 家政 一年 小林美貴)

合宿最後の全体感想発表を聞いているうちにとても自分がここにることが恥かしくいたたまれなくなり、始終うつむいておりました。全然感動していない自分がいやになりました。しかし、小田村先生が「戦い戦い進むべし」と言われたとき、自分のきたない面と戦っていけば少しは本当の日本人



合宿教室も最後の夜をむかへ、これまでの緊張もほぐれ楽しい夜の集ひとなった。女子班全員による奄美大島の子守唄のコーラスが明るく会場に響いた。

になれるんだと思えました。今日から本当の心の勉強をしていこうと念じております。

全体感想自由発表を聞きて
友どちの感想聞きて気づきたり我偽りの心なりしと

御製に魂が揺さぶられた

(佐賀女子短期大学 児童教育 二年 山田みゆき)
初日に明治天皇御製の「心」

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむを拝読した時、私の魂が揺さぶられた様でした。かたくなになりがちな私の心を、陛下の御製はまるで母の様に優しく包んで下さったのです。この貴き陛下のおられます美しき日本を永遠に守り続ける責務が、日本国民一人一人にあると思われてなりません。

かたくな心開かれ大御歌に真綿のごとくつつまれにけり

黒上先生の母上様の御手紙に心打たれた

(西南学院大学 文 四年 一宮浩子)

黒上先生の母上様の御手紙は一人の女性としての生き方を私に示してくださいったと思います。御誠意の偲ばれる美しい御言葉遣いは、大学という最高学府におります私など到底およびない教養の高さを思わせられます。真の教養とはこういうものなんだと思うと同時に日本の女性の美しさに心打たれました。それは野に咲く名も無き花の美しさに魅入られるよ

うな思いでした。私の知らない美しい日本の伝統というものがまだまだあるんだと痛感させられ、また少しでもその伝統を受け継ぎ身につけていきたいと思えます。

敷島の和の国のうるわしさこれからさらに知りてゆきたし

陛下の御製に学んでいきたい

(関西外国語短期大学 二年 大城啓子)

私はもっともっと相手の心情を思いやりをもって憶念しなければいけないと思います。国を守るということは大きなことではなく、こうした日常の営みの中にあるのだとわかって頂きました。頭では様々なことを理解していても心で本当に感じてはいなかった自分が情けない思いです。私は構えることなく自然に物を考えたり、言ったりできるように、やはり天皇陛下の御製に学んでいきたいと思えます。陛下のように構えもなく、謙虚で私欲のない人間に私もなっていきたいのです。

涙して思ひを述ぶる友を見てわれも励まむと心に誓ふ

真実の平和とは

(佐賀大学 教 二年 中野佳織)

合宿に参加させて戴く前、広島の平和式典をテレビで見ました。原爆で亡くなられた方々の冥福を祈りながら一方で靖国神社にまつられている方々のことを思うと無念でなりません。国のために生命を投げだされた方を裁いてしま



「全体意見発表」。参加者たちは次々と登壇して、こみあげてくる 思ひをうちつけに語った。

ようなそんなことが許されるのかと、画面に流れる平和の叫びが虚しく通りすぎるようでした。小柳先生が陛下の平和を祈られる御姿を語られた時、これが真実の平和であると思われました。戦争で亡くなられた方を「犠牲」というのは現在生をもつて国を思われている方々をも冒瀆していると思えます。齋藤先生が同志とうたわれた御歌は私にはかり難い重みでせまってきましたが、この齋藤先生の御心、生き様をどうして犠牲などと呼べるものでしょうか。一人一人のかけがえないかなしきいのちがこの国を守ってきたのだと思うと先人の方や御講義をされる先生方、合宿に参加された方々の生が貴重に思えてまいりました。

班別討論にて

涙して吾が心をばただし給ふ友どちの姿に心たださる

第三十二班—女子学生—

「なつかしき日本」を蘇らせる努力をしたい

(佐賀大学 教 三年 一ノ瀬千秋)

御講義を拝聴させていただくうちに、戦後の様々な問題点(防衛、教科書、靖国神社)が極東軍事裁判、そして占領を起点としていることに気づかされました。齋藤忠先生が「極東軍事裁判は日本人から愛を奪ったんだ」といわれた時、本当にその通りだと思いました。親子の愛、師弟の愛、この美

しい自然を持ち愛する人達の住む祖国への愛——それらが喪失せしめられていったところに、子供たちの非行や、殺伐とした大学生活、君が代問題等があるんだという事を思いました。先生にとつての戦前の日本は、「なつかしき日本」であり、戦後の日本にはなくなってしまう愛の世界であった。戦後に生まれた私だけれども、山田先生の話された東郷平八郎をはじめとした明治に生きた人々の気持や黛先生の「自然とともに生きた日本人の心」にふれてほのぼのとした感動を覚えたのは自分にも日本民族の血が流れているからなんだろうなあとと思った。これからも、日本の歴史や古典を学ぶ中から、私の心の中に「なつかしき日本」を蘇らせる努力をしていくとともに、人と人とが信じ合い、憶念し合う世界になるよう身近なところから働きかけていきたいと思う。

本当の日本人としてまごころをつくっていきたい

(活水女子短期大学 音楽 三年 小出由美)

「日本を愛する」「国を守るんだ」と今まで幾度となく言葉にして参りましたが、そのことは班の一人一人に心を働かせることであり、愛すべきこの日本を守りつづける為に逝かれた先人の御心を御偲びする時に、初めて自分とつながってくるものだということを実感させていただきました。

全体意見発表で自分の心を素直に発表した方々の勇氣に感動し、まず自分の心を開き、素直に語りさえすれば相手に絶対に通じるということを教えられました。

この合宿を新たな出発点として、本当の日本人としてまごころをつくした生き方をします。

飾らずにまごころもる言の葉を語る友知り心洗はる

日本人であることに誇りを持って生きたい

(熊本音楽短期大学 声楽 一年 澤井美喜子)

参加するまでは資料を見て随分難しい事を考えるのだから、知識の浅い私なんかやって行けるだろうか不安でした。しかし、大学に入って四ヶ月、心のどこかで大学生活に對し異和感を持っていた私は、合宿に行ったら何かをつかめるのではないかと思つて参加しました。

そして日がたつにつれて「心を開く」「思った事を素直に言う」という事が分り始めて、初めは苦痛だった班別討論が楽しくなつて来ました。また明治天皇、大正天皇、今上天皇の歌にふれる事が出来て、今までマスコミの声に踊らされて偏見の目で天皇陛下を見ていたことに気付き恥しく思いました。今からは、日本人であるという事に誇りを持ってこの日本の美しいすぐれた文化を継承して行きたいと思ひます。

素直なる言葉のもてる言霊を登壇されし人より知らざる

国を愛することの大切さを教えてもらった

(拓殖大学 外国語 二年 奥村由美)

私は今まで小学校に入学して以来学んできた学校教育の中で日本の日本史が正しいものと考えていました。日本は悪い事を



「閉会式」。西南学院大学4年の結城誠二君が「合宿教室の体験を生かして、今後も友と力を合はせて学んでゆかう」と力強く訴へた。

してしまつた国なのだと思つていました。しかし、諸先生方のお話を聞いて学校で習つた日本史とは別の眞実を知つてもショックでした。

戦争を頭から反対してきた自分をどうしていいのやらわからない不思議な気持ですが、とにかく、うれしいことは今まで考えてもみなかった自然を愛することか、国を愛することの大切さを教えてもらつたことです。戦後の人々はそういうことを忘れてしまつたために利己的でバラバラになつていくのですね。私の友人に私の教えてもらつたことを伝えていきたいと思つています。

霧島に心ひらきて語りしは我が人生の起点とならむ

現代に生きる私達は怠けていないか

(鹿児島大学 教 一年 敷 万里子)

テキストが送られてきた時にはえらい所に申込みをしたものだと思ひ、合宿初日には早く帰りたいと思つたほど異和感があった。しかし講義をよく聞いていると成程と思うようなところが多々あり、班の友達とも話し合つていくうちに異和感も消え、時間がたつのが早く感じられるようになった。

私はこの合宿で日本を守るためにどれだけ多くの方々が努力なさつてきたか、それにひきかえ現代に生きる私達がいかに怠けているかを知つた。また、班別討論によつて心を開いて語ることがいかに大事であることも知つた。ここで学んだことを大学の友達に話していききたいと思ふ。

ふけてゆく霧島の夜に友とちと心開きて語るは楽しい

「友を思いやる」心を実行していききたい

(熊本大学 文 四年 田平眞実)

「友」という言葉がどんなに重味のある言葉であるかをこの合宿を通じて学ばせていただきました。「友を思いやる」ということは、まず自分が素直な心を持つていなければできないことだと思つています。このことは難しいことですが、決して不可能なことではないと思つています。三井甲之先生の「友よ!と呼べば友は来りぬ」という御言葉が、今、私の心いっぱい響いてくるように感じられます。

生きがひのある生活をとふ御言葉を聞きて心の澄みゆくを覚ゆ

第三十三班 — 女子学生 —

人生の根本的なことを学ばせて頂いた

(佐賀大学 教 四年 中原美佐子)

この合宿教室に参加させて頂く前に、どんなにまわりの情況や人の心が動こうと、歴史を通して流れ続ける、永遠に変わらない日本の心とは何か、又私自身が身をもって体現していく日本の心とはどういうものであるかを考え続けていました。この合宿に参加し、そのヒントが見えてきたように思つます。それは様々の人のことば、人の姿にどれだけ心を近づ

け得るか、憶念できるかが最も問われるということ、先生方のご講話やそのお姿に、又御製を拝誦する中で気づかせて頂きました。

学生時代、三回この合宿に参加させて頂いたおかげで、人生の中で最も根本にし、大切なことを学ばせて頂きました。本当にありがとうございます。

三十とせちかくこの合宿をいとなまる先生のあとにつづきてゆきたし

人の心の真実に感ずる心に気づく

(佐賀女子短期大学 児童教育 二年 斉藤寿和子)

合宿を終えようとする今、自分なりに思うことは、日本人の真^{まこと}の心は、ありのままの心を自分の精一杯の言葉で表現していくこと、それがお互いにありのままの心で生かし合う世界を生み出して行くことになるのではないかと、いう事です。

自分自身、気負うことなく、自分の心をじっと見つめていけば人の心の真実に感ずることのできる清らかな泉があるのだなあということを感じさせて頂きました。

心のまま語ることなき友なれと友の笑顔に心ひかる

言葉の修練の大切さを知る

(活水短期大学 家政 二年 林田尚子)

自分の気持ちを正直に言葉にする作業をさせて頂いた四泊五日間でした。どうも気負ってしまい、よい言葉や大げさな言葉を使ったりして、なんとなく言葉をごまかしていた私でし



別れの握手。はじめて会った友も4泊5日を通じて真の友となった。又来年も会
はう!

たので、本当に言葉を実感しているのだろうかと自問自答の毎日でした。ふだんなにげなく使っていた言葉をどこまで大切に使えるか、いかに自分の気持を的確に言い表すか、そういう修煉というものが今の自分にとって何よりも大切であると思いました。

合宿に集ひてともに学びたる友らの顔を忘れじと思ふ

きついで日課だった

(熊本大学 文 三年 森本貴子)

まず最初に、心こめた御講義を拝聴する機会を得られました。たことを感謝申し上げます。

四泊五日間、心を集中したかなりきつい日課ではございますでしたが、心はれて帰路につけます事をただただうれしく思う一念でございます。

小柳陽太郎先生の御講義をお聞きして
いにしへの人のこころのしのばるるかの思ひこめたる御歌を読めば

適確な言葉の表現の大切さを知る

(佐賀大学 教 一年 津田 路)

「思想の深さは言葉の深さである」ということを気付かせていただいた合宿でした。

私は今まで、自分が話す言葉に心を配ってなかったと思います。ただ感情のままにしゃべっていました。日常の会話の中で、言葉を選んで適確な美しい日本語を話す訓練をしなけ

ればいけないと思いました。そうした積み重ねの中で、一つのことからを広く深く考えてゆくことができるし、自分の心を素直に表現できる喜びも感じることができるようですね。

一つの和歌を作る時、自分の思いにピッタリくる言葉を探し求めてゆく、そんな姿勢を常に持ちつづけてゆきたいと思えます。そして、それが私にとって、私の中の日本を大切に

してゆくことなんだと思います。
霧島の美しき緑にかこまれて日の本のこと学ぶよろこび

みんなに溶け込めうれしかった

(拓殖大学 外国語 三年 池田由紀子)

不安を抱いて遠路はるばる東京から来たのですが、案ずるよりも産むが易しの言葉ではありませんが、時間を過ごすことにみんなに溶け込んでいかれるのが大変うれしく感じられました。

班別討論では、勝手も分ならず、自分の気持をうまく表現できず、とまどいながら話す私の言葉にみんなが耳を傾けてくれ、私の言わんとするところをつかもうとして下さっているのが伝わってきて本当にうれしかった。

今まで自分のことなど他人にわかるう管がないと勝手に決めつけて語ろうとしなかった自分を恥しく思うと同時に、熱意をもって語れば、多く語らずとも、相手に伝わるといことがわかった事が、私の大きな収穫であったと思います。

五日まへ不安な心いだきつつ合宿に来しが今はなつかし

合宿は私にとって貴重な「出会い」となった

(熊本大学 文 四年 山口菜穂子)

私は今年で二度目の参加になります。今回は講義の内容についてびっくりしてしまい、とまどっていたような気がしません。そして今回も、私にとって御講義はとも難かしかったのですが、班員の方々や先生方の心のあたたかさを感じるものが出来たのはなにより嬉しいことでした。

また、加納先生の御講義の中にありました「曠劫多生のあひだにも出離の強縁しらざりき 本師源空いまさずばこのたびむなしくすぎなまし」という言葉に深く感動しました。この言葉程の強烈な出会いの印象ではありませんが、この合宿で私は「出会い」と暖かな人とのつながりを感じました。合宿にて出会ひし友らふしぎにも旧き友のご思はるるかな

まわりに流されない『自分』を形成したい

(九州女子短期大学 英文 一年 白土美保)

この合宿生活を通して、何よりも私の心の支えとなったことは班別討論などで、私がどんなに無教養でつまらない言葉で感想を述べても、班長や班員の皆さんが熱心に聞いて下さって、私の思っている気持を一生懸命理解しようとして下さったことです。また、大学生活において「自分は今のままでよいのだろうか」という疑問を解くカギを得られたような気がしております。大学生活に戻っても、これからは、決して

カメラ・レポート 37



臨時便のバスで山を降りる友を見送る先輩、友人たち。

まわりに流されないようにしっかりと『自分』というものを形成していきたいと思います。それから、先生方や班の皆さんの暖かい心づかいを感じるなかで、一番大切なことは『人間の心』なんだということを思いました。

御講義に語られしこと胸にとどめ郷里の友らに語りてゆきたし

第三十四班—女子学生—

自分の中にも生命のきらめきがあった

(熊本女子大学 生活科学 三年 岡下富美子)

参加して良かったと本当に思います。一番強く感じたことは人を信じることの大切さです。穏やかな日常の中で、自分の魂の定まるところがないように苦しんでいました。言葉が発すれども、そこに心も生命力もないかのようにでした。しかしこの合宿の中に身をおいて、自分の中にも日本人の培ってきた生命のきらめきがあったのだと気づかされました。先生方の御講義、班別での討論を通して、私にも自分のことばで話すことができるのだという喜びで一杯です。祖先が護り育ててきたこの日本の国の中で、私をとりまく全ての人達にとって人としての自分があることをうれしく思います。

ありがとうございましたと言ひてのちことばつまりたる友のいとほし

身近なところにもまごころがあった

(活水女子短期大学 音楽 三年 北林佐恵美)

自己愛を捨てて死ぬほどの至誠を尽した人に心打つものを感じつつも、至誠を尽すということを形式的に考えていたようです。幡掛先生の「ににぎのみことは神の命によって稲を植えるために天降りされた」という御話の真の意味がつかみきれずにいたところ、班員や班の先生が一所懸命に「稲を植える」ことの奥深い意味を語ってくれました。先人の想いにもまごころを尽そうなど頭の中で考えていたのですが、懸命に語りかける友の姿に暖かなまごころを感じました。身近なところに日本人の精神があったことに気づかされ嬉しくなりました。「隣にいる人との心の通じあい」に日本人の心がある」と小田村先生はのべられました。更に勉強して「先人との心の通いあい」という縦のつながりにまで広げたいと思います。

言の葉を交はしあひたる友達といつまでもなほ共に居りたし
こまやかな心づかひにあらはるる友の想ひのありがたきかな

これまでになかった世界

(高千穂商科大学 商 一年 岡野谷美紀)

入学以来、なかなか心を開いて友と語ることができずに、孤独な毎日を過ごしていました。毎日が辛くて学校へ行くのも嫌になるほどでした。不安な気持ちで参加しましたが、友と

心と心とが通い合う瞬間というものを体験して、いつか不安は消えていました。これまでの生活になかった世界に、いつしか自分が参加しているのに気がついてとでもうれしくなりました。温かな心づかいと素直な心に触れた時、ジーンと胸が一杯になりました。これからは多くの人達に心を開いて語りかけるようにしたいと思います。

「早かったね」と語る友達と歌ひかはし夜はしんしんとふけてゆきたり
「最後ね」と夜の集ひを楽しげにみんで歌ふは螢の光

ただただ圧倒された

(筑紫女学園短期大学 家政 一年 森 貴代美)

ただただ圧倒され、驚くばかりでした。それは理解できないできないという頭で考えることではなく、一体、何を伝えんとしているのか、心の発言というものが感じられませんでした。ただ一番最後の小柳先生の御講義には感ずるものがありました。何がわかったのかと聞かれると困るのですが、日本の心を使うことと、軍国主義は全く異なるものだという事をおっしゃりたかったのではないのでしょうか。一生が学問であると言われますが、五日間を通して、学問とはこのようにして行くことだということがわかったような気がします。

わかれゆく友らのすそを祈りつつ皆共に行かむ我が進む道を

多くのことを学んだ

(福岡教育大学 教 二年 手嶋貴子)

今までの私には「心」というものがなかったように思いますが。天皇制にしても、古くから続いているんだから、ここで断つのはもったいないと考え、憲法改正については民主主義をうたっているし、自分の身に支障がないから何も問題にしないでいいではないかと思っていました。しかし黛先生が「憲法問題は政治の問題ではなく文化の問題だ」と話されたのを聞いて、ハッとしました。とにかく、この合宿に参加して初めて天皇の御心に接し、自分の国である日本について真剣に考えるようになりました。考えなければならぬと思うようになりました。それも班付の松浦先生の心温かな御指導や職員のお蔭であると心底思っています。私は友のひとりから多くのことを学びました。例えば、この国を担って行くことに対する情熱の深さ。和歌を愛する心。小さなことにも心を動かす純真さ。いろいろなことの真実に迫って自分の頭で思いをめぐらし自分の考えにしていくなかに、野に咲く花を見た際に「花びらは何枚か」という目でしか見ていなかった自分に気がつきました。

悲しがる別れをまへに思はるは尊き友とまた会ひたしと

一番大切なものを教えられた

(佐賀大学 教 四年 前田かおる)

心をはたらかせて相手の思いを理解しようとすることの難しさを感じました。「今、隣にいる人のことを本当に思うことが、国を思うことなのだ」という言葉に、日本人として生

きてゆこうとする時の一番大切なものを教えられた気がします。先人がずうっと持ち続けてこられた、こまやかな心を自分の中に取戻してゆくことが、本当の日本の姿を表わし出すことにつながるのだと思います。「本師源空いまさずばこのたび空しすぎなまし」という親鸞の言葉がありました。が、本当の日本の姿や素晴らしい先人の生き方に出会うことができませんでした。それに応えられるよう努力していきたいと思います。

班の中で心かよはせ語りしごとと大学の友に語りゆきたし

しきしまの道をしっかりと歩みたい

(鹿児島大学 水産 二年 鈴木麻理)

大学に入って、和歌を詠むこと、御製を拝誦すること、そして天皇陛下の御心を偲ぶことを知りました。二年になってから、和歌についてなかなか語ることでなくなっている自分に気づきました。夏休みに入っても、そんな状態が続いていたのですが、この合宿に参加して、友との語りの中から、御製に触れたことから、また和歌創作の導入講義をお聞きしたことから、何かしら自分の胸の中にある「しきしまの道」を素直な思いで見つめられるようになりました。これからは天皇陛下の御心に学ばせていただくなかで、しきしまの道をしっかりと歩んで行きたいと思います。

和歌相互批評の折に

御友らの吾が心をくみ給ふやさしき思ひのただにうれしき

しきしまの道を求めむひたすらに素直なるままの心にそひて

第三十五班—女子学生—

手を合わせ心を結びて

(京都女子大学 文 三年 矢山和恵)

班の友が今までのことを話してくれ、より積極的に生きようとする姿に、天皇陛下の美しい御心や友のまごころに触れることが、どれほど人の心を変えるのか、目のあたりにしたような気がする。また、この合宿で齋藤忠先生をはじめ多くの戦前戦中戦後を生きてこられた先生方の私達になげかけられるお言葉に胸がつまる思いが何度かあった。とりわけ齋藤先生の手を合わせ心を結びて日本を回復させねばならないとお言葉は、私自身に投げかけられたお言葉として何とか少しでもお応えできるよう努力していきたく願わずにはいられない。本当にいろいろなことを考えさせられた合宿だったが、末次先生がおっしゃった「この合宿で学んだことを伝えていき、回復していくには、戦中の方が苦しんだ以上の覚悟がある」との御言葉と、

もろともにたすけかはしてむつび合ふ友ぞ世に立つ力なるべき

を胸に霧島の地を離れたい。

末次先生に大東亜戦争のことをお聞きして

戦中のこと話さるる師の君の御言葉に知らず心正さる

新しき友と出会いしよろこびを後々までもつなぎとめためし

心の狭さが恥かしくなった

(広島女学院大学 文 三年 小山西京子)

各々境遇も生き方も思想も違ふ友達が集まって心を開いて話し合ふ精神の凝縮した時間の中に日本人としての共通な思ひが感じられる。年齢や学歴といふ外的条件を越えて語り合ふうちに、今まで既成概念に捉はれて物を見ていた自分の心の狭さが恥かしくなってきた。相手の心を汲みとめることは難しいけれど友の内に宿る素直な心にもはっとさせられた。御講義や御製を通じて天皇陛下様の民を思ひ国を思ふ御心の深さを感じると、一人でも多くの方に知って頂きたいと思ふ。敗戦によってくらまされた日本の心を取り戻すためにも、敗戦の実状を自分たちの目で見えていくことの大切さを考へさせられる。

切々と語りし友の言の葉にやさしき心感じらるるかな

友との語りひに多くのことを学んだ

(国学院大学 文学研究科 一年 岩本登美子)

私共にとって、この合宿は正直を言って、何故あたり前のことをこらも主張するのかと、やや物足りない気がしていました。しかし、友との交わりが深くなるにつれ、お互いに心の中に秘めていたものを話し出すようになりました。神道をなまじっか知っているために講義内容に、それほどの感動は

覚えませんでした。班別討論や夜、机を並べて人生を話し合うわずかな時間に、いかに学ぶべきことが多かったか。宗教を専門としない人が、宗教の根本ともなるべきものをつかんでいるということをもまざまざと感じさせられました。

ひたすらに我らを思ひて語りたまふ末次先生のありがたきかな

心を聞く努力をしていこう

(共立女子短期大学 文 二年 本間千江美)

陛下の数多くの御製に触れ、また日々の生活というものを知り、そのお人柄には、私日本人として本当に嬉しく思われなくなりませんでした。しかし、一般には天皇制というものについての誤まった批判や先入観の方が大きく、これから私達はどうすべきかという不安な気持ちにかられました。私達は素直に心を聞くことによって陛下の素晴らしさを受けとめたのですが、常日頃、素直な気持ちでばかりいるわけではなく、たまたま、心を聞く機会が持てただけだと思っております。これから自分の大学や環境に戻った時に接する人だっって心を開きさえすれば真実が見えてくるのではないかと思う。心を開くこと自体むずかしいことだとは思いますが、私の方から常に心を開く努力をしていこうと思います。ゲーテの「心を開いている時だけこの世は美しい」という言葉の意味が、今回の合宿体験を通して解ってきたように思います。

大いなる霧島の地はわれたちを心一つにまとめたりしをののが心開きて語るほど尊きものはなかりしものを

本当の日本人になりたい

(中村学園短期大学 家政 一年 赤星美紀)

初めてこの合宿に参加させていただいて同年代の人々がこれほど真剣に祖国日本のことを考えていらっしやることを知り感動し、同時に自分が恥かしく思われました。これからは日本のことを真剣に考え、分らないことは、班の方々に相談したりして、勉強をして、本当の日本を知り、一生かかってもなれないかもしれませんが、本当の意味での日本人になりたいです。

霧島で友と語りし若き日を一生の間我れは忘れし

真剣に考える機会を持てた

(拓殖大学 外国語 三年 生馬優美)

私はこの合宿に参加することができて非常に良かったと思っています。というのも、今まで真剣に考えた事もなかった事を考えるという機会を持って、自分の意見を他の人達に考えてもらえ意見のやりとりができたからです。もう一つ今まで知らなかった世界の事も一部分ではありますが、分ったような気がするし、また、事実というものを知らないくせに、先入観で物を判断していた所が多分であり、そういう自分をひどく恥かしく思いました。これらの思いを忘れず、素直に大學生を送りたい。

霧島で留ひしことを胸におき我は生きたし素直な心で

何とも言へない喜びに満たされた

(佐賀大学 教育 二年 植松彰子)

合宿で日本の心といふものを推し測って考へた時に、何とも言へない喜びに満たされました。尺八は風の音をあらはすのだといふやうな他愛もないことが、とても嬉しく思へました。こまやかな日本人の心が、日頃は気にとめないことにも自分自身、この合宿では心を働かせていったからでせうか、心に沁みてきました。また、最後の全体感想自由発表の時、壇上の班の友の顔がとてもいい顔で、そのいい顔をひき出したのは、この合宿を運営された皆さんの思ひであるし、精一杯合宿を受けた皆んなだといふことをしみじみ感じ、有難く嬉しく思いました。有難うございました。

降りられし御霊のもとに立ちまして我が身正さむことを誓へり

第三十六班—女子学生—

祖国を愛することを喚起された

(福岡教育大学 教 四年 金重聡美)

合宿に参加して最初のうちはわからないことだらけで、とてもとまどいました。今まで私が受けてきた教育や私に与えられていたマスコミからの情報などが全て信じられなくなり、真実が私たちに知らされていないという事に恐ろしい

思いがしました。私は、その点に拘わり、何度も班長の古賀さんや班員の方々に質問しました。その時、皆さんは、とても真剣に答えて下さり、目の前が広がっていく思いがしました。また、班員の方が祖国を愛し先人の心にふれる努力をなさっている姿が深く心に焼きついています。そして、私がいなかったことをたくさん教えて下さった加藤先生の、あのひたむきな眼差しも忘れることができません。この合宿で、今まで忘れていた祖国を愛すること、歴史を守ることが心の底から喚起された気がします。

高千穂にて

高千穂の峰に友らと登りてすがしき思ひ胸にあふるる

そばにいる友の思いを偲ぶ

(同志社大学 文 三年 鳥越宏子)

国を思う気持ちは何気ないすぐそばにいる友への思いからはじまることを気づかせていただきました。ともすると、なおざりにしがちになる友への配慮。そんな自分が本当に国を愛することなどできようはずがないと今までの姿勢を深く反省させられたように思います。「そばにいる人に心をこめてその思ひを深くしのぶこと、そこに日本があるのです」このような言葉を最後に小田村先生は私達にかけて下さいました。とても難しいことだと思えます。けれど常にそのような自分でありたい。自分の中に暖かい日本を感じつつ生きてゆきたいと思えます。

思ふこと素直に語る友どちのいとしき姿今もうかびく

魂がゆさぶられた

(共立女子短期大学 文 二年 布瀬千代子)

真の生甲斐、歴史を学ぶ姿勢、言葉の大切さ、本当の学問そして今上天皇の子を思はれるやうに国民の平和を願はれる御心を教はり魂をゆさぶられるやうな気持ちがありました。今上天皇の御心を思へば、君が代を歌ふことも、祖国を守らうとして戦ひ亡くなつてゆかれた方々の御霊をまつることも自然な本當にごく自然な感情でありませう。また、小田村先生や、その他の先生方が国を思ひ、守らうとして戦前より、私たちが想像もつかぬやうな御苦勞、御努力をされてこられたと思ふと、先生方の御考へを後の人々にも伝へてゆく努力をしなくてはならないと思ひました。

友どちの祖国を思ふ言の葉は我が胸を打ちせまりくるなり

人生は信ずることしかない

(佐賀大学 教育 三年 古賀紀子)

長内先生が、和歌相互批評の折に「人生は信ずることしかないんです」とおっしゃられた言葉が今なお心に響いています。天皇をいたたくすばらしい日本に生まれたことに感動したら、その美しい日本の本當の姿を信じ、祖国に殉じていかれた先人の方々を信じ、天皇陛下の「国安かれ民安かれ」との大御心を信じて生きていくところにしか真の人生はあり得

ないのでないかと思いました。小柳先生のご講義のなかに「人をおとしめたり疑ったりするのは努力しなくても勝手に出来るが、人を信じて敬ふのは努力しなくてはできないことだ」という夜久先生のお言葉がありました。私たちの日々は、弱くなっていく自分の日本への信を、陛下の御製を拝誦し、先人の方々の言葉を拜し、同志と語ってゆくなかで強くしていくものではないかと思いました。黛敏郎先生が日本の美しさを語られる中で桜の花の散る前の美しさ気高さを最高度にめどるのが日本精神だと語られた時、私の中にあざやかに英霊の方々が浮かびました。悲しいのだけれども、美しい日本のために雄々しく気高く散華せられた英霊の方々を今の世において絶対に犬死にすることはならない。この思いをますます強くさせていただきました。大学に帰って、今、厳しい情況ではあるが、美しいものを浮かびあがらせるたたかいをしたいと思えます。

班の友を思ひて

たあいなき語りのなかにも真剣に語る友らの尊かりけり
いつまでも別れがたきは夜をふかし心くだきて語りこし友ら

感動するものが本当の物

(活水女子短期大学 音楽 三年 河野 泉)

毎日、講義と班別討論及び輪読の明け暮れ、ピリピリとした緊張感の中にさらされ、基盤のない私には、見る物聞く物全てが頭の中にただ吸収されるだけで、一時は何もかもがわ

からなくなりました。そういう時、班長の古賀さんが「自分の心に感動するものが本当の物なんだ」と言われ、頭の中の霧が晴れたようでした。私は専攻が音楽なので黛先生のおっしゃられた事は人一倍心に響きました。作曲家でありながら、あれだけ真剣に日本の先人の心を考えられている御姿は素晴らしいと思えます。

壇上で声ふるわせる友を見て我眼まなこには涙あふれし

本当の学問を知った

(熊本短期大学 教養 一年 松浦宏美)

私は、自分が今までやってきた勉強が、なんと浅く、間違いだらけであったかということを中心に奥底に感じられてなりません。日本の歴史というものを考える時、私はどうしても、年代であるとか、政治形態などを、暗記するだけであったように思います。しかし、山田先生、齋藤先生、その他の先生方のお話をお聞きして歴史というものを本当に考えるということは、歴史の中に生きてきた方々の生き方、生き様を感じとろうと努力し、自分自身の生き方と照らし合わせて質問自答することが大切なのではないかと、痛感しています。

涙ためこぶしにぎりて話したまふ大人が思ひの胸にせまりく

第四十一班—社会人—

不勉強さを知らされた

(福岡県立水産高等学校 菅原亨二 27歳)

諸先生方の心から日本の国を思っいらっしゃる御姿に触れ、あらためて私自身、真剣に日本の国・天皇様・民族について考えなければならぬと痛感させられた。そして今日の教育が如何に一方的に選択されたもので、事実とかけ離れているかを知って、自らの不勉強さを教えられた。同時に、こうしたものに立向っていく原動力を得たような気がする。偏向したジャーナリズム、天皇様、古えの日本の国と民族等々について、しっかり勉強して、多くの人達に事実を知らせていきたい。

霧島より降りゆく友らにまた会はんその日のくるを我は祈りぬ

もっと日本の心を知りたい

(神奈川県厚木市役所 山口祥之 37歳)

普段聞くことのできない御話の数々は、熱のこもったもので講師の先生の情熱を全身で受けとめざるをえない状態でありました。イデオロギーを越えた人間の生きがい、生きざまを真剣に考えることの大切さを知り、何か自信を得ました。そして「日本」という国を見つめ直す本場に良い機会でし

た。今後、古事記を新たな目で読んでみたいし、天皇陛下の御歌にも多く接して、もっともっと日本の心というものを理解していきたいと思えます。

集ひしに病にたふれしその友の口惜しき心やいかにあるらん
感想を述ぶる言葉はときれつとも父おもふ娘の姿さやけし

耳朶に焼きついた御言葉

(熊本県三角町立三角小学校 松岡幹雄 25歳)

「人生とは良き人の言葉を信ずる以外にない」という御言葉が強く耳に焼きついている。この言葉を語気も鋭く先生が話された時、本当に心がふるえたと同時に勇気づけられたような気がした。巷には多種多様の価値をもった言葉が氾濫し、ともすればそれに逃げそうな中で、やはり自分は「良き人の言葉」を信じていきたいと思う。それを自分のこれから道しるべにしたい。

良き人の言葉信じてゆけやてふ御言葉聞けば勇氣湧きくる

緊張の連続であった

(徳山大学学生部 石井義基 32歳)

緊張の連続であった。講義・班別討論・和歌創作など、ひとつひとつが意義深く感銘する事ばかりであった。先生方の情熱あふるる御話には、有難さと暖かさが感じられた。ここで学んだことを今後の生活の中で充分に生かしていきたい。

心あはせ声をあはせて歌ふうた「神洲不滅」は心に残れり

ふだんの生活ぶりを思い知らされた

(福岡県立三池工業高等学校 宮川新一 26歳)

自分がいかに日本という国、人の心というものに思いを寄せることが少なかったかということを感じ知らされた。講義をお聞きした時はわかった様な気がしていたが、実際にはわかっていないことにも気づかされ、自分自身が腹立たしくさえなった。今合宿での最大の収穫は、自分自身をとことん見つめることができたということです。

力なきわれも数々学びたりまた合宿に来むと思ふ

第四十二班—社会人—

心に残った齋藤先生の御言葉

(岡山県作陽高等学校 菊池 朗 33歳)

和歌の創作を通して、和歌のすばらしさの一端に触れえた気がする。祖国を守るとは「日本の文化・伝統を守ることだ」と言われた齋藤先生の御言葉はまさに遺言でもあると印象的だった。大東亜戦争の正しい認識、陛下のお気持への深い理解を持たねばならないし、それを身近な人に訴えかけていかなければならないと思った。そして小田村先生が、日本の国柄・文化・伝統を学ぶことは日本人として当然であり、右も左もないといわれたことに全く同感した。

君と共に参加できにし合宿のすばらしきをばわれは感謝す
しきしまの大和の国にみ命をささげしみ霊を仰ぎ進まむ

心の霧が晴れた

(熊本県立八代高等学校 松永哲雄 32歳)

合宿前、大神神社・石上神社・大和神社を訪れたが、とくに大神神社では古事記や日本書紀の世界を身近なものとして実感した。古代から現代まで変ることなく三輪山を信仰してきた事実は、単なるロマンではなく現実にある事実なんだ！という実感は強烈だった。そして、ここで「神道」「天皇様」についてのお話を聞き、モヤモヤしていた心の中の霧が晴れていった。自分の考えを持つ際のヒントともなる貴重な言葉の数々を教えていただいたように思う。一生懸命に勉強して本当の心、真の道を学びたいと決意した。

教へ子と霧島合宿に語りしは道を求めて生くるその意義

山道に吾を待つごとき地蔵尊心ひかれてをろがみまつりぬ

目から火の出るような衝撃

(宮地嶽神社 岩下国仁 24歳)

全国から様々な気持を秘めながら集って来た参加者に御礼をいいたい。神社という日本の伝統・歴史につらなる場にながらも、祖国の歴史に疎い自分に目から火の出るような衝撃が加えられた。これからは、祖国のためにあらためて惜しまない努力を続けたいという気持で一杯だ。

日の本の世の荒れしさまに心して国のもとのを友らと学ばん

齋藤先生の御言葉が忘れられない

(福岡県立水産高等学校 松尾延明 29歳)

齋藤先生が「私の述べる事は遺言と思つて聞いてほしい。

若い君たちが先人達、さらに君たちのお父さんお母さんの祖国を思う熱き思いを承け継いでほしい」とやさしく語りかけられた事を忘れることができない。お言葉のひとつひとつが「若い君たちよ、祖国をたのんだよ」と祈りに近いもののように思われてならない。先生の御講義から、私は生徒に接する時の姿勢や気持(こころ)を御教えいただいたことをありがたく思う。

師をかこみ最後の夜の宴にて友らと歌ひ樂しかりけり

心をは一つに歌ひし友らとまたいつの日会へるか会はずらめやも

日本人の素晴らしさを確信できた

(出光興産㈱ 麻生春夫 31歳)

感動の日々の連続でした。参加者の全てが、何のてらひもなく素直に自分自身を表現していました。輪読によって、著者の気持に肉迫することがいかに大切かを知り、日常の人づきあいにおいても、相手の立場に立って考えることの大切さを教えられた思いがします。さらに御講義や討論の中で、日本人の素晴らしさを確信できました。自分が今後、何を求めて生きていくかという本質的な問題について、明確な方向性を与えられました。

切々と御講義さるる師の君の熱き想ひは心にしみぬ

太子の御言葉を自戒としていきたい

(八代市立第一中学校 長船建二 45歳)

感情的煽情的でなく、落着いた深味のある真剣な合宿だった。齋藤・黛・幡掛の三先生のお話は特に印象に残った。年齢的に四十代になると人生観が確立しているの、若い時に参加すべきであると思った。今後は憲法十七条にある「我一人得たりといへども衆に従ひて同じく行へ」という太子の御言葉を自戒の言葉として精進していきたい。

友らと共に学び励みし五日間各地に散るとも忘れず生きむ

第四十三班—社会人—

新たなことに気づかされた

(八代市立高田小学校 樽海弘志 36歳)

自分の祖国、日本のことを知り、真に生きる道を自己の中に見出すことが大切だということがよくわかった。日頃「日本はどんなことがあっても戦争をしてはいけない。そのためには武器を持たないことだ」と考えていた。しかし齋藤先生のお話を聞き「自国を自分たちの力で守ろうとする努力」こそ、国土を愛し、国を存続させることだと知った。このことを自分が一個の人間として、日々、確めながら生きていくこ

とが教師としての私の使命ではないかと思つた。

語りあふまなことはして感ぜらるる友のまごころいとすがすがし
うたづくりの心つたへむと班長のことは厳しくまなざしやさし

印象的だった黛先生の御講義

(出光興産 山本芳夫 33歳)

黛先生の御講義から、日本人の心はここかしこ全くイデオロギーとは無関係に、日本人なら認識できるものであり、発露できるものであることを知つた。これが一番印象的だった。ここで学び得たものを心の隅におきながら、今後の原動力とすることができるならばと、私自身、意欲を燃やしていきたい。これからは更に日本人の心を追求し、皇室・神道・大東亜戦争など多くのことを学んで、自らを磨いていきたい。

しとしと降りし雨止みうるほひし木々の緑に白き湯けむり

先生方の視線は「日本」に注がれていた

(福岡県立水産高等学校 高橋成隆 31歳)

感謝、感激、感動で一杯です。先生方の御話に心打たれ身ぶるいした。国際情勢・日本の神々・茶道等々、それぞれの御話は様々であったが、先生方の注がれる視線は「日本」を思う一点に集つていた。それにしても私自身の勉強不足が身にしみてわかつた。また明日から初心に戻つて出直すつもりである。

朝あけて友が歌ひし歌声に感謝の念ひ胸にこみあぐ

本当に有意義だった

(九州日植 大崎恵之 38歳)

学生と共に身分の上下なく一つの目標に向つて、国家の存在、人間としてあるべき姿を諸先生の御講義の中から体得できたことは本当に有意義な事でした。山田先生、齋藤先生、小田村先生、小柳先生をはじめ多くのお話に感銘を受けました。中でも黛先生の日本人の文化と美についてのお話は非常に印象的でした。この合宿で得た多くのことを今後の営業活動の中にも生かせればと思つている。

五日目に友と別れて吾子おもひ一目見たさに家路へいそぐ

御製に胸が熱くなつた

(宮地嶽神社 西村信行 26歳)

あらゆる面で不勉強さに気づかされた。今上天皇の御歌、あるいはお話を聞かされたに、あたたかな御心に触れて胸が熱くなる思いがした。その御心にお応えするべく日々、頑張つて行きたい。この霧島の山を降りてからも、さらに勉強に奉仕に自らの信ずる道を全力をもって進んでいく決意である。

くもりたる心一つの光あり今上陛下の御歌拝して

戦死した伯・叔父が思われてならなかつた

(宮崎県立宮崎商業高等学校 藤井猪徳 46歳)

万世一系皇城を護る／忠烈無双正成公の／魂魄比処に流れ

ていきる／国難我等に御任せあれよ／「いのちささげて」護りぬかむ——私には支那事変と大東亜戦争で戦死した二人の伯・叔父がいます。諸先生の血のにじむような切々とした御講義に涙の出るのを禁じえませんでした。同時に二人の伯・叔父のことが思われて狂おしい程に胸がしめつけられました。近く墓参する折には、合宿で勉強したこと感じたことを語り伝えることを楽しみにしています。そして代償を求めない、いのちささげて悔のない人間をめざして微力を尽して生きつづけたいと覚悟しました。

出水市の特攻碑を参拝したことを想って

特攻碑氏名不詳百余あり涙かるるもなほかなしかり

弟を偲ぶおもひは壕のすみ兄のたてにしちさき碑あはれ

霧島盆地（都城）の特攻基地を拝して

英霊の御声と聞きぬいでたちを励ます如きかみなりの音

第四十四班—社会人—

気持を新たに勉強したい

（国会議員秘書 宮崎声一 27歳）

日本の伝統を守り、真に国を思う気魄を各講師のお話から感じ、無力な自分にはがゆい思いがしました。しかし、ここに集っている学生の真剣なまなざしに接し、自分も気持を新たに勉強していかなければならないと決意しました。私は政治とは「先人の遺した文化伝統を守り、先人の業績をうけつ

いで、ただすべきはただし、文化伝統を次の世代に伝えて行くこと」だと思っています。その意味でも一層勉強していきたいと思います。

五日間寝起を共にせし友ら別れしのちも正道を歩まむ

心ひらき共に語りし友どちと再び会はむと誓ひぬわれは

心の大切さを感じた

（福岡県立朝羽高等学校 上瀧 弓 30歳）

日本を愛する心、人を愛する心、人の気持を偲ぶ心、かうした日本に生をうけた者が誰も持つてゐる心の大切さをつくづくと感じた。この心は祖先から伝へられ、子孫へと伝へて行くべき自然な素直な心だと思ふ。我々の祖先が、先輩が、この日本の国と民族を護るためにいかに苦心をしたことか。このことが言葉で歌で祈りで伝はってきた。我々は、我々の生活を託すべき大きな足場を自ら砕かうとしてゐるのではないか。この美しい国と美しい心を永く伝えるために、一人ひとりの努力が待たれてゐる。頑張らう。

霧島にはに集ひし若人はひとみかがやきをり心直ぐならむ

峰々は緑いやまし霧島は雨のあがりて心清しも

今後の人生の糧としたい

（八代市立金剛小学校 水由隆勇 29歳）

小田村先生、齋藤先生をはじめ諸先生方の御講義を拝聴しただだ考えさせられることばかりだった。班別においては、お

互いに胸襟を開き、通じ合える何かを感じた。和歌創作はなかなか難しく、自分で見て聞いて感じたことを言葉で表現するのは日頃やっていないことで苦勞した。日常生活でいかに感動のない生き方をしているかが悔まれて反省させられた。この合宿で学んだことをさらに消化し、今後の人生の糧としていきたいと思う。

長かりし夏の合宿終れども決意新たに明日より励まむ
御酒くみて友が語りし言の葉のあつき思ひに心うたれぬ

和歌創作に学んだ

(徳山市立今宿小学校 山上洋司 27歳)

日本人としての意識をさらに深めたいと思っていたが講義や班別討論で、新たに目覚めさせられた。見えざる心に形を与える和歌創作は、絡み合った糸をときほぐすに似て、自分が何に感動し何を考えているかがはつきりしていたようだ。一つのこと意識を集中していくことのすばらしさ、そこに日本人の心が呼びさまされると思えば、苦勞をいとわずやり続けなければならぬと思った。日本に生まれたことを誇りとして、この国を大切にしていきたい。

班別の友らと語り語りひてときし心も今はひろごりぬ
霧島にてはじめて会ひし友なれど日の経るにつれはなれがたきかな

晴れ晴れした気持で一杯だ

(鹿児島県立中種子養護学校 宮下春幸 30歳)

「日本への回帰」を読み返しつつ、自分を見つめ直す良さ指針としてきた。そして新しい友との研鑽に期待を持って参加したが、仕合わせなことに初日から、長年の知己のような思いで生活することができた。班別討論でも、様々の角度からの突っ込んだ意見が出されて、とても勉強になった。閉会の頃には、異口同音に別れを惜しむ声が聞かれ、お互いに今後とも連絡をとりあって研鑽して行こうと約束した。実に晴れ晴れしく心強い気持で一杯である。

友どちの心こめたる言の葉は別れしのもも忘るべしやは

自分の勉強は間違っていないかった

(旬光洋印刷 近藤泰啓 31歳)

いままでの自分の勉強が間違っていないかったとの確信をえた。なかでも齋藤先生の御講義は、切々とお話になる御聲・御声・御考え、とくに万感極まった「同期の桜」の御歌声には涙があふれてしようがなかった。真実の言葉聞き、日本の素晴らしさを実感できた。四日目の夜、松吉先生を囲んで何年も前からの知己のように語り合った。時の過ぎゆくことも忘れて話し込んだ。この夜のこととは生涯忘れられないことだらう。

明日こそは別れと思へば時忘れおもひのたけを友らと語りぬ

第四十五班—社会人—

祖国の生命はイデオロギーではない

(日本通運 前田直子 24歳)

祖国を想い、先人を偲びつつ生きようと思ひながら、戦後教育やマスコミの影響で、イデオロギーのひとつの殻の中につい閉じこもっているように感ずることがあります。しかし祖国に脈々と流れる生命は、イデオロギーでも権力でもなく、一人ひとりの、他を想い国を想う気持ち承け継がれてゆくことなんだと思ひました。聖徳太子の「国家の事業を煩となす。但大悲息むことなく、志益物を存す」という御言葉に込められた御心の広さと深さを感じることができました。日本人の心を回復するには、私自身がまわりの人達のことを思い、そして祖国の現状を同じ心で感じつつ生活しなければならぬと思ひました。御製にさらに学び、先人の残された道を行んでゆきたいと思ひます。

慰霊祭にむかひて歩む友の姿白き衣に志見ゆ

もっと勉強しなければ……

(熊本市立城西小学校 河野 緑 21歳)

短歌は詠めないし、講義も班別討論も全然わからず、大変でした。もっともっと勉強しなければならぬという事を痛

切に感じました。これまで勉強不足から、人に流されるままだったような気がします。これからはもっと勉強して、他人の言っていることの真偽を考えられる人間になりたいと思ひます。何もわからなかった私ですが、朝日を浴びて、緑の木々を背景に、掲揚されていく日の丸は目にしみついて忘れることができません。どんな時代になっても、こうした光景だけはなくしてはならないものだと思います。

霧島の峰より出づる陽を浴びて昇る日の丸われは忘れじ

日本人なんだなあと思つた

(日本青年協議会 大島啓子 34歳)

黛先生から天孫降臨のお話をうかがつたその日に、古宮跡から高千穂の峰を仰いだ時には、古い／＼昔のことが偲ばれて感慨深いものがありました。班員の方々とも打ち溶けた話し合いができてとてもうれしく思ひます。やはり皆、日本人なんだなあとしみ／＼と思われたことです。合宿後も、私が接する人達の中にも日本人としての心があるんだということを感じて生活したいと思ひます。

硫黄泉の白煙のぼりし高千穂で友と過ごし五日間なつかし

声高に「叫んでゐた」自分が恥しく思はれた

(日本青年協議会 山岡城子 27歳)

私はここで日本人として日本人に接する接し方を学びました。日本の再建とは、まづ自分の中に日本文化を継承できる

日本人の心を取り戻すことであって、人間としての生き方・道を求めて精進することだと思ひます。幡掛先生は「日本人は言挙げしない国民である」と言はれました。あまりに言挙げの多い中で、自づと日本人の道を歩むことのできる人間に、天皇陛下の御心に応へられるやうな人間になりたいと思ひます。班員の一人ひとりの中に自然と日本人の心が脈打つてゐることを知って感動しました。これまで肩を張って声高に叫んでゐた自分が恥しく思はれました。

感動したと講義を聞きてうれしげな友のかんばせ美しきかな
まごころをこめし言の葉ききゆけば心のさまの正されゆくなり

まごころが大切なんだ

(埼玉県富士見市立勝瀬中学校 飯島由美子 23歳)

先生方や班員の話の聞いてみると、言葉はそれぞれ違つていても、いわんとすることは「年齢の違い、職業、大学の差違は、人間の価値とは何ら関係ない。大切なことは真実の心のありようなのだ」ということでした。小田村先生をはじめ、合宿運営にあたられる人達の心遣いには感動しました。天候のこと、体調のこと、バスの手配のこと、このような他への心遣いがあつて、はじめて日本を護るといふ広い心を持つことができるのだと思ひました。班別討論では、自らの勉強不足を強く感じながらも、自分も語りかけたという思いにかられ、驚きました。心をひとつにするとはこうしたことなのかと思ひました。

山々を遠くにのぞめば雲海に鳥のごと浮ぶこは霧島

日本人であることを嬉しく思つた

(熊本市立城西小学校 中山信子 23歳)

時として忘れがちになる本来の自分。それをこの合宿でとり戻せた、そんな広やかな気持ちで霧島を去ることができます。「潜在的に誰にでもそなわっている日本人としての美しい心。それを覆っているものを取り去って、本来の心を取り戻すことで、景色だけでなく、そこに住む人の心も美しい日本の国になるのです」と教えて下さつた小田村先生。黛先生からは「自然と一体となつて独自の文化を育んできた日本人。その日本人がもつ細やかで豊かな心は、虫の音や小川のせせらぎにも感ずる力をもっている」ということを学びました。私は日本人であることを心から嬉しく思ひました。そして高木尚一先生の眼鏡の奥にあるやさしいまなざしを忘れることができませぬ。

高木尚一先生と語り合ひて

にこやかにうちとけらるる先生のはそきまなこのなんとやさしき
しみじみと想ひ出語らるる先生の言の葉深く胸にとどめむ

陛下の御心を知つた

(熊本県芦北町立大岩小学校 江藤国光 31歳)

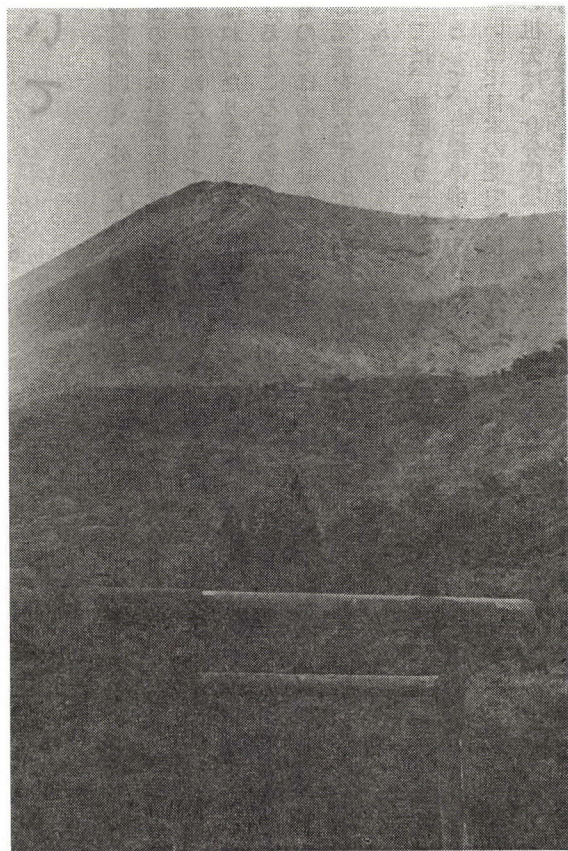
小柳先生の御講義から、天皇陛下の国民を思われるお気持ちを察することができた。陛下と軍隊は一体であると思つてい

たが必ずしもそうではなく、いくつかの御製を拝聴しながら陛下が常に日本と日本国民の現状と将来に思いをはせておられることを知った。最終日に小田村先生がマスコミの現状を批判されたが、なぜ日本のマスコミは事実を歪曲してまで、祖国日本を批判しているのか激しい憤りを覚えてならない。教科書問題についても、当時の世界状況をベースにして報道すべきだと痛感する。

日の本のいかなる世にも常々に民を思はるる陛下の御心

合宿中に創作された「和歌詠草」

——しきしまのみち——



短歌創作について

二ヶ月にわたってマスコミを賑はした教科書問題も、外交上の配慮があつたにせよ、事実上、日本側の大幅な譲歩で一応の決着をみることになりました。歴史教科書の内容が歴史的眞実に照らして、より正確な記述となるべく改訂されることはもとより必要であります。それが外国からの干渉によって、いとも簡単に修正するといふ結果になつたことは、日本にとって取り返しのない過失であつたと言はねばなりません。自国の歴史を学ぶ主要な目的は、その民族の祖先の限りなき営みの跡を正確に辿り、その思ひを痛感するところにあると言へませう。それは、他の外国が、いかなる理由があらうとも、干渉し、内容の変更を迫るべき筋合のものではありません。日本は、残念ながら、自らの歴史を記す主体性を喪失してしまつたことになりました。自らの歴史を守る気概を持たずして、国家の独立と安全を守り、現下の内外の諸問題に対処してゆく自信と勇氣が、湧いてくる筈はありません。

今回で二十七回を数へるこの「合宿教室」では、初回より一貫して、すべての参加者が必ず和歌を創作し、そのあとその作品を相互に批評するといふ行事を大切な柱として、日程の中に織り込んで参りました。それは、和歌創作が、私達日本人の祖先が営々と守り育ててきた民族的情操、いはば日本の歴史の根底を流れる心情を実感として感得する最も適切で有効な手だてと考へるからに他なりません。私達の祖先は、身分階層を超えて、和歌を詠むことを人生の修業の一つの手だてと考へて、「しきしまの道」と呼んできたのです。私達自身が、和歌を詠んでこそ、歴史を支へた祖先達の和歌を正しく鑑賞する素地が養へる筈です。そして和歌に表現された祖先達の思ひをしみじみと実感し得た時、歴史の実像が、まざまざと浮かび上ってくることでせう。

さて、和歌創作導入講義は、合宿の第三日目に、国民文化研究会の夜久正雄先生によって行はれました。先生はまづ、「歌は、精神が集中されてこそ創れるものです」と作歌上の基本的態度について指摘され、「歌を創るといふことは、自然や、自分以外の人々との一体感を心の中で実現することである」と和歌創作の意義を適確に説明されました。さらに、正岡子規の和歌を例に掲げられ、「一首一文の原則、連作、字余り、字足らず等、作歌上の留意点を具体的に説明されました。そして、すぐれた歌の模範として、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の著者・黒上正一郎先生が、二十歳の時、橋川正といふ方へ送られた和歌を紹介されました。

手紙のはしに

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし
みことばにつながりを得て一信海にわれも入らむとおもふよるこび
こののぞみわれもつながらむと思ふごとわれ生くらくのこちするかも

ああ一信海われもつながらむと求むるころそのころにこそわれは生くるか
ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

この歌には、機縁を得て、生き生きとした学問と友情の世界に触れた作者の躍動するやうな喜びが、率直に表現されています。このやうに、和歌は、単なる趣味の世界ではなく、人生そのものの切実な表現なのです。

このあと、参加者一同は濃霧の中、バスを列ねて高千穂河原や霧島神宮を周遊し、第一回の和歌創作を行ったのです。濃霧の為、せつかくの高千穂岳の峰が見られず、残念がる参加者も多かったやうですが、宿舎に帰った後、精一杯自己の思ひをうたひあげようと努力したのです。和歌は、その夜の内に、選歌され、事務局お手伝ひの高校生達によって、「和歌全体批評」が印刷されました。先生は、四百五十首にも及ぶ和歌の中から約二十首を取り上げ、作者の心懐に沿って丁寧な添削してゆかれました。時に笑ひが湧き上る、ユーモアあふれるご批評の中にも、作者の心の中に全身を以って飛びこんでゆかうとされる厳しい御姿勢は、強烈な印象となって参加者の心に残りました。

この全体批評に続いて、各班に分かれ相互批評が行われました。和歌相互批評では、歌に詠まれた言葉の一語一語を正確に辿りながら、友達がどういふ気持を詠みたかをお互ひに憶念し合ふと同時に、気持が正確に表はされてゐない。言葉遣ひや、誇張した表現などに対しては、疑問が投げかけられ、厳しい批評がなされていったのです。一人の友の歌について、心を合はせて、より適確な表現とするべく、言葉遣ひを直してゆくうちに、今まで自己の心のどこかにあったこだわりや、てらひが、不思議にも氷解して、自己の心が開かれ、互ひの心が通ひ合ふのを覚えたのでした。

(付記) ここに収録するにあたっては、ある程度の添削を加へ、仮名遣ひを正しました。

和歌詠草

(しきしまのみち 合宿第一回目の創作作品)

第一班

一橋大商三 坂本 慎
バスを降り友と見上げし高千穂の峯は間近に
敵かに立つ

亜細亜大経二 森 一郎
立ちならぶ杉の林の切れ間より遠く広がる下
界が見ゆる

鹿児島経済大二 島 元 道 明
高千穂に登らむとする我等には包める霧が唯
に憎らし

徳山大経四 小田 克 幸
薄雲に隠れた山は見えぬけれど心の中にくや
しさ見える

熊本大工一 岩 田 孝 広
峰かくれ白き姿の高千穂は友らの期待うらぎ
りしかな

早稲田大一文三 増 島 真 弓
溶岩の玉砂利踏みて後にせむ国のはじめの神
のみやみを

福岡大工四 橋 口 英 生
目前に若草覆へる高千穂の天をあふぎてそび
え立ちたる

第二班

西南学院大文四 郷 田 佳 伸
齋藤先生の講義を拝聴して

講義中声をふるはせ歌ふ師の想ひしのばれ胸
熱くなりぬ

亜細亜大経営一 吉 川 理 夫
宮の跡神秘の力にはかにして霧の流れに思ひ
をはせる

九州大法二 與 島 誠 央
高千穂の峰に登るとかねてより待ちにし朝は
すがしく晴れたり

昼過ぎて西の方より雲わきて晴れたる空をお
ほひつくせり

高千穂の河原に降りて眺むれば雲間ゆ光の射
してありたり

福岡大経一 河 村 正
登らんと思ひゑがきし高千穂の姿を見れば雄
々しかりけり

東京大理三 松 岡 信 也
日の光受けて輝く高千穂の峰を仰げばさはや
かなりけり

ときめく

宮崎大教二 池 田 佳 弘
輪読でいたらざりける我が読みの深めらるゝ
はありがたきかな

第三班

早稲田大商二 伊 香 賀 浩
霧島に不安をいだきつゝ来し我を友はあたゝ
かく迎へくれたり

防衛大理一 鎌 田 修 一
霧島の胸打つ自然眼前に身の清めらるゝ思ひ
こそすれ

宮崎大教一 坂 元 義 久
霊峰のリンとそびゆる木々の群れ霧が誘ふも
動かざるなり

産業医科大医一 生 島 壮 一郎
せゝらぎに思ひおこさる幼き日に日暮も忘れ
てあそびしことを

亜細亜大法三 取 知 浩 一
青年体験発表を聞きて
身の上を案じながらもいかむともできぬはい
かにくやしかりけむ

熊本大法二 野 林 直 哉
見ず知らぬ人なりけるも輪読し語れば心結ば

れにけり

第四班

東北大工一 緒方 宏幸
ひぐらしの鳴く声聞けば張りつめし心の糸も
ふと緩みたり

福岡教育大教三 脇本 光法

齋藤忠先生の「同期の桜」を聞きて

先生の涙ながらの歌声の我が胸内にせましく
るかな

せつ／＼と歌ひ給へる先生の面輪をひたに見
つめをりたり

教へ子を戦^{いくさ}の場^ばに送りし日の師の御氣持の偲
ばるゝかも

早稲田大教二 西田 厚司

高千穂は霧につままれさながらに皇孫降りし
時を偲ばす

鹿児島大教二 大久保 浩二

霧島神宮境内の杉林を見て

まつすぐに伸びたる杉のみごときに吾を忘れ
てしばし佇む

拓殖大外三 富島 幸緒

はるかなる山々見れば我心古き昔へ帰る思ひ
す

亜細亜大経三 須田 剛

カナカナと行く夏惜しみ鳴くせみは短かき生

を精一杯生く

第五班

長崎大教二 永木 鏡太郎
霧深き中に鳥居のはの見えて神のまします如
き思ひす

亜細亜大法四 丸山 永二

湯けむりのむかふに見ゆる友だちは苦惱に満
ちて歌作りをり

大阪商業大商経二 岸上 守

高千穂の峰に立ちてぞ我は偲ぶ国たひらげし
瓊瓊杵尊を

防衛大理工一 福岡 庸光

「海ゆかば」斉唱すれば古^{いにしへ}の人の思はれ涙流
しぬ

熊本大工三 堺 美智雄

齊藤先生の御講義をお聞きして
去年の夏阿蘇にて会ひし師の君の御声聞ける
はうれしかりけり

せつ／＼と語りゆかるゝ御言葉に我が胸内の
熱くなりくる

第六班

明星大理工二 小山 典孝

友どちの己を隠さぬ言の葉に我の心は洗はる
ゝ思ひす

早稲田大文一 小妻 典文

ひぐらしの声聞きながら苦吟する友の姿もな
つかしきかな

防衛大理工二 黒川 寛

むら雲はしばし払はれ御姿を現はしましゝ高
千穂の峰

青山学院大経三 高橋 健伸

神の御世にすめらみおやの降り立ちしその故
郷をしかと見つめむ

九州大法二 有村 浩明

霧ふかき御山のもとにひつそりとよりそひあ
ふごと杉木立見ゆ

第七班

西南学院大法二 森川 昌英

あな悲し入院したる美少女の命短きことを思
へば

長崎大教四 植松 伸之

この雲の覆ひしこの地の敵かにおぼゆるこゝ
ちを禁じ得ずかな

高野山専修学院研一 白瀬 忠法

たかちほの古宮跡に古の社の様を想像すなり

早稲田大商二 藤新 成信

バス降りてはるかに仰ぐ高千穂は今しも霧に
隠れむとする
隠れむとする高千穂の峰を背に写真とらむと

友呼び交はす

福岡教育大教二 坂本 一 紀

バスおりて仲よく写真にうつりたる友との仲間をうれしとぞ思ふ

近畿大商経一 逢坂 克也

班別で友と意見を交はす時心は動けり友の言葉に

第八班

産業医科大医一 江島 邦彰

高千穂に登らむとせば霧出でて果たさざらむは口惜しきかな

亜細亜大経営二 土屋 雅彦

討論でひれふし倒れし我が心明日にむかひて何か思はん

拓殖大外国語三 三原 義市

篠敏郎先生の御講義を聞きながら

先生の祖国を思ふ御心に触れし思ひは涙となりぬ

九州大院二 崎村 耕二

ひとりではさびしき景色もともどもにながむる今はこよなく楽し

京都産業大経二 小津 博英

屋上に一人たたずむ我耳に聞こゆる虫の声右に左に

福岡教育大教三 太田 和浩

日がさして色あざやかなる山の面は霧たちこめてすぐに消えけり

神奈川大経一 平野 耕治

たちこめる霧に友らは驚きて吾は思はず言葉が出でず

第九班

九州大工二 原田 三千義

あしばやにくるありひとついはのぼりなにくむかふかきりふる山に

鹿児島大教三 永山 一三

彼の神のおはしましける高千穂は今や白霧に覆はれんとす

高千穂商科大商二 武田 悦男

霧の中友と短歌を作りつゝあれよくと時はたつなり

多摩美術大美術二 佐々木 勝浩

いにしへに神のくだりぬ高千穂の峰をしづかに流るゝ霧かな

早稲田大理工一 三谷 直幸

雲の間に姿を見せし神山は深まる霧にはや隠れけり

福岡教育大教三 是松 秀文

自らの力のなさが感じられただなきけなく時はすぎゆく

口数は少なかりける友なれどその言の葉ゆま

ごころ感ず

第十班

福岡大商二 宇野 世史也

一日が終はりて床に入れども話はずき夜も更くるかな

防衛大理工一 山本 喜清

しきしまのやまごころのみなもとに我は来にけり高千穂河原

佐賀大理工四 小野 伴美

七百年のながきにわたり大木は守りとほせりこの御社を

専修大経営四 納村 道一

静かなる社に入れば我が心清まる思ひに姿勢正さる

東京経済大経四 小林 親樹

湯けむりの漂ふ中に父の顔「調子はどうか」と励まされたり

九州大経一 金子 隆義

日の本のみなもとと聞く高千穂の山に向かひて我は立ちけり

早稲田大教一 熊谷 修二

高千穂の峰をおほひし深き霧口惜しけれど帰路につくなり

広島修道大商三 野村 宗明

講義を拝聴して

国憂ふ深き言の葉の流れにて洗ひ清めむ内なる生命

第十一班

高千穂商大商一 黒田 欣 弥
霧こむる高千穂河原を後にして別れをしみて
パスへと向かふ

早稲田大政経四 斎藤 勝
みどり濃き木々の間ゆ湧き出づる白き煙の上
りゆくかな
みとせまへ友らと共に学び合ひともに語りし
ここは霧島

鹿兒島大教二 松 谷 晴 朗
降り来たる霧に吾が身の抱かれて心清まるこ
ちぞすなる

防衛大理工一 倉 田 裕
合宿の起床消灯なんのそのラッパがないのは
ちとさびしかりけり

福岡大法四 手 柴 和 彦
霧島神宮にて
静かなる杉の木立を友どちと歩みて行きぬ神
殿に向かひて

岡山大教三 横 溝 龍 一
たち並ぶ木立の中に鳴きわたるセミの声にぞ
心しづめらるる

第十二班

鹿兒島大教一 上 蘭 進 二
日の本の歴史興りしこの地にて学びし我ら明
日を担はん

防衛大理工四 吉 村 仁 孝
魂で語る講師の御言葉にうなづくあまり後を
聞きのがす

慶応義塾大経二 山 本 展 広
高千穂の雲にけぶれる石鳥居しばしの夕陽に
清く輝く

九州大文一 竹 内 昭 彦
いざ行かむまだ見ぬ友と語りひに霧島の地へ
合宿の地へ

徳山大経三 小豆沢 貴 志
霧島の遠くにのぞむ山並みは雲をいただき夕
陽に映ゆる

早稲田大法三 打 越 孝 明
桜島初めて見たるその姿聞くに違はず見事な
りけり

亜細亜大経二 大 竹 正 彦
霧島に集ふ若人肌かこみ語るまなざし熱きも
のかな

第十三班

早稲田大文一 石 田 雅 二

後輩に心の思ひ伝へんとする先輩に我は応へ
ん

久留米大商三 坂 井 宏 行
流れ来る霧の白さに高千穂の河原おほはるる
を眺めをたり

亜細亜大法二 上 杉 智
「さあ出来た風呂へ行かう」と誘ふ友我は出
来ずにはがゆく思ふ

千葉工業大工一 吉 村 浩 之
夢に見しににぎのみことの降りし地は雲にか
くれし高千穂の峰

西南学院大文四 重 博 巳
高千穂と思ひし山に霧かかりにはかに姿の隠
れゆきけり

和歌山大経三 内 田 欣 吾
硫黄谷煙湧き出であちこちに高く昇りて何処
へ行くらむ

九州大工二 菊 池 正 浩
馬の背越は姿見すれども恥ぢらひて霧の衣に
身を隠すかな

福岡教育大教一 木 村 賢 二
憂国の気持ちの高ぶり覚えしも動けぬ我にあ
せり覚ゆる

第十四班

中村学園大家政一 中 村 博 隆

討論も日をおふごとくにうちとけて共に語りぬ
心のうちを

宮崎大教三 廣木伸一

雲間よりわが子みつむる神々のやさしき姿ま
なこに写る

亜細亜大法一 長谷部 祥正

高千穂の山は不機嫌霧にかくれ我が目ばかり
はきらりきらめく

独協大経四 原 正稔

語らひに時を忘れて遅くなりし食事くらふも
楽しからずや

徳山大経二 中村道陽

風呂上り涼みに出でて木々見ればこずゑに照
りたる夕陽美し

神奈川大経四 若山和宏

古へに国をつくりし逆鉾に誓ふは我にまごこ
ろありと

第十五班

防衛大理工四 神谷正一

杉並の奥にまします霧島の神の御社鮮かに見
ゆ

日本大文理二 金谷美保

齋藤先生の講義を聞きて

眼をさましとも心に心をつつと語りしひとに
我もこたへむ

九州大工二 北浜 道

山田輝彦先生の御講義で聯合艦隊参謀秋山直之中佐
のことをお聞きして

海図にて検討を積み艦隊は対馬ゆ来むと見抜
きたりけり

亜細亜大法二 林 広樹

夜久先生の御講義を聞きて

熱心に和歌の指導を聞く友ら我も思はず身を
ば乗り出す

熊本大教一 蓼田誠一

霧晴れて夢に願ひし峰を見む我が切実の折り
とどけや

八幡大法経三 上村謙一

境内にそびえたちたる大木にわれはおどろき
じつとみつめけり

高千穂商科大商一 岩佐憲良

討論の疲れをいやす温泉にみんなの声が楽し
く響く

拓殖大外国語三 篠窪 実

蟬の音も貴き自然も敬神の大先生に比べれば
おちる

第十六班

熊本大医一 藤川恭浩

霧かゝり山もす野も見えざるは残念でもあ
りくやししくもあり

亜細亜大経管三 佐和田 立雄

高千穂に登りゆく道まっすぐに延びずは己が
心に似たる

早稲田大理工四 桑野 忠生

はるかなる桜島山にけむり上りふもとの海を
遠く見降ろす

防衛大人文社会一 是永 裕樹

久々に会ひし恩師のごましほの目立つ白さに
驚かれぬる

拓殖大外国語三 高橋 恭一

ひろげたるレジメの中の一節に心うたる言
葉ありけり

鹿児島大水産三 稲留 康二

占領の時の事実をみつめよと語らるゝ姿に心
うたるゝ

山田先生の導入講義を聞きて

語らるゝ師の御言葉に聞き入りて前途に光か
すかにみたり

西南学院大経四 町田 周二

第十七班

熊本大薬一 有馬 英俊

しみくと「同期の桜」を唄はれし先生の日
には涙こぼるゝ

長崎大教二 伊藤 和久

亡き友を偲びつゝ師の歌ひ給ふ「同期の桜」

しらべかなしき

福岡教育大教一 有田 浩

どつしりとそびえ立ちたる大杉の生き来し歴史を我は知りたし

高千穂商大商二 小林 克浩

雄大にそびえたちたる高千穂をあふげば心をしくなりぬ

立命館大文三 濱田 清人

短歌創作の折

できたかと問へばある友でできたりとある友いまだと笑みて答へり

西南学院大文四 結城 誠二

この地より国はじまりぬとふ師の君の御言葉親しく思ひ出さるゝ

拓殖大外国語四 大嶋 博文

霧島の歌うたはんと思へどもあせる気持ちで時は過ぎ去る

第十八班

福岡教育大教三 森田 重隆

齋藤忠先生の御講義をお聞きして

師の君の御顔拝せばまぶたには涙ためつゝうたはれてあり

宮崎大教四 榎原 和彦

草薙の剣をもちてのたまひしその御心の雄々しきことよ

亜細亜大法一 渡辺 誠司

万物に生かされてゐる自らは日暮の声に耳をかたむく

国学院大第二文一 杉本 吉朗

高千穂の嶺をはるかにをがみつゝ国の基を思ふ我らは

中京大商二 竹野 浩司

高千穂の山を背にする社跡何もなければおごそかに見ゆ

防衛大人文社会三 山本 正浩

流れゆく雲の切れ間にあふぎたるみやまの嶺ぞ天にそびゆる

第十九班

防衛大理工一 山倉 幸也

わづかななる霧の晴れ間の高千穂の赤き山肌目に染み入りつ

西南学院大経三 中村 洋一郎

うちとけし友との別れ近づきて去り難きかな霧島の山

中村学園大教政一 福田 天志

高千穂のふもとの砂利につまづきて峰を見あげてためいきをつく

佐賀大経四 藤井 勝

知らぬ間に雲のとぎれて高千穂の頂き近く陽のさしてあり

早稲田大院二 勝岡 寛次

言の葉のひとつ／＼に心こめ語りゆくこそうれしかりけれ

亜細亜大経四 石川 誠司

見上ぐればわづかながらも雲間より高千穂の峰の頂の見ゆ

九州大法二 溝口 正久

霧島は昔火の国今日の日は涼しかれども霧多かりき

熊本大医五 古井 博明

参道を登りゆく間もあたりには霧の流れて空かはりゆく

みやしろのあとにむかひて友どちとぬさまつりして祈りたりけり

第二十班

産業医科大医一 井上 義崇

手をうちて頭たれたる友どちの姿を見れば心なごみぬ

早稲田大社会科二 野口 孝造

高千穂の霧立ちのぼる峰々の見えざる妖気に心奪はる

岡山大教三 難波 真二

流れゆく霧にかくれし霊山を一目見むとの夢はかなひぬ

拓殖大外国語四 國井 隆之

霧島の地名の由来見る思ひす霧の流れて古宮
おほへば

中央大法四 小柳 大喜夫

俗塵に汚れし我を拒みしか霧をまとひし高千
穂の峰

熊本大法一 跡部 隆文

夏の日に我ら集ひて語り合ふひと日を終へし
心やすけき

第二十一班

九州大医六 杉谷 篤

一瞬に霧のかゝりし高千穂よ友と並びて登り
たきなり

亜細亜大経三 天野 敏也

高千穂の河原に立ちて見渡せばいにしへの世
の思ばれて来ぬ

熊本大工二 杉浦 斉

霧こめてどこまで行けば祝野開く歴史を霧に
たとへて思ふ

関東学院大工二 益田 聰一郎

道の上ひとり見おろす道祖神行き交ふ人の無
事を見守る

長崎大教一 宮崎 正樹

この国を憂ふる老師の熱き日は明日をたのむ
と我らにそゞぎぬ

万感の思ひをこめて歌はるゝ「同期の桜」の

なんぞ悲しき

防衛大理工二 村上 和彦

夕霧に姿かくせし霧島に天より下りし神を思
ひぬ

宮崎大農四 上村 栄章

戦ひに行きしをしへ子偲ばれて師は歌はれし
「同期の桜」

早稲田大政経三 石黒 雄一

車より降りて仰ぎし高千穂の山の緑の鮮かさ
かも

第二十二班

一橋大社会一 下村 訓弘

人の忌む雷の憂ひなかりせば馬の背越えて峰
に登らましを

国学院大文二 水嶋 朗美

声しづかにこぼるゝごとくうたはれし「同期
の桜」のしらべかなしも

レクリエーションにて

大勢の友らとそろひ霧島の宮に詣づることの
すがしき

聖

深き霧につままれてある古宮のひもろぎひと
つおごそかにたつ

西南学院大文四 松下 誠

苔の如かたくなに住む我日常動きを止めた岩

の心に

福岡大商四 東瀬戸 格

頂きは我目に映りはせざれども野に咲く百合
が心なごます

拓殖大外国語三 須藤 淳

男達の足音響く山道に名も無き草花のけなげ
に咲けり

徳山大経四 谷本 光生

すら／＼と短歌をつくる友の顔その時だけは
鬼と見えくる

早稲田大第二文二 樋口 徹

神々の霧に隠れし高千穂に降りたるミコトの
姿しのばゆ

防衛大理工一 宅間 秀記

唯一つ鳥居のみたつ斎場の聖き空気を胸いつ
ばいに吸ふ

第二十三班

西南学院大法二 松元 法彦

御姿を拝せし喜びつかの間に霧に消えにし高
千穂の峰

東海大文三 杉本 浩

古の祭の址に吾は来て拍手打ちて心鎮まる

早稲田大法三 八木 秀次

霧けむる高千穂山の御姿はわが日の本の山に
ふさはし

夏合宿友と眺めむ霧島のまだ霧深き天孫の神話

独協大経一 町山直人

岩風呂で出会ひし先輩なつかしくやあ〜と
言ひ言葉いで来す

熊本大法三 緒方則嘉

合宿二日目の夜、班室に遅く帰りし折
部屋内の明りは消えて友どちは寢息静かに寝
ねてをるかも
床に入り眠らむとするに思はずも横に寝ねた
る友語りかく

九州大法四 榎本伊市

「明日の朝起こしませうか」と語りかくる友
の御心ありがたしと思ふ

防衛大人文社三 石崎吉和

神降りし御山の姿一目でも見たしと思ふ祈り
が通す

亜細亜大法一 鈴木誠司

窓の外はるかに望む鹿児島夜の街並み今夜
は見えず

第二十四班

熊本商科大経二 西本信二

先生方の御講義を聞きて

言の葉に思ひをこめて語らるゝその御姿をあ
りがたくみる

高千穂商科大商四 福井信次
高千穂の御姿仰ぎまつらむと我等まるれどそ
はみえざりき

甲南大理一 二神俊二
きりしまの緑の深きに魅せられてこゝろ安ら
ぐ人もかくあれ

長崎県立国際経済大経四 皆山武夫

高千穂の峰にかゝりし白き雲だゞひぐらしの
声ぞかなしき

防衛大理二 安楽広樹

山に来て新たなる友と語り合ふ共に明日の道
をめざして

九州大理二 稲員邦久

一度はあのすばらしき高千穂をと願へど今日
も雲が邪魔する

亜細亜大経三 野田佳宏

新しき友とはひりし硫黄風呂なんとも言へず
楽しきものなり

第三十一班

鹿児島大教一 窪田実代子

一つ一つ歌詠むごとに吾が心たゞしくてき

よめゆきなむ

食堂で女子高校生を見つければ去年の我を思
ひ出しけり

中村学園大家政一 小林美貴

はげましの言葉を言ひたく声かけり彼女の笑
顔うれしく思ひぬ
拓殖大外国語三 東晃子

楽しみにしをりし登山だめになりうらめしき
かな空おほふ雲
西南学院大文四 一宮浩子

黒上正一郎先生の御母堂の御文を読みて

御母堂の書きませる文読みゆきてその御心に
心打たれり

御会の御尊書抱きて涙をばながしきといふ思
ひ偲ばゆ

関西外国語短大二 大城戸啓子

高千穂は霧のべールに包まれて緑の木々に心
しづまる

佐賀大教二 中野佳織

安らげき温泉に身をしづむれば育てこし父母
いかにやと思ふ

佐賀女子短大教二 山田みゆき

神国の命受け継ぎ今にある我が生命をふりか
へるなり

第三十二班

鹿児島大教一 藪万里子

霧深き山路にひっそり咲きにける小百合の花
の美しきかな

活水女子短大音三 小出由美

合宿に初めて来たる友どちと肩を並べて写真
を撮れり

熊本大文四 田平 真実

徳之島のこもりうたを歌ひて

なつかしき雨の島のこもりうたを友らと歌へ
ば楽しかりけり

佐賀大教三 一ノ瀬 千秋

雲かゝる山に向ひて手を合はせ祈れば古人の
心しのばる

熊本音楽短大音楽一 澤井 美喜子

ペンとりて歌つくらんとみわたせば頭かゝへ
る友どちの見ゆ

拓殖大外国語二 奥村 由美

高千穂の山を仰ぎて祈りしは日本の国の永遠
の平和

第三十三班

佐賀女子短大児教二 斉藤 寿和子

霧島の国生みの神とともく満天の星の下
御壺をまつる

熊本大文四 山口 菜穂子

古宮の御あとに立ちてながむれば深き緑に霧
流れゆく

活水女子短大家政二 林田 尚子

八月は悲しいと師は亡き人のこもりしのびて
のたまひにけり

九州女子短大英文一 白土 美保
ひざへに外を歩きつゝ語らへば友らの笑み
に安らぎ感ず

熊本大文三 森本 貴子

何故かくくれたまひし高千穂の峰をひとたび
みまほしきかな

拓殖大外国語三 池田 由紀子

東の間に笑顔もらし高千穂は雲の向かふに
姿かくしぬ

佐賀大教一 津田 路

ちはやぶる神の力のはたらきて霧のはらはれ
霊峰あらはる

佐賀大教四 中原 美佐子

なつかしき先輩に会へば次々に話したきこと
湧き出づるなり

久々に先輩に会ひたる喜びに自づと笑みのこ
ぼれ出るなり

第三十四班

熊本女子大生活科三 岡下 富美子

若き師の志燃ゆるそのまなこに我もひかれて
道を歩まむ

福岡教育大教二 手嶋 貴子

我が心友に出会ひし今この時祖国を愛する心
に至れり

高千穂商科大商一 岡野谷 美紀

討論で実を結びたる友情を大切にしてい明日を
生きてゆく

筑紫女学園短大家政一 森 貴代美

霧島に來たりて思ひは数あれどふと思はるゝ
母のことかな

佐賀大教四 前田 かおる

いかならむ時に会ふとも日の本のまことの道
に続きゆきたし

活水女子短大音三 北林 佐恵美

かならずや大和をみなの名に恥ぢぬ清き道を
ば歩みてゆかむ

鹿児島大水産二 鈴木 麻理

竹下さんのお話を聞きて

心よりわきあがる思ひもちよりに「君が代」
の歌を友と歌はむ

第三十五班

京都女子大文三 矢山 和恵

高千穂の峰から降りし白霧にわが心まで清め
られてゆく

国学院大院一 岩本 登美子

バス降りて見し高千穂の峰の上の空はきれいに
澄みわたりたり

広島女学院大文三 小山 京子

齋藤忠先生の御講義を聞きて

祖国への熱き思ひを托されし師の御心は如何

にとぞ思ふ

一切の思ひを込めて歌はれし御声の調べたゞ
に哀しき

拓殖大外国語三 生馬 優美
口閉ざし向ふ霧島遠けれど師と友に会ひ笑み
浮び出る

佐賀大教二 植松 彰子
薄暗き林の中の木々たちは神をまもりてたち
ゐますらむ

中村学園短大家政一 赤星 美紀
真剣に思ひをのぶる師と友にふれられしこと
我に意義あり

共立女子短大文二 本間 千江美
わが国のさきは祈る天皇のやさしき心御歌
より知る

第三十六班

熊本短大教養一 松浦 宏美
今は亡き祖父とつれだち旅ゆきし楽しき日々
が思ひ出さるゝ

共立女子短大文二 布瀬 千代子
友どちの祖国を思ふ姿勢には我も心の熱くな
りけり

同志社大文三 鳥越 宏子
「海ゆかば」うたひし今日の心もて生命捧げ
し人にこたへむ

後世を信ずと近きしますらをに恥ぢざる道を
吾れ生きめやも

長崎水害
活水女子短大音三 河野 泉
幼き子一人残され生き行くに無邪気に笑ひ人
形と遊ぶ

佐賀大教三 古賀 紀子
海ゆかば歌ひてをればさまざまに散りにし人
の胸にせまりく

福岡教育大教四 金重 聰美
カメラ持つ友に微笑返しつゝすがしき思ひ胸
にあふれく

第四十一班

熊本県宇土郡三角小教諭 松岡 幹雄
バス降りて外見わたせば赤き肌の高千穂の峰
目にはひりきぬ

福岡県立三池工業高教諭 宮川 新一
霧島の古き宮跡佇みてすがしき風ふき気持よ
きかな

厚木市役所 山口 祥之
つかのまに霧に隠れし高千穂をもう一度見む
とふり返りあふぐ

徳山大学学生部 石井 義基
霧島の友と集ひし聖地にて御国を憂ふ祈りは
一つに

福岡県立水産高教諭 菅原 亨二
高千穂の峰にかゝりし雲晴れて見せ給ひたる
御姿美し

第四十二班

福岡県立水産高教諭 松尾 延明
雲流れ晴れ間に見えしつかの間の高千穂の峰
美しきかな

壇上で師が歌はれし「同期の桜」心にひびき
我胸をうつ

出光興産(株) 麻生 春夫
高千穂の古宮址で誓ひしは新たな気持ちで日
々生きること

宮地嶽神社 岩下 国仁
朝霧に登る湯けむり霧島は変ることなき昔も
今も

岡山県作陽高教諭 菊池 朗
初めての神おりられし山を見にバスを並べて
行くは楽しも

八代市立第一中教諭 長船 建二
霧流る赤松原にそびえ立つ姿うるはし高千穂
の峰

熊本県立八代高教諭 松永 哲雄
今までの生き方省み行く道を今こそ定めむ人
の世の為

第四十三班

福岡県立水産高教諭 高橋 成隆

煙立つ緑の多き霧島に心柔らぎ体もとけゆく

熊本県八代市立高田小教諭 樽海 弘志

夏草にうづもれかけし白石はおこそかなりし
神のみやあと

出光興産(株) 山本 芳夫

参道を友と語りひ登り行けば高千穂峰はいつ
の間に消ゆ

宮崎県立宮崎商業高教諭 藤井 猪徳

陸軍航空基地から散華された七十九名の特攻英霊の
声をきゝて

天翔る七十九の御霊とぞをろがみきけり神な
りし声

九州日植(株) 大崎 恵之

かすみゆく南の山をみおろせば夕日にせまる
霧島のみね

宮地嶽神社 西村 信行

玉がきの真中に立つ神籬ひもぎに心洗はれ頭を下げ
る

第四十四班

国会議員秘書 宮崎 高一

静かなる社の杜にしみわたる夏のそよ風せみ
のなき声

鹿児島県立中種子養護学校教諭 宮下 春幸
神籬ひもぎの斎場に霧たちて神代ながらの気配なり
けり

徳山市立今宿小教諭 山上 洋司

日の本をはじめたまひし大神の高千穂峰にお
はしましけり

熊本県八代市立金剛小教諭 水由 隆男

そびえ立つ杉の並木の参道に静かにひびく玉
砂利の音

福岡県立朝羽高教諭 上瀧 弓

霧島の社の森にたゞずみて古きつたへをいま
眼前に

(株)光洋印刷 近藤 泰啓

見あぐれば流るゝ雲間に陽はさして高千穂の
峰天にそびゆる

第四十五班

日本青年協議会 山岡 城子

みくにへの思ひを込めて師の君が友とうたひ
し唄うたはれり

埼玉県富士見市立勝瀬中教諭 飯島 由美子

霧深き高千穂の峰のぞみつゝ神の降りにし日
はいかにと思ふ

熊本市立城西小教諭 中山 信子

古宮址に一步踏み入り手を合はすれば心しづ
まりふしぎなりけり

日本通運(株) 前田 直子
山々に霧のながれて高千穂の神降り給ひし宮
に來にけり

熊本市立城西小教諭 河野 緑

この地こそ日本の生まれし地なりとぞ思ひて
歩く高千穂の峰

日本青年協議会 大島 啓子

雲海をおし開くごと高千穂の峰のみ光輝きて
あり

事務局

社団法人国民文化研究会 黒岡 実

亡き父の過ぎにし日々の面影を霧島山から偲
びつゝあり

熊本県立八代高二 鬼塚 美穂

高千穂の河原にやうやくつきにけり霧の中へ
と皆入りゆく

熊本県立八代高二 鬼坂 美貴子

夏忘るゝ涼しき緑の高千穂に別れを告ぐるバ
スのエンジン

熊本県立八代高二 長田 行生

時経てば我が目指す高千穂ははづかしき思
ひに雲に隠れる

熊本県立八代高二 白浜 一也

静かなる霧島の山にひぐらしの鳴き声ひびく
夏の夕暮れ

熊本県立人吉高二 山口 栄一郎
高千穂に登りたくとも時たらずくやくしく思ふ
エンジンの音

熊本県立人吉高二 塚 島 靖博
山の端を白くかきけす山の霧足どり重くいた
だき目指す

熊本県立人吉高二 浅 香 哲生
頂上に足を伸ばすと先遠し心なごます白きカ
ーテン

(記録班)

元最高裁秘書課・速記業 西川 伍朔
合宿記録二十三年目の夏

配られし名簿におのが名見定めて古りし縁に
我が老いを知る

(写真班)

亜細亜大広報室係長 加藤 幸雄
青年体験発表を聞きて

運命の定めといへど薄幸の乙女をりしと友は
語りぬ

あはれなり不治の病に冒されて残り少なき人
生といふ

助からぬ命となりし愛し子と何を語るかいた
ましき父

大学教育有志協議会・国民文化研究会

(財)労働科学研究所理事・高千穂商科大教授

高木 尚一

ひぐらしの声いやしげく鉾杉のこずゑをわた
る山風涼し

ゆけむりの立ちこむる谷いや深くゆき交ふ車
細き道ゆく

笹竹の笹のさゆらぎかたはらにホテルの入口
屋根低きかな

元(株)日特金属工業常務取締役 加納 祐五
霧島の山にむかへしこの朝の空はみどりに晴
れわたりたり

山なみの幾重かさなる国原のかなたに白く雲
は光れり

谷あひゆふき上ぐる湯の湯けむりか底つ磐根
の熱おもはしむ

三百の友と語りむこの幾日神代のつたへのい
つかしき山に

国民文化研究会理事長・亜細亜大教授

小田村 寅二郎

齋藤の大人はわが手に一葉の紙を賜はり「歌
を詠みました」と

「短歌創作」にわれらはげむを知りませる大
人は今年もみ歌賜はりぬ

大人のみ歌拝読しゆくに霧島の二夜をいかに

喜びましゝか

八十あまり一つと告らすお歳にて詠ませしみ
歌にいのちたぎれる

霧島のわれらがつどひの壇上に大人はみ国の
危急を告げたまひき

み心のたけを傾けこの国の護りをわれらに托
すがごとくに

御講義の終り間近く突然にみ声落したまひ御
愛唱の歌を

「貴様と俺とは同期の桜」と唱ひはじめたま
ひしその厳肅さよ

国のため逝きにし友をみ心をこめて偲ばるゝ
沁み来るみ声よ

聞き入りしわれら三百ごとくに心ゆさぶら
れてしばし声なし

老いの身をたゞ一筋に国のため尽しませる
大人ぞ尊き

亜細亜大教授 夜久 正雄

齋藤先生の御講義を聞きて

師の君のうたひたまへる特攻隊のうたのお声
の何ぞかなしき

肩くみてうたひしといふますらをのいまはし
のびてうたひます声

知らざりき新聞のいふ南京の虐殺は全くそら
ごとなりしと

すこしでもこの新聞のそらごとを信じたるわが罪はおそろし

あやふかるみくにのありさまをつばらかに君ときませり立たざらめやも

(株)中央塩ヅ製作所代表取締役 星野 貢

絶えまなく立ち上りゆく白き湯のけぶりをあかず見つむる我は

みどりなす杉木立の上大空にゆれつゝ消ゆる白き湯けむり

福岡教育大教授 山田 輝彦

往時いま夢のごとしも霧島につどひし友ら皆若かりき

侵略と言ふに耐へむや過ぎし日に友らい征きしかのたゝかひを

年ごとのつどひなれども今年またこのたまゆらにいのち傾く

遠つ辺の山うす雲にかくろひてたそがれ早し嵐近きか

こんや別館(株)代表取締役 青砥 宏一

台風の近づきたるかふりあふぐみ空おほひて雲のかゝれり

名にしおふ桜島山部屋ぬちゆ見ゆればよけむと友とかこつも

夕されば青空みえて入日さしこよひ晴ららしたままつりせむ

(株)宝辺商店代表取締役 宝辺 正久

いかづちの轟き近くひとしきり雨ぞ降りくる並み立つ杉に

をちこちに夕ひぐらしの鳴きつぎて薩摩遠空晴れゆくうれし

齋藤先生講義

これほどに美しき国あらめやと空の雲指すみかほきびしき

秋の風かたとふと思ひき講義きくへやに入りくる風のすゞしき

開発電子(株)取締役 長内 俊平

錦江湾に朝ふる雲の幾筋にたなびきひかる色うつりつゝ

台風の近づく知らせと谷あひの村しづもりて炊煙うごかず

教科書問題のことを

舞岡八幡宮宮司 関 正臣

外つ国は如何に言ふともみおやらを慕ひ敬ふ心変らず

みおやらのよさしに応へ奉るべき力乏しくただ口惜しき

る

合宿事務局の少年少女

若き連有難きかな合宿の一日一日を務め務むる

齊藤先生の御講義をきゝて

鴻巣寮顧問 小林 国男

にせまりけり
安き世に心うばはれおぞましきことの数々
国にみなざる
敗戦の深き傷あといよ／＼に深まりゆくか祖国日本は

福岡県立修猷館高教諭 小柳 陽太郎

女子班にて黒上先生御母堂の御手紙を輪読す

読むまゝに涙あふれく今はなきみ子偲びつゝ書きませる文

いかばかりあふるゝおもひにたへにつゝ綴りましけむこれのみ文は

遠つ世の親鸞のみことば偲ばせて母君のみ文読めばかなしも

かくばかりかなしきものか遠き日の日本のをみなの生きこし道は

今の世に生くるをみなもこの厚きみ心をしるべに生きよとぞ思ふ

農林漁業金融公庫副総裁 小田村 四郎

合宿の前日八月七日旧陸軍知寛特攻基地資料館を訪ねて

此の地よりゆきてかへらぬみいくさにますらをさはいいで征き給ひぬ

乙女らが花の小枝を振る中を飛び立ち行きぬ沖繩の空に

父母に妻にわが子に別れ告げ愛き祖国をさかりゆきけむ

皇国にあだなす艦を砕くべく水漬く屍と散華し給ひぬ

生れまして十まり八とせのみのちを捧げ給ひし若鷲もあり

齊藤忠先生の御講義に「同期の桜」を歌ひ給ひける
ときに知覧特攻隊員のことども思ひ出でられ

魂こもるみうたのひゞき胸うちて流るゝ涙とどめかねつ

佐賀商業高校教諭 末次 祐司
雨雲のたれこむ空を憂ひつゝ友の車に向ふ高千穂

緑こき林ひらけてまのあたりみ山を仰ぐ高千穂河原

つかの間の晴れたる空に仰ぎみるかしこきみ山高千穂の峰

(株)ファミリー常務取締役 松吉 基順
古宮のみ跡に詣でば高千穂の峰そびえたつし

ばし仰ぐも
神籬のみ前に拝しぬ天孫の天降りたまひし高千穂の峰

くしきかな拝しをばれば高千穂の峰は隠りぬ
流るゝ雲に
霧流る霧島高原群れ生ふる赤松林の幹のうつ

くし
サンデン交通(株)取締役開発部長 加藤 善之
残虐の限り尽せしロスケ等と語りし祖母の今

は亡しといふ

まことなる歴史を知らば国護る心出で来て語り乙女等

まことなる史実を知らば反戦の風潮つひえむと乙女等の言ふ

護るべきは三千年の歴史をと述べし乙女ごまなこ澄みけり

熊本市立三和中教頭 松浦 良雄
登り来れば鳥居の彼方霧はれて尊命降れる高千穂は見ゆ

高千穂の峰を仰ぎて古宮のひもろぎに向ひるろがみまつる

八代市立第二中教諭 右田 道徳
しみじみと歌ひたまひし師の姿御心しみて涙こみあく

佐世保市交通局営業課長補佐 朝永 清之
みまつりの庭に見あぐる山かひに霧立ちこめて雨の降りきつ

雨あしを気づかひをれば過ぐる年の雷雨のこども思ひ出さるゝ
指折れば九度となりぬ合宿のみたままつりのわがつとめはや

星のみえ来る
気がつかひし雨雲晴れて斎庭よりみあぐる空に

航空自衛隊教官 村山 寿彦

皇神をまつれる宮は霧島の山ふところに鎮まりてあり

緑濃き鉾杉の中に鎮まれる大御社は朱き色して

拓殖大助教授 松本 幹男
大島博文君に会ひて

事故にあひそれにもめげずつどひ来し友の心をうれしく思ふ

日産自動車(株)法規部 古川 修
台風の子報を聞きつゝ心配せし高千穂登山も無事に終りぬ

湯をあびて部屋より眺むる夕空に白き湯煙の美しく見ゆ
カナノとひぐらしの声聞こえて今日のつかれの癒ゆるこゝちす

新日本製鉄(株)掛長 今林 賢郁
たゞならぬことのつき／＼起こりくる御国思へば心痛むも

悪しざまにはたましたりげに報道すマスコミの言やさらに醜し
今にして防護の心固めずば御国の行末いよゝ危ふし

(株)講談社広告局 磯貝 保博
青年体験発表にて

みづからの心にとひて語りたき言葉えらびぬ
つたなかれども

つたなくも思ふがまゝをかざらずに語りかくるほかすべなしわれは

なにごとか若き友らにつたはらむ思ひのまゝに語りつくせば

神奈川県吉浜小教諭 岩越 豊雄

戦ひにたふれし人を偲びつゝ同期の桜歌ふ師の君

靖国で会はんとちかひて散りましゝ人の心を忘るべしやは

(株)竹中工務店技術課長 稲津 利比古

かざりなきうたの数々よみゆけばわが心根の洗はるゝ心地す

同信の友への便りとみうたよりまことの交はりのしのばるゝかな

熊本県立熊本西高教諭 片岡 健

夕餉終えまどろみをればひぐらしのかなしき声の聞こえ来るなり

カナ／＼と高く鳴きそむその声はやがてかすかにきえてゆくなり

神奈川県立湘南高教諭 山内 健生

窓辺より見やれば白き湯けむりの木立に映えてたなびきのぼる

をちこちゆ湧きくる湯けむりたなびきて杉の木立の浮びくるなり

福岡県立直方高教諭 小野 吉宣

夕空の雲流れ去り遠景に桜島山浮びてみゆる

筑前ゆ薩摩を訪ひし国臣のながめし山ぞあの遠山は

九州大医学部循環器内科 小柳 左門

緑深き杉の林にしく／＼となくひぐらしの声なつかしき

山のはに夕日は沈みあかね色またむらさきに空は染りつ

夕つ方降りし雨はれてみたまゝつり集ふ夜空に星は光れり

吉田歯科医院 吉田 哲太郎

吾が足にしがみて泣ける子供らの事を思ひつ霧島に来ぬ

新しき友らと共に聖徳の太子の本を読める嬉しき

ひぐらしのしきりに鳴きて霧島の出湯の里の夏は過ぎゆく

亜細亜大講師 東中野 修

カナ／＼と蟬の声しげくひゞきわたり霧島の山も今は暮れゆく

水崎法律事務所弁護士 中島 繁樹

事務所のスピーカーにて齋藤先生のお話を聴く御言葉の一語／＼に身の内の締まるこゝちし仕事進まず

亜細亜大学生部厚生課係長 山田 健一

杉木立こすゑをわたる風の音にさそはるゝごとくひぐらしの鳴く

戸田建設(株) 青山 直幸

竹下鉄郎兄の青年体験発表を聞きて壇上に上りし友はとつ／＼と己が歩みを語り始めぬ

盲学校の教師とふ道選びたる君が決意の強さ偲はゆ

すさみたる生徒らの心思ひつゝ友は心を奮ひ起こしぬ

友の思ひの伝はりたるか生徒らは次第に心を開きまししといふ

熊本市役所 折田 豊生

静かなるホテルの木立になく蟬の声のときは高く聞こゆる

散策の友らいかにも思ひつゝ見る雨雲の空うらめしき

南の方面にかきくもり杉の木立の黒々と見ゆ

福岡県立水産高教諭 占部 賢志

高千穂の河原いゆけば霧島の古宮みえて神さびにけり

福岡県立小倉高教諭 坂口 秀俊

赴任せるその初日より君が代を歌ふか否かの職員会議あり

君が代に反対論のみ多くして斉唱すべしといふ人はなし

竹下君の発表

新任のその日なれども君はすぐ勇氣ふるひて立ち上がりけり

鹿児島県桜丘小教諭 内山 かな子
黒上正一郎先生の御母堂のお文を輪読して

み友らと声を合はせて読みゆけばお心たゞに伝はりてくる
お手紙を病の床に抱かれて涙流して慕はれしとふ

先生のお母様でふ任恵様の御文を読めば姿しのぼる
かくまでもお心こめて見ぬ人に文つゞらるゝ情の深さよ

熊本県立八代高教諭 白浜 裕
竹下君の体験発表を聞きて

同僚の教師の心を次々と君の雄心動かしにけり
熊本の茅舎に君と輪読の集ひをもちし日々の偲ばゆ

鹿児島県皆田小教諭 小原 芳久
カナ／＼とときをり聞こゆるひぐらしの声をし聞けば秋の気配す

熊本県立大高教諭 田之上 正明
馬の背の見ゆるところの雲されて山の頂明るく見ゆる

鳥栖市役所 西山 八郎
手をとめて車の音に外見れば友ら乗せたるバ

スの見えけり

(株)埼玉銀行 飯島 隆史

八年前師と訪ねたる古の宮居の跡はひたになつかし
海上自衛隊横須賀造船所 鏡 信弘

緑なす山の溪間のいくところ白煙上がり硫黄にほへり
ほこ杉の遠つかなたに山も見え今日の登山に

よき日となりぬ
うるこ雲浮びてあれど青空はますみにすみて風の涼しさ
山口県立南陽工業高教諭 宝辺 矢太郎

去年の夏阿蘇の山辺にみまつりをつかへまつりしよりひとゝせは経ぬ
みまかりし祖父のみたまも天がけり今宵祭りの庭にいでませ

ゆきてはや一月とはなりみまつりのときを迎へて胸さわぐなり
岡山県立新見北高教諭 砂川 芳毅

古の人ら詣でし宮址に心ひきしめしばしたゝずむ
学校法人永末学園博多高教諭 名和 長泰

国のいのちはふらむとてか果てしなくまがごとばかりけりふも叫ばる
岡山県立福渡高教諭 小坂 博通

待ち望む高千穂の嶺の雲間より一時みえてま

たかくれたり

鹿児島県神野小教諭 南田 武法

目見えぬ生徒らなればいつしかに心すきみしところもありしと
竹下君の発表を聞きつゝ

その子等と心通はせむと語らへばやがて涙のこぼれしといふ
日本青年協議会 多久 善郎

小林先生の御講義
かけがへなき友の姿を伝へんと手振り熱くも語り給ひぬ
福岡県立三池高教諭 小柳 和孝

ふと見れば窓辺に浮かぶ山なみの眺めにしほし我が身動かず
宮崎県立日向高教諭 竹下 鉄郎

天孫の天降りましにき霧島の宮居のあとにしへをしのぶ
空おほふ雲間ゆうすび射し込めて赤松林の明るくなりぬ
大阪府立野崎高教諭 絹田 洋一

一年に一度会ひます師の君の御顔を見ればなつかしきかも
夜久先生の御講義をおきつゝ

「女なりせば」とふあやしき歌をよみ上げつところへず笑ひ出されし君は

声あげて笑ひ出さるゝ師の君も楽しげに見ゆ

我らと共に

西南学院大聴講生 平尾文洋

齋藤先生の御講義を聞きて

師の君の友を偲びて歌はれし歌のひびきに胸
せまりくる

九州大医六 長澤一成

三年前国臣の歌ひき給ひ思ひ語りし先輩し偲
ばゆ

みんなみの空のはたてにたちのぼる雲ながめ
つゝ先輩をし思ふ

福岡県立筑前高教諭 酒村聰一郎

パスを降りあふげばはるか高千穂の峰陽を浴
みてそびえ立ちをり

玉じやりを歩み行くほどたちまちに雲かゝり
きて姿隠れぬ

九州大医六 笠 普一朗

山田先生の御講義で東郷平八郎「大本營への打電」
のお話を聞きて

まちにまちし敵艦見ゆとの警報はつひにきた
りぬタタタタタタと

甲板で体操しをりし秋山はをどりだしけりよ
ろこびあまりて

いざゆかんとあふるゝ思ひにはれぐと打ち
たまひけむこれの御文は

困難にこゝろひとつにむかひたる人々のこと
思ひてやまずも

運輸省港湾局開発課 久米秀俊

一面にたちこめをりし厚雲の移りてにはかに
馬の背見えたり

急勾配の赤き地肌や青草は日射しをあびてく
つきりと見ゆ

(株)三井三池製作所 阿川信次

高千穂の御山につかの間陽は射して姿しるけ
く見えにけるかな

陸上自衛隊 野田頭龍

齋藤先生の御講義を再びお聞きして
聞くたびに心を打たれつぎ明日の日本に夢
開けたり

福岡県立遠賀高教諭 那須三元

曇れども高千穂の峰は陽に映えて地膚や木々
のあざやかに見ゆ

日本青年協議会 前之園 登美子

黒上先生と梅木さんを偲びて
いたづきの友の笑顔に見送られ故郷の地を師
は発ちまじき

ふりかへりくゆく先生は「大事にな」との
御言葉かけらる

九州大院二弓 立忠弘

齋藤先生の御講義を聴きて
しづやかに歌ひ始めし師の君の御声はやがて
かすれてくるも

たゝかひにあまたの友と教へ子を送りし大人

の声のかなしき

はらわたも千切るゝばかりの悲しみを師の歌
声にきくこゝちする

水俣市立水俣第二小教諭 清水禎子
山田輝彦先生の御講義をお聞きして

壇上に立ちし師の君見つむれば二年前とお変
はりもなき

師の君の御力強き言の葉に我がたましひは揺
さぶられたり

御講義の後山田先生とお会ひして

師の君に再び会へし嬉しさに言葉かはせば心
はずまむ

はゝゑみてこたへくださる先生のやさしき御
心嬉しかりけり

九州大院一 松井哲也

齋藤先生の御講義をお聞きして
師の君の御情け深き言の葉を聞きし時より一
年が過ぎぬ

壇上に立ち給ふ大人の御姿は一年前に変らず
てあり

我が悩み聞きて貰ふは有難しと語られし師の
御心偲ぶる

講師

国際政治評論家 齋藤 忠

たそがれの湯の町恋し逝きし日の夢はなつか

し霧島の宿

いつの日かまたも訪ねむ霧島のいで湯の宿の
かくも恋しき

足どりをひとと合はせて降りゆく浮雲白き森
蔭の坂

野佛の優しき面を仰ぎゐてなにゆゑか消えぬ
俤の在り

絶えまなく雲動きゐて霧島の陽ざし明るき山
の町ゆく

ホテルの門に風に揉まれて立つわれに君ほほ
ゑみて近づきましぬ

若き日のビスバーデンの想ひ出をひとと語り
つつ湯の瀧に立つ

日向の海の遠き潮音を聴くごとくいで湯にひ
とり眼を瞑づるひと

あとがき

朝夕はめっきり肌寒く、日増しに秋の深まり行くのを感じる此の頃ですが、皆さんその後いかがお過ごしでしょうか。霧島での「合宿教室」の最後に「走り書き」していただいた皆さんの感想文と和歌とを、今年も又、『感想文集』としてのこしておきたいと思ひ、私共在京の者が中心となって編集作業に取り組み、やうやく皆さんのお手許におとどけできるところとなりました。

八月二十一日に第一回の編集会議をもって以来、殆んど毎週末には、銀座の「国文研」事務所に集まり、十数名の人達の協力によって作業が進められました。皆さんお一人お一人のこころのこもった文章を何度も読み返しつつ編集してゆくことは、大変時間のかかる作業ではありましたが、皆さんの生き生きとした言葉や素晴らしい和歌に、幾度も心をうたれるといふ有難い経験をさせていただきました。

(一)「感想文」について

原文の長さはさまざまでしたが、ページ数の関係で、執筆者のおこころのうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録し

ました。文意の不明瞭な所は、執筆者のお気持ちを辿りながら、慎重に加筆しました。

原文のニュアンスが損はれないやう努力いたしました。万一にも取り違へてゐるやうな箇所がありましたら、どうかご容赦くださいませ。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

(二)「和歌」について

合宿では二回にわたって和歌をつくりましたが、第一回目のものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊子の巻末の「和歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていたいただいた第二回

目のものは、それぞれの感想文の末尾に入れました。十数首も詠まれた方もをられましたし、多くの方が、連作で詠んでをられました。スベースの関係で、収録の数を抑へざるを得なかったことを、お断りいたします。感想文と同じく、文法上の誤り等は、訂正いたしました。

この『感想文集』作成のため

めに休日や、勤務終了後の時間をさいてご協力いただきました藤井貢さんほか、在京の諸兄及び学生諸君に心から御礼を申し上げます。また「あらまし」作成にご協力をいただいた長

澤一成さんを中心とする九州地区学生諸君、および、第一回目の和歌の編集にご尽力いただいた折田豊生さんを中心とする熊本地区の諸兄に厚く御礼申し上げます。なほ、カメラ・レポートの写真は、亜細亜大学広報室の加藤幸雄さんに今年もお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によってできあがりましたこの『感想文集』を、是非全頁ご精読くださるやう、切願してやみません。

(内海勝彦記)

〔資料〕 第二十七回「合宿教室(霧島)」感想文集

非売品

昭和五十七年十一月一日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七一〇一八 柳瀬ビル

電話 〇三五七二一五五六〇七

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員 銚信弘・山根清

小柳志乃夫・内海勝彦

加藤多夏詩・福島徹男

